

池田會長全集十卷 中

「觀心本尊抄」講義

信心帰命の原点は「観心の本尊」

全国の会員の皆さま、一九七八年の新春、まことにおめでとうございます。「教学の年」第二年の本年冒頭ぼうとうにあたり「観心本尊抄」かんじんほんぞんしょうの一節について講義を発表することにいたしました。まず、当抄に開顕かいけんされ、末法万年の一切衆生救済のために御建立あそばされた「観心の御本尊」について、愚感ぐかんの一端を述べさせていただきます。

私は、愚昧ぐまいの身であり、とうていこの重書を講ずる資格はありませんが、ひたすら血脈けちみやく付法ふほう唯授ゆいじゆ一人ひとりであられる御法主日達上人の御指南を仰ぎながら、愚迷にして凡夫の立場から展開していく所存であります。

それは、三大秘法の南無妙法蓮華經こそ仏法の究極であり、日蓮大聖人は、末法一切衆生の成仏のために「観心の本尊」としてこれを建立くださり、遺のこされました。ゆえに、この「観心の本尊」にこ

そ、私どもの仏道修行の極理、信心帰命の原点がある。末法万年にわたって、真実の仏法実践の正しき軌道はこれ以外にありえないことを、この時にあたり、大聖人のおおせを拝しつつ、はっきりと確認しておきたいからであります。

いうまでもなく、本尊とは、根本として尊敬する当体をいいます。根本として尊敬するとは帰命と
いうことであり、帰命する対象を本尊というのであります。

さて、この帰命の対象について、大聖人は「御義口伝」に、つぎのように教示されております。

「御義口伝に云く南無とは梵語なり此には帰命と云う、人法之れ有り人とは釈尊に帰命し奉るなり法とは法華經に帰命し奉るなり」(御書全集七〇八頁)と。

ここにおおせの「釈尊」とは、文底独一本門の教主としての釈尊であり、久遠元初自受用報身、末法御本仏日蓮大聖人御自身であられます。

また「法華經」とおおせられているのも「今末法に入りぬれば余經も法華經もせんなし、但南無妙法蓮華經なるべし」(御書全集一五四六頁)と「上野殿御返事」に示されているごとく、釈尊の二十八品の法華經などでないことは明らかであります。したがって「但南無妙法蓮華經」をさして「法華經」とおおせられたと拝するのであります。

諸御抄を拝するとき、大聖人は、種々の場合に応じて、あるときは「人」の面で表現され、あるときは「法」としてこれを述べておられる。

たとえば「三大秘法抄」で本尊を明かされている御文は「人」の面であります。いわく「寿量品に

建立する所の本尊は五百塵点の当初より以来此土有縁深厚本有無作三身の教主釈尊是れなり」(御書全集一〇二二頁)と。

「報恩抄」の「日本・乃至一閻浮提・一同に本門の教主釈尊を本尊とすべし」(御書全集三二八頁)の御教示も、同じく「人」の本尊をいわれております。

これに対して「本尊問答抄」の場合は、法の本尊を示されている。すなわち「問うて云く末代惡世の凡夫は何物を以て本尊と定むべきや、答えて云く法華經の題目を以て本尊とすべし」(御書全集三六五頁)とございます。

このように、一方においては「人」としておおせられ、他方、法華經の題目、妙法蓮華經という「法」として示されている元意は、人即法、法即人を明かされるにあり、そして、一幅の曼荼羅の御本尊こそ、この人と法とが体一である人法一箇の御当体なのであります。

さきの「御義口伝」の御教示は、それを前提とされての表現であり、また、同じく「御義口伝」には「無作の三身の宝号を南無妙法蓮華經と云うなり」(御書全集七五二頁)と、人法体一の義を示されております。

しかし、この大御本尊こそ、その人法一箇の当体であることを「日女御前御返事」には、つぎのようにおおせられている。

「伝教大師云く『一念三千即自受用身・自受用身とは出尊形の仏』文、此の故に未曾有の大曼荼羅とは名付け奉るなり、仏滅後・二千二百二十余年には此の御本尊いまだ出現し給はず」(御書全集一二四

四ツ」といっています。

結論していうならば、日蓮大聖人御自身が、わが身妙法の当体と覚知された法即人の仏であり、無作三身の如来であられる。

ゆえに「御義口伝」に「無作の三身とは末法の法華經の行者なり」（御書全集七五二頁）と。

大聖人は、この無作三身如来としての御自身の生命を、そのまま一幅の曼荼羅として御本尊に顕された。そこに人法一箇の御本尊たるゆえんがあります。

四条金吾夫妻に与えられた「経王殿御返事」に「日蓮がたましひをすみにそめながして・かきて候ぞ信じさせ給へ、仏の御意は法華經なり日蓮が・たましひは南無妙法蓮華經に・すぎたるはなし」（御書全集一一二四頁）と述べられているのは、まさに、このことなのであります。

これらの御教示を信心で受ける私どもは、御本尊即、生身の日蓮大聖人と拝するのみであります。末法御本仏大聖人は、戒壇の大御本尊として総本山大石寺の正本堂にましまし、そして、法灯連綿の御法主上人のお力によって分身散体されて全世界の各寺院、各会館に、おのおのの家庭に厳然とましますのであります。

したがって、七百年前、御在世の時代に生まれあわせえなかったことを嘆く必要もありません。大聖人御誕生、大御本尊御安置の日本に住めないことを恨む必要もないわけであります。御本尊を受持し、勤行唱題を行うところ、いつの時代であれ、いずれの地であれ、朝々仏とともに起き、夕々仏とともに臥すの、常住の寂光土にあることを、深く確信していただきたいのであります。

胸中に赫々たる久遠の本地

大御本尊が人即法の御本尊であられることの背景には、この御本尊を図顕せられた日蓮大聖人が、法即人の仏であられた事実があります。いいかえると、大聖人の生命をそのまま顕された御本尊が、事の一念三千の当体であるということは「一念三千即自受用身」でありますから、大聖人の生命が自受用身でなければなりません。

御本仏のお振る舞い、その甚深の御境地を、私ども凡愚の者が拝察申し上げるのは、あまりにも恐れ多いかぎりであります。大聖人の立宗より竜口の法難、佐渡流罪にいたる二十余年の激闘は、この人本尊としての御自身の確証のためであつたと思われるのであります。

すなわち、悪世末法に妙法を弘める人が受けると記されている、法師品の沉滅度後、宝塔品の六難九易、勸持品の二十行の偈にある三類の強敵等の文を、この二十余年の大難によって、ことごとく身読されました。弘教者としての、事実の振る舞いのうえでの法華経身読は、法華経が明かしている五百塵点劫の当初の久遠本仏、また、虚空会の儀式が暗示している事の一念三千の大生命も、ほかならぬ大聖人の御生命そのものであるとの内証の境地の御確認でもありました。

「開目抄」にいわく「されば日蓮が法華経の智解は天台・伝教には千万が一分も及ぶ事なけれども難を忍び慈悲のすぐれたる事は・をそれをも・いただきぬべし」（御書全集二〇二頁）と。

ここに、二十余年にわたる筆舌に尽くせぬ大難を忍べたことは「慈悲のすぐれたる事」と表裏の関係になっていると拝せられる。なぜなら、大聖人の難は、当時の日本国民衆を救済しようとして、折伏の戦いをされたために起こったものであるからであります。

三類の強敵のうちもつとも厳しい、そして見ぬくことのむずかしいとされるせんしやうぞうじやうまん僭聖増上慢が起きたのも「立正安国論」による幕府諫曉かんぎやうを皮きりとしてでありました。もし民衆救済の大慈悲の実践がなかったならば、難は起きなかったとさえ考えられます。大聖人みずから「世間の失とが一分もなし」(御書全集九五八頁)といいきられているように、これらの難は、世間法、国法の罪によるのではない。慈悲のゆえの難であり、難のいかに大なるかをもって、そこに貫かれた慈悲の広大さを知ることができるのであります。

ゆえに私どももまた、御本仏の大慈悲の一分を受けて、この世に実践していく以上は、難を受けることは当然であります。そして、いかなる難にもひるむことなく、忍びぬいていったとき、仏法の実践の真偽しんぎが証明されることを確信していききたいと思うのであります。

ともあれ、大聖人は竜口たつのくち、佐渡の法難をもって、法華経に記されている外用げゆうの辺の予言をすべて身読しおわり、御自身、久遠御本仏としての内証を確証されるや、初めて御本尊を顕されたのであります。

大聖人の御内証においては、久遠の仏としての境地は、すでに赫々かつかつとしてあった。恩師戸田城聖先生は「清澄寺大衆中」の御文を講義されたさい、大聖人は、虚空蔵菩薩こくうぞうぼさつに、日本第一の智者となし給

えと祈願された清澄寺在住のとき、すでに御本仏と覺さとられたと拝せるといわれておりました。

事実、もし、末法御本仏としての御境界きょうがいを得ておられなかったならば、三十二歳の立宗宣言もなかったはずであります。時すでに釈尊の白法は隠没おんもつした末法であることは明々であり、したがって釈尊の仏法をもって立てられる道理がありません。釈尊の仏法ではない新たなる仏法を立てられたことは、御自身が末法救済の御本仏であるとの御確信があったればこそであります。

しかも、大聖人は二十余年間、釈尊の法華経を身をもって読みきられ、大聖人の出現によって釈尊の法華経は虚妄こもうでなくなったといえるまで実践しぬいて、いよいよ、御自身が御本仏としてのお振る舞いに移られたわけであります。竜口、佐渡の時期は、まさにこの発迹顯本はつしやくけんぽんの時でありました。

己心を観じて妙法と見る

さて、大聖人は、末法万年の衆生の成仏のために、御本尊を顕あらわされました。御在世当時の人々は、法即人の当体であられる大聖人という仏の生命に縁することができ。しかし大聖人も、いつかは入滅めつなされる。その滅後の衆生のために、御自身の生命を曼荼羅まんだらの御本尊として顕し、遺のこされたのであります。

この人即法の当体としての御本尊は、一往は法本尊でありますが、再往は人法一箇にんぽういつかの御本尊であります。ゆえに「南無妙法蓮華経 日蓮」と中央にしたためられております。南無妙法蓮華経は「法」、

日蓮在御判は「人」をあらわすのであります。

このように、顕された大聖人のお立場に約せば、御本尊の根本的特質は「人法一箇」ということであられますが、では、御本尊を拝する私どもの立場でいえば、なにがもつとも根幹となる特質でありましょうか。それを日蓮大聖人は御みずから「観心」であると教えてくださっているのであります。法本尊開顕の書を「観心本尊抄」と題されたのは、このゆえであります。

「観心」とは、どういうことかといえ、本尊抄の文中では、一往の立場で「我が己心を観じて十法界を見る是を観心と云うなり」（御書全集二四〇頁）と示されております。そして鏡を用いなければ、自分の眼、耳、鼻等の六根を見ることができないように、己心の十界も、仏法の鏡なくしては見ることができない、と教えられています。

いわく「設い諸経の中に処処に六道並びに四聖を載すと雖も法華経並びに天台大師所述の摩訶止観等の明鏡を見ざれば自具の十界・百界千如・一念三千を知らざるなり」（御書全集二四〇頁）と。

これで明らかのように「十法界を見る」といっても、一念三千を見るということであります。しかして、たんに一念三千というなら、それは理であり、南無妙法蓮華経こそ「事の一念三千」であるというのが、大聖人の結論であります。したがって「我が己心を観じて十法界を見る」とは、わが己心を観じて南無妙法蓮華経を見ることにほかなりません。

十界のいかなる衆生であれ、わが己心の究極の実相は南無妙法蓮華経であります。この本来、わが身が妙法の当体であるという真理を教えたのが、法華経の迹門であります。

なかんずく述門方便品の「諸法実相」が、これを述べたものであることを、大聖人は「諸法実相抄」に、つぎのように論じられておられます。

「下^{しも}地獄より上^{かみ}仏界までの十界の依正の当体・悉^{ことごとく}く一法ものこさず妙法蓮華經のすがたなりと云ふ經文なり」(御書全集一三五八頁)、「万法の当体のすがたが妙法蓮華經の当体なりと云ふ事を諸法実相とは申すなり」(御書全集一三五九頁)と。

しかしながら、本来、わが身が妙法の当体であるという道理だけでは、成仏にはならない。もし、それだけで成仏であるなら、万物は等しく妙法の当体でありますから、仏と衆生の差別が現実問題としてあるはずがないし、仏道修行も必要なくなるはずです。

問題は、わが身が妙法の当体であることを、自身が覚知するかいなかにある。この事実のうえでの覚知した仏の境地を明かしたのが本抄であります。そして、覚知したとき成仏といい、それを知らずに迷うのを凡夫、衆生というのであります。これを「諸法実相抄」に「然れども迷悟の不同にして生^{しょう}仏・異なるに依って俱^く体・俱^く用の三身と云ふ事をば衆生しらざるなり」(御書全集一三五九頁)と述べられていることは、すでにござんじのとおりであります。

また「一生成仏抄」にいわく「夫^それ無^む始^しの生死を留^{とど}めて此の度^{たひ}決^{けつ}定^{じよう}して無^む上^{じやう}菩^ぼ提^{だい}を証^{しやう}せんと思はばすべからく衆生本有^{ほんゆ}の妙理を觀^{くわん}ずべし、衆生本有の妙理とは・妙法蓮華經是なり故に妙法蓮華經と唱へたてまつれば衆生本有の妙理を觀^{くわん}ずるにてあるなり」(御書全集三八三頁)と。

衆生本有の妙理、すなわち、わが身が本来、妙法蓮華經であることを觀^{くわん}ずることが「無上菩提を証

すること」、すなわち成仏の本義であります。わが身を妙法と観ずるとは、いいかえれば「観心」でありますから、「観心」とは、すなわち成仏得道の謂いにほかならないのであります。

ゆえに「観心の本尊」とは、十界の衆生が、わが身妙法の当体なりと観じて成仏するための本尊であり、十界のいかなる境界であれ、それを受持するならそのまま、いわゆる即身成仏できる御本尊ということになるわけであります。この「観心の御本尊」を建立された大聖人によって、初めて、あらゆる衆生の成仏の直道じきどうが開かれたのであります。

“の”の字を形見と思え

「観心本尊抄」の題号をめぐって、第二十六世日寛上人は「観心の本尊」と読むべきことを強調され「“の”の字を形見と思え」とおおせられたことは、あまりにも有名であります。それは「心の本尊を観る抄」とか「心を観る本尊抄」とかの、大聖人の本意から外はずれた邪義を破していわれたものであります。それ以上に「教相の本尊」に対して「観心の本尊」であることを明示せんがためであられたのであります。

「教相の本尊」とは「文上脱益・迹門理の一念三千」であり、それに対し「文底下種・本門事じの一念三千」を「観心の本尊」といいます。すなわち、釈尊の説いた脱益の文上の一念三千ではなく、文底秘沈の下種の一念三千こそ、大聖人の顕された御本尊の正体であるということが、ここでの論議の主

題であることはいうまでもありません。

この点を、さらに広い立場で考察してみるならば、過去のあらゆる宗教が立てた本尊というのは、信仰する衆生の外にあって、衆生の運命や生涯を支配し動かしていると考えられた超越的な力の具象化、あるいは表現でありました。したがって、そこに求められる信仰の姿勢は、あるいはそうした力に救いを求め、赦しを乞い、慈悲を願い、怒りをといてくれるよう祈る、奴隸的ないき方であったと
いって過言ではありません。

そして、一般的にはそのような信仰姿勢は、それらの本尊に直接仕える神官、聖職者を、本尊である超越者とのあいだをとりもつ存在であるとし、現実社会においても厳しい差別の相を現出してきたのであります。また同時に、世俗の体制内においても、王などの権力者を、特別の恩寵を受けた存在であるとする事により、身分制的階級構造を生みだすことになった。

このように、過去のほとんどの宗教は、人間の平等の尊厳性という考え方に対して、真っ向から否定的な非人間主義、反ヒューマニズムの牙城というべき様相を呈してきたのであります。

「教相の本尊」すなわち「脱益の一念三千」は、もとより、それらと同等にみるべきではありませんが、すでに得脱した立場とする以上、迷いの底にある衆生とは天地の相違があり、そこに、既存の多くの宗教がもたらしたのと同じ弊害に陥る要因を多分にもっていたのであります。

文上脱益法門を立てた天台仏法が、民衆とは縁の遠い特権的宗教となり、もっぱら王侯貴顕と結びつかざるをえなかったその歴史をみると、この事実は明々白々であります。

それに対し、日蓮大聖人の「観心の本尊」は、文底下種の事の一念三千であります。この観心とは、日寛上人によれば、我等衆生の観心であります。ゆえに「観心の本尊」とは、人々の生命の外にあるものではなく、本来、平等に、生命の内にある妙法という尊極そんごくの当体につながっていくのであります。そこでは、あらゆる人にとって、本尊と自分とのあいだに、まったく距離がないと説くのであります。ゆえに、なにもものも入り込むすきまはない。衆生は、ただ朝な夕な唱題して、自身が妙法の当体であることを覚さればよいのであります。

だが、これを覚るには、それだけの「智」が必要です。その「智」を得る方法を、法華経は「信」と教えたのであります。「以信いしん代慧だいゑ」「以信得入とくにゅう」というのは、それであります。日蓮大聖人の教えでは、この「信」がさらに具体的に「受持」として明確化されます。それは、受持する当体として御本尊が顕されたことによろといえます。

したがって、御本尊を受持することが、わが身を妙法の当体と覚る観心であり、これを「受持即観心」というのであります。

三大秘法も「大御本尊」に収まる

最後に、三大秘法に配して「観心の本尊」を拝するならば、御本尊それ自体が本門の本尊であり、御本尊を信受し唱える題目は本門の題目、御本尊所住の処が本門の戒壇であります。この三大秘法

も、究極するところは「観心の本尊」の一大秘法におさまることを知らなければなりません。

すなわち、本門の本尊とは、久遠元初自受用報身としての生命それ自体であり、本門の題目は、この無作三身の生命の宝号たる南無妙法蓮華經であります。すでにあげた「法華經の題目を以て本尊とすべし」(御書全集三六五頁)との「本尊問答抄」の御文に照らしても明白であります。

さらに、戒壇もまた、壇とはマンダラーの訳であり、その本来的意義は、御本尊即戒壇であります。これを歴史的にみると、インドにおいて、僧への授戒(じゆかい)の場として壇を設けたのが戒壇の始まりであります。魔を寄せつけないために四隅に四天王を配して守護せしめ、中央に釈尊像を安置して、そこで授戒の儀式を行ったといわれております。

この中央の仏の資格を明らかにするために、種々の脇士(きしうじ)がおかれ、その形式がととのえられていった。本尊抄のなかにもおおせられているように、小乗の釈尊は迦葉(かじよう)、阿難(あなん)を脇士とし、権大乘や法華經迹門の釈尊は文殊(もんじゆ)、普賢(ふげん)等を脇士としたのであります。

しかるに釈迦、多宝を脇士とし、そのさらに脇士が上行等の四菩薩となっている、久遠元初の仏を中心にした戒壇即本尊は、正像に未曾有であり、これが大聖人御建立の「観心の本尊」なのであります。この御本尊が即事(じ)の戒壇であるという深義については、すでに日達上人が明確にお説きくださっているとおりであります。大御本尊を三大秘法(そうざい)総在の御本尊と申し上げ、三大秘法といえども一大秘法に帰着するといわれるゆえんは、ここに存するのであります。

この三大秘法総在の御本尊こそ、弘安二年十月十二日御図顯の本門戒壇の大御本尊であることは、

いうまでもありません。「聖人御難事」に明らかなように、日蓮大聖人の出世の御本懷はここにつきるのであり、末法万年の人類救済のために、完璧に法体は確立せられたのであります。

日寛上人の文段には、大御本尊の功德の廣大深遠を、つぎのごとく讃えられております。

「これ則ち諸仏諸經の能生の根源にして、諸仏諸經の歸趣せらるる処なり。故に十方三世の恒沙の諸仏の功德、十方三世の微塵の経々の功德、皆咸くこの文底下種の本尊に歸せざるなし。譬えば百千枝葉同じく一根に趣くが如し。故にこの本尊の功德、無量無辺にして廣大深遠の妙用あり。故に暫くもこの本尊を信じて南無妙法蓮華經と唱うれば、則ち祈りとして叶わざるなく、罪として滅せざるなく、福として来らざるなく、理として顯れざるなきなり」

どうか、われわれは眞の仏法者として、このすばらしい大御本尊に巡りあえたことを無上の喜びとし、一人の退転もなく、いよいよ「受持即觀心」の修行に励み、進んではこの大法を広宣流布して、所願満足の人生を送っていただきたいことを心よりお祈り申し上げます。

「無二の志」でこの書を開拓

今回講義しますのは、本抄のなかでもっとも重要な、受持即觀心について説かれた段であります。が、講義にあたって一言申し上げておきたい。それは、本抄を拝読し、学ぶ心がまえについてであります。

この点に関しては、本抄御述作の翌日付でしたためられた「観心本尊抄送状」に、日蓮大聖人御みずから述べられているので、この送状の御文を中心に申し上げることにしたいと思います。

はじめに帷かたびら、墨、筆等の御供養に対するお礼を述べられ「観心の法門少少之を注しよして太田殿・教信御房等に奉る」(御書全集二五五頁)と、本尊抄のことをいわれております。

「少少之を注して」ですから、軽い内容のように聞こえますが、あくまでこれは御謙遜けんそんされているのであって、御本意はつぎに述べられるように、たいへんな甚深の法門であり、心血をそそがれた書であります。

すなわち「此の事日蓮身に当るの大事なり之を秘す、無二の志を見ば之を開拓かいたくせらる可べきか」と、この「観心本尊抄」の内容が、大聖人の内証の生命を明かした法門であり、いいかげんな姿勢で読んでは絶対にならないことを戒められております。

富木殿、太田殿、曾谷殿等、ここに名前を記されている人々は、一往、その信心を認められて許されたのであります。しかし、もし、他の人に見せる場合は「無二の志」の人でなければならぬと断られているのであります。「無二の志」とは、どこまでも大聖人を信じて疑わない人、どんなことがあっても退転せず、生涯、信心を貫く人、また、その覚悟があるということなのです。

このことから、私どももまた、本抄を拝し学ぶには、生涯不退転の確固たる信心、そしてさらに進んでは、御本仏大聖人の生命と大慈悲を受け継いで、末法広布に邁進まいしんする燃ゆるがごとき大情熱に立つべきであることを、強く訴えておきたいのであります。

また「此の書は難多く答少し未聞の事なれば人耳目を驚動す可きか、設い他見に及ぶとも三人四人坐を並べて之を読むこと勿れ」と。

仏法の歴史において、究極の真理、法体は「言語道断・心行所滅」で、言葉としてあらわしうるものでも、思惟の及ぶところでもないとされてきました。いわんや、具体的な当体として顕しうるものとは、考えられもしなかったのでありましょう。

それを大聖人は、御本尊として具体化し、題目として万人が唱え実践できるものとされたのであります。この極理は、難信難解であり、既存の知識や道理で説き明かせるものではありません。

したがって、これを公にするなら、疑惑を生ずるのみで、それがひいては不信、誹謗に発展し、かえって多くの人々を墮獄の罪に追いやることにすらなる。このことから「之を秘す」といわれ、「三人四人坐を並べて之を読むこと勿れ」と戒められているのであります。

ただし、だからといって、絶対にだれにも見せてはならないというのではないことは「無二の志を見ば之を開拓せらる可きか」の御文からも明らかです。開拓の拓という字が、衣偏になっていことに注意してください。すなわち、真に胸襟を開いて語り合える同志であったならば、ともに研鑽してもよいとおおせなのであります。

この御文に関連して、日寛上人は、本尊抄を講義されたとき、受講する人々が異体同心であり、信心無二であるがゆえに「四十余輩寧ろ一人に非ずや」といわれ、この戒めをまぬかれていると断ってなされたエピソードがあります。

原理は同じであります。私どももまた、御本尊を無二と信ずる同志の集いであり、広布の大願に立った異体同心の同志であります。

むしろ、これだけの膨大な人々が、これほどまでに無二の志、異体同心の生命をもって、大聖人己心の法である本抄を、こうして拝し學んでいる姿を、大聖人はどれほどお喜びくださっていることかと、私は確信するのであります。

同送状の終わりに「仏滅後二千二百二十余年未だ此の書の心有らず、国難を顧みず五五百歳を期して之を演説す乞い願くば一見を歴來るの輩は師弟共に靈山浄土に詣でて三仏の顔貌を拝見したてまつらん」とおおせられております。

私は、本抄を拝するたびに、佐渡流罪という国家権力による大難のなかでこの書をしたためられた大聖人のお姿をしのび、大慈大悲に涙を禁じえません。その身は流人であり、念仏者たちは昼夜に大聖人の命をねらっていた。

全編十七紙からなる本抄の御真筆は、前半と後半が同質紙ではなく、ふつうの和紙と雁皮紙（ガンの樹皮の繊維を原料にして作った和紙）を用いられ、裏にもしたためられている。――筆や紙も思うように手に入らなかった、当時の窮状がしのばれるのであります。

そのなかで書かれた本抄は、まさに心血をそそいでしたためられた書であります。

ゆえに本抄を一見した人は、仏法の真髓にふれたのでありますから、誤りなく信心を全うし、かならず成仏を遂げなさい、と励まされているのであります。

「三仏の顔貌げんみょうを拝見」するとは、釈迦、多宝、分身諸仏を三仏ということはご承知のとおりですが、この三仏はまた、法・報・応の三身をあらわし、文底の辺からいえば無作三身如来を意味するのであります。

そして、その顔貌を拝見するとは、わが身が無作三身であると覺きこることであり、成仏得道ということです。「靈山淨土に詣で」は依報に約してのおおせであり、「三仏の顔貌を拝見」は正報に約していわれております。

ここで拝読するのは、全編の一部分ではありますが、もっとも肝要の個所であり、意義はすこしも変わるものではありません。

とくにこの御書が、佐渡御流罪中に著されたということの深い意味を、かみしめていただきたいとします。大聖人は、大難の真ただ中において法本尊を開顯され、仏法の極理を、私どもに教えてくださいださっているであります。

ここより始まって、戒壇の大御本尊御建立にいたる大聖人の御生涯を拝するとき、私は、本尊抄にとどめられた甚深の意義が感じられてならないのであります。

ゆえに、この御本尊を根本として強盛な祈りを奮い起こすとき、かならず難は即、成仏得道へと開かれていくのであります。私は「観心本尊抄」の深義を、そのように拝したのであります。

どうか、ひとたび本抄を拝する以上は、なにがあっても退くことなく、かならず信心を全まっうして、わが人生を縦横に生きぬき、悔いなき生涯の歴史をつづっていただきたいのであります。

仏の智慧を生む根源の種子を内包

問うて曰く^{いふ}上の大難^{かみ}未だ^{いま}其の会通^{えつう}を聞かず如何^{いかん}

「観心本尊抄」のなかでも、もっとも重要な受持即観心の義を明かすにあたって、このすこしまえに一つの疑難を設けられています。それは仏のもっている功德、力、智慧^{ちえ}、威光^{いこう}は、あまりにも莊嚴^{しょうごん}であり、広大、甚深^{じんじん}である。そのようなすばらしい仏の生命が、われら凡夫の小さな生命のなかに具^{そな}わるなどということは、とうてい信じられない、ということであります。

それに対して、前段では、法華經の開經である無量義經の、諸仏の国王と是の經の夫人の和合によって菩薩の子が生ずるという文、法華經の結經である普賢經^{ふげん}の「此の大乗經典は諸仏の宝蔵、十方三世の諸仏の眼目なり。乃至^{ないし}、三世の諸の如来を出生する種なり」等の文をあげられております。すなわち、たしかに、仏のもっている福德は無量であり、智慧は深遠、力は広大であるけれども、それらを生じたところの種子があるのだというのであります。

爾前権經においては、仏の福德や力、智慧の一つ一つについて、それを生ずる因の修行を説き、それらをつぎつぎと、一つずつ行ずることによって、仏と等しい無量の福德、智慧を具えさせようとし

た。ゆえに、その実践は、たいへんな長い期間を要する歴劫修行とならざるをえなかったのであります。たとえていえば、樹木の生育過程を探るのに、一枚の葉、一本の枝の分析から始めるようなものでありましょう。それに対し、根源の種子に目を向けるように促しているのが、法華経であります。

法華経の開経である無量義経は「無量義とは一法より生ず」と説き、そうした無量の福德、智慧を生ずるただ一つの法が実在することを宣言しました。そして法華経の結経である普賢経は、この一法から、あらゆる仏の福德と智慧が生じていることを述べて、その偉大さを讃えたのであります。

まさに、この「一法」それ自体を、真っ向から説き明かした經典こそ、法華経にほかなりません。そしてさらに、この法華経が明かしている「一法」の正体、種子そのものとは、法華経の題目、妙法蓮華経であり、すなわち南無妙法蓮華経なのであります。

したがって、いっさいの仏の種子である妙法蓮華経を受持する——すなわち、凡夫がわが生命に南無妙法蓮華経を植えるとき、仏のいっさいの功德、智慧は、ことごとく凡夫の生命に具わるのであり、これを大事に育てるならば、凡夫がそのまま功德と智慧に満ちあふれた仏となる。——これが、受持即観心の義であります。

ともあれ、この「問うて曰く……」は、さきの疑難に対する答えの結論を求めているのであります。ちなみに「会通」とは「和会疏通」の意で、異議や異説を照らし合わせ、その本義を明確にして筋道を通すこと、つまり納得ができるようにすることをいいます。

六波羅蜜は自然に在前

答えて曰く無量義經に云く「未だ六波羅蜜を修行する事を得ずと雖も六波羅蜜自然に在前す」等云云

これは無量義經に「是の經の不可思議の功德力」として十個あげられているなかの、第七に述べられている文であります。いうまでもなく、無量義經は法華經の開經と位置づけられる經でありますから、ここである「是の經」とは法華經であり、なканずく妙法蓮華經の題目をさします。

いま、その前後をあげますと、つぎのようにあります。

「若し善男子、善女人、仏の在世若しは滅度の後に於いて、是の經を聞くことを得て、歡喜し信樂し希有の心を生じ、受持し誦誦し書寫し解説し説の如く修行し、菩提心を発し、諸の善根を起し、大悲の意を興して、一切の苦悩の衆生を度せんと欲せば、未だ六波羅蜜を修行することを得ずと雖も、六波羅蜜自然に在前し、即ち是の身に於いて無生法忍を得、生死、煩惱一時に斷壞して、菩薩の第七の地に昇らん」(妙法蓮華經並開結一〇八頁)

すなわち、真底から歡喜と求道心と感謝の念をもって、自行化他にわたる実践に励むならば、菩薩

の修行の要諦とされている「六波羅蜜」の一々を修行せずとも、自然に具^{そな}わりあらわれてくる、との意であります。それは「是の經」すなわち妙法蓮華經に、いっさいの諸仏の宝蔵が包含^{ほうがん}されているからであります。

ここで六波羅蜜について、若干、申し上げますと、これは大乘の菩薩が悟りを得るために修行しなければならぬとされた六種の修行で、それだけについて説かれた「大乘理趣六波羅蜜多經」という經典もあり、古来、大乘仏教においては、必須^{ひつす}の修行として重視されてきました。

波羅蜜とは、梵語のパーラミターの音写で、その意味は、度^ど、到彼岸^{とうひがん}等と訳されます。迷い、苦しみの境涯を此岸^{しがん}とし、涅槃^{ねはん}、悟りの境地を彼岸として、此岸から彼岸へ渡るということです。そのための修行の内容が六波羅蜜のそれぞれであります。

このことと関連して申し上げておきたいことは、無量義經のこの文は、妙法をたもつ人は修行として六波羅蜜を行ずる必要はないと教えているわけでありますが、六波羅蜜を行じたことによって得られる種々の徳は、おのずから具わるとの意であることを見逃^{みのが}してはならないということです。

六種の修行は人間の条件

では、六波羅蜜のあらわしているものはなにか。これを私は、端的に言って人間の条件をあらわしたものだといってよいと考えるのであります。

古来、人間の条件とはなにかという問題は、多くの思想家によって論じられ、また文学者を刺激しつづけてきたテーマでもあります。さまざまな人が、それぞれに、この問題に対して答えを模索してきました。六波羅蜜とは、ある意味で、そうした大きな疑問への、一つの集大成された回答ともいえるのではないかと考えるのであります。

そして、それは同時に、人間革命運動を進める私どもにとって、自己の変革、完成のために、黄金の光を放つ指標ともなるものといえましょう。確固不拔の生命観に立脚した人間革命の実証とは、要するに、どのようなことになることなのか、この目標がここに示されているといえるのであります。

まず六波羅蜜の第一は「布施」です。

これには大きく分けて、財物を与える財施と、法を説き教える法施と、恐怖を取り除き安心を与える無畏施の三つがあるとされている。このそれぞれについては、ここでは詳しく述べませんが、布施といっても、財物を与えるだけが布施ではない。むしろ法を説き教えること、あるいは恐怖を除き安心を与えることのほうが、仏法においてはより大きい比重を占めております。

財物の布施によって救えるのは、わずかの期間にすぎない。財物自体、限られておりますから救える範囲も狭くなります。たとえば飢えた人にパンを与えても、一日の命をつなぐことができるだけです。だが、なんらかの仕事の技を教えてあげれば、その仕事によって一生、飢えないで生きていけるでしょう。これは広い意味での法施です。

さらにまた、生きていくのに困らないですむだけの技術をもっているけれども、絶望に陥り、生き

る意欲すら失っている人々に対しては、その不安や恐怖を取り除き、安心を与える無畏施が、大きい布施となります。

財施が、どちらかといえば、依存心を増長させ、個人の自立を奪う結果になりがちなのに対して、法施、無畏施は、自立の心と力をもたらしめます。

そして仏法がもっとも重視しているのも、法施であり、無畏施であることを忘れてはなりません。私どもの実践に約せば、仏法を教え、導く折伏弘教、講義、指導などは、無畏施を含む法施といえます。

ともあれ、妙法をたもった場合、布施行の根底を形づくるものは、慈悲であります。しかし、恩師はよく「われわれは凡夫である。慈悲といっても、なかなかそれを実践できるものではない。それに代わるものは勇氣である。勇氣が慈悲に通ずるのである」ということをいわれておりました。

すなわち、いかなる怒濤どとうにも決然と立って、妙法弘通に勇往邁進ゆうおうまいしんしていく姿そのものが、慈悲の行につながっていくのであります。どうか皆さんは「日蓮が弟子等は臆病おくびょうにては叶かなうべからず」(御書全集一二八二頁)の御金言を胸に、広布の街道を、朗らかに進んでいってください。

つぎに、六波羅蜜の第二は「持戒」であります。

持戒の戒とは「防非止惡ぼうひしあく」の戒とされ、身口意にわたる惡業あくごうを断じ、いっさいの不善を禁制することを行います。元来、仏教を修行する者が守るべき規範として定められたものですが、仏教修行者が

出家僧団に代表された初期のころに、その集團生活の規律のため定められたところから、戒といえ
ば、生活のあらゆる面にわたって束縛する煩瑣なものという印象が強い。

そしてそのために、時代が変わり、状況が異なると、そうした戒は、そのままでは実践できないも
のとなりました。いいかえると、戒は、人間性にとって、プラス面よりもマイナス面をもつ結果とな
ったのであります。

戒律を主体とする小乗仏教が、時代でいえば像法、末法、地理的にいえば中国、日本において、も
はや顧みられなくなったのは、このためであるといえます。

しかし、これはある社会の、ある状況下につくられたものを、異なった状況の人々に、そのままあ
てはめることが誤りであるということであって、戒そのものの原点に立ちもどっていえば、それぞれ
の状況のもとに、それになかった戒が立てられるべきであります。

人間の心には、仏法の十界互具論が徹底的に解明しているように、善の心もあれば悪心もありま
す。「治病大小権実違目」のつぎの御文は、このことを明確に示されているのであります。

「善と悪とは無始よりの左右の法なり権教並びに諸宗の心は善悪は等覺に限る若し爾は等覺までは互
に失有るべし、法華宗の心は一念三千・性惡性善・妙覺の位に猶備われり元品の法性は梵天・帝釈等
と顯われ元品の無明は第六天の魔王と顯われたり」(御書全集九九七頁)

妙覺の位、すなわち仏といえども、十界を具足しており、一念三千の当体であります。ゆえに地
獄、餓鬼、畜生、修羅等の惡心も、当然、具わっているとおおせです。いわんや、われわれ凡夫に

おいて、これらの悪い生命が具わり、つねにその働きを顕現させようとしていることはいうまでもありません。

餓鬼、畜生、修羅等の悪心は、本来、生命のもっとも基本的な動因^{どういん}である生存本能と結びついており、そのゆえに、もっともあらわれやすい働きといえる。これに対して、善心の代表である声聞、縁覚、菩薩等の働きは、そうした自己の醜^{みにく}い深淵^{しんえん}から飛翔^{ひしやう}しようとするもので、強い引力に逆らわなければならぬでありましょう。

したがって、悪心に引きずられないようにすることは、絶えまない用心と努力とを必要とする。それは、あたかも、險難^{けんなん}の断崖^{だんがい}の道を進むようなものでありましょう。「防非止惡」すなわち戒^{かい}をたもつということは、この險路^{けんろ}を過^{あやま}たないでハンドルを操作するようなものであります。

一般的にも、自分自身の意思でみずからに課した義務も、戒^{かい}ということができましょう。

ロマン・ロランが「ベートーベンの生涯」について記している文に次のようなところがあります。

「彼は自己に課せられていると感じた義務についてしばしば語っている。それは自己の芸術を通じて『不幸な人類のため』『未来の人類のため』に働き、人類に善行をいたし、人類に勇気を鼓舞し、その眠りを揺り覚まし、その卑怯^{ひきよう}さを鞭^{むち}うつことの義務である。甥^おへの手紙にも書いている——『今の時代にとって必要なのは、けちな狡^{ずる}い卑怯^{ひきよう}な乞食根性を人間の魂から払い落すような剛毅^{こうぎ}な精神の人々である』と」（片山敏彦訳）

このベートーベンが「自己に課せられていると感じた義務」も、彼にとっては生きていくうえでの

一つの戒であったといつてよいでしょう。

この現代的に言えば自己規制が戒であり、その意味において、重要な人間の条件と考えられるのであります。

六波羅蜜の第三は「忍辱」であります。

成仏という最高の理想をめざして登攀する以上、荊棘の道があるのは当然としなければなりません。「山中の賊を破るはやすく、心中の賊を破るは難し」といわれますが、実際、仏教經典には、仏道修行をする人が、いかに大きな苦難を忍び、障害を乗り越えなければならなかったかが、数えきれないほどあげられております。

舍利弗が過去において、婆羅門から眼を乞われて与えながら、そのあとの処遇に耐えきれず退転してしまったことは、忍辱の厳しさをあらわしたエピソードといえましょう。

釈尊自身、九横の大難と呼ばれる多くの迫害や苦しみに遭いながら、それを耐え忍んだことは周知のとおりであります。「されば釈迦如来の御名をば能忍と名けて此の土に入り給うに一切衆生の誹謗をとがめずよく忍び給ふ故なり」（御書全集八八五頁）、また「此の世界をば娑婆と名く娑婆と申すは忍と申す事なり・故に仏をば能忍と名けたてまつる」（御書全集九三五頁）と、日蓮大聖人も、忍辱ということを、釈尊の特質として強調されております。

さらにいえば、末法御本仏日蓮大聖人こそ、釈尊よりもさらに大きい苦難を耐え忍ばれた、真実の

「能忍」であられました。惡世末法に逆縁さやくえんの衆生を救うために出現された大聖人の遭あわれた難は、客觀的にみても、釈尊のそれより厳しいものであったことはまちがいありませんし、經文にも「沉滅度きようめつど後」と予記せられていとおりであります。

これは仏道修行、仏法実践にかかわる問題でありますが、広くいえば、この世界を人間として生きていく過程においても、思うにまかせないこと、つらいこと、苦しいことは、つきものであります。それを耐えられないで、若くしてみずから生命を断つ傾向が、一部ではありますが顕著になっていることは悲しむべきことであります。

もとより、この人間社会から、苦しみをもたらずようなことは、できるだけ取り除き、すべての人が人生を楽しんで生きられるよう、互いに力を合わせるべきであります。まして、互いに争いあい、いじめあうような愚はなくすべきです。だが、それでもなおかつ、避けることのできない苦難は、どこまでもつきまとうと考へなければなりません。それに耐えぬくこと、さらには、己おのれの信ずる正義のために、あらゆる苦難を耐え忍ぶこと——これは、人間としての大事な条件なのであります。忍辱とは、それを教えたものといえましょう。

六波羅蜜の第四は「精進しょうじん」です。これは、これまでの布施、持戒、忍辱、およびこのあとの禪定ぜんじよう、智慧の五つの波羅蜜を、心身ともに力をつくして修行することをいいます。

精進の意味は、精とは無雜むざつ、進とは無間むけんと釈されるように、純粹に、絶えまなく実践することであ

ります。

これを敷衍^{ふたん}して、人間としての生き方という立場で考えてみたいと思います。人間は、だれしも未完成であります。凡夫であり、喜怒哀楽に生きる生身^{なまみ}の存在であるかぎり、未完成は当然でありましよう。真実の宗教とは、そうした微妙な感情を、ある特定の方向へと圧迫するのではなく、喜怒哀楽のヒダを一本一本たどりつつ、その根底から生きる勇氣と生命力を奮い起こさせていくものであります。私は、未完ということは、むしろ人間の紋章^{もんしょう}であるとさえ思っております。

しかし、それゆえにこそ、向上ということを、欠かすことができないでありましよう。未完であるからこそ向上心が必要なのであり、向上があるからこそ人間といえるのであります。進歩と向上への努力を失えば、人間社会は、畜生界、または修羅閻^{しゅらえん}靜^{じやう}の巷^{ちやう}と化してしまふのであります。ここに、つねの精進が要請されてくるのであります。コマは回転しているからこそ、細い心棒によって立つことができるのであります。また自転車は、走り続けることによって、平衡^{へいこう}を維持しております。人間も同様でありましよう。

六波羅蜜の第五は「禪定^{ぜんじやう}」であります。

禪とは、静慮^{じやうりょ}と訳し、心を一つに定めて真理を思惟^{しゐい}することをいいます。釈尊が、苦行を捨ててナイルンジャーナール河で沐浴^{もくよく}し、スジャーターの捧げた乳粥^{ちちがゆ}を食べて、心身ともに爽快^{そうかい}になり、菩提樹の下で瞑想^{めいそう}に入つたのは、この禪波羅蜜の代表といえます。

くだって中国の天台大師は、一般的に観念觀法の仏法といわれるように、一心三觀・一念三千の法を立て、禪定の修行をとりわけ重視しております。

このように、禪定といえ、仏道修行の仕上げともいふべき重要な実践とされているわけでありますが、広く人間の生き方の条件としても、きわめて大切な要素の一つであります。

この広い意味での禪定とはなにかといえ、人生において、達成すべき目標、理想、自分が生きていくうえで根本のよりどころとするものをもつことでありましょう。さきにあげた忍辱といい、精進といっても、明確な理想と確固たるよりどころなくしては、挫折せざるをえないでしょうし、耐えぬいて挫折はまぬかれても、事實は彷徨に終始してしまふであります。

初代会長牧口常三郎先生は、あの獄中にあつても、悠々たる心境であられました。それは、つぎのような獄中書簡の一節からもうかがえるのであります。

「警視庁と異つて、三疊一人のアパート住居で、本が読めるから、樂であり、何の不足はない。心配しないで留守を守って下さい。……独房で、思索が出来て、却つてよい。朝夕の勤行、外に特別の祈願をまじめに怠らない。……お互に信仰が第一です。災難と云ふても、大聖人様の九牛の一毛です、とあきらめて益々信仰を強める事です。廣大無辺の大利益に暮す吾々に、斯くの如き事は決してうらめません。経文や御書にある通り必ず『毒変じて藥となる』ことは今までの経験からも後で解ります」

まさに、この澄みきった心と高邁な氣迫は、生涯を広布殉教に生きぬいた禪定の心からくるもの

と、私は推察するのであります。

社会的にいつても、そのときどきの状況や、ときにはむなしい風評にさえ、右へ左へと揺れ動く民衆の心の不安定さ、どこへ暴走するかわからない危険をはらむのは、こうした禅定という指標の欠如によるともいえるのであります。そして、そのあげくは、社会をあげて人間が人間らしい生き方というものを見失い、互いに傷つけあい、殺しあう事態にさえ立ちいたる。人類の歴史の示すところは、まさにこの人間の悲しむべき性の露呈であり、それゆえにこそ、人間が真実に生命のよりどころとするにたる仏法の広宣流布こそ、私どもの恒久平和へのもっとも根底的な貢献の道と信ずるのであります。

最後に、六波羅蜜の第六は「智慧」であります。これは、一切諸法に通達し、邪見を取り払って真実を正しく見極める智慧を得ることとされておりあります。

仏道修行の究極の目的は、いうまでもなく成仏することでありありますが、仏とは、覚者すなわち覚り、智慧を得た人の意であります。このことは、仏の原名である仏陀が、覚り、智慧を意味する菩提と同じ語である事実から明瞭に知ることができます。

覚り、智慧といっても、現代的に言えば物理学のそれもあれば、経済学、数学等のそれもあるように、多種多様であります。そのように多岐にわたり、多彩に広がる「智慧」に対して、そのすべての根源であり、すべてを包含する、最高究極の智慧が仏の得る智慧であります。

ゆえに、仏の得るこの智慧を、梵語で「阿耨多羅三藐三菩提あうたらかんみやくさんぼだい」というのです。阿耨多羅は無上、最高の意で、三藐は正等、正遍しょうへんと訳し、清浄にして偏頗へんぱがない、いっさいを包含していることを意味しています。三菩提は正覚、正しい智慧ということでもあります。これを総称して「無上正遍知むじょうしょうへんち」「無上正等覚」と訳されております。

したがって、六波羅蜜にいう智慧とは、こうした仏法の究極的な覚りからでた智慧をいうのでありますが、広く人間のあり方として考えても、智慧は、古来、洋の東西を問わず、人間の基本的な条件とされてきたものであります。

西洋において、学問的に現人類を「ホモ・サピエンス」と呼んで、先行の旧人や猿人と区別しているのも、この一つであります。ちなみに、ホモ・サピエンスとは賢い人、知性ある人、智慧ある人の意であることは、周知のとおりです。古代インドでも、人間のことをマヌシャと呼びましたが、これは「思惟する人」の意で、やはり智慧を人間の特質とする考え方からでたものであります。なお、これは言語学の問題になりますが、同じインド・ゲルマン語系であるドイツ語で、人間をメンシュというのは、このマヌシャの転化と考えられます。

ともあれ、智慧によって人間は、あらゆる現象を正しく把握はあくし、そこに貫かれていた因果の法を究めたのです。それによって、ある事象が起きたときに、つぎにどのような事象が起こるかを予知し、それに対応できるようになったのであります。

このように、人間が自然の脅威きょういから身を守るためにも、また自然の力を応用して価値を創造してい

くためにも、智慧は重要な力であった。生物学的にいえば、かよい存在である人間が、今日まで生き延びてこられたのは、智慧あったればこそといっても過言ではありません。

それはそれとして、この強力な智慧によって、人間は、他のあらゆる生物を制覇し、自然を破壊し、ひいては、みずからの生存を危機に陥れているのが実情であります。このときにあたって、なによりも求められるのは、外界の事象に対してふるう智慧の力を、内なる自己を、生命を知る智慧によって正しく調整することでありましょう。この内なる自己の智を説き明かしたのが仏法であり、そのゆえにこそ、仏法の智慧が、今日の人類にとってもっとも要請されていることを、私は強く訴えておきたいのであります。

以上のように、六波羅蜜は、人間が人間らしく生きるための条件をじつに見事に説き示しているわけですが、過去思想、宗教は、それらのいずれかを、個々別々に説いたにすぎない。六波羅蜜は、それを総体として完璧に明かしている。ここに大事な意義があります。

それは、これらの条件は、いづれも大切であります。もし、その一つ、二つのみにとらわれたならば、行き詰まってしまうし、偏頗になり、偏狭にさえなってしまうからであります。

もし布施、利他のみにとらわれたならば、現実社会に生きる人々は、ほとんどが絶望感に陥らざるをえないでしょう。また、持戒のみを事とするいき方は、発展性を失い、固定化、歪曲化をまねくでしょう。忍辱のみを強調した場合は、悪の跳梁を許すことになるでしょうし、精進のみでは、人を踏

みにじっても、ということになりかねません。禪定のみの場合、現実社会から遊離し、独善主義に走る危険がありますし、智慧のみでは、狡猾こうかつになってしまいうでしょう。

したがって、ほんとうの意味で人間らしいといえるのは、これらの条件が、その正しい時と所をえて発揮されていることが大切であります。

その意味で、六波羅蜜として総括して示されていることに重要な意義があるのでありますが、さらには、無量義經のこの文に明かされているように「六波羅蜜自然に在前す」ということが大事なのであります。

すなわち、この文は、妙法を受持したとき六波羅蜜の全体が、おのずと具わってくるということであり、いいかえると、この妙法蓮華經こそ、六波羅蜜のあらわす諸条件を、正しい調和を保って顕現させる当体であるということなのであります。

十界の生命作用が本有ほんぬの尊形そんぎようと輝く

しかも、六波羅蜜とここでいっているのは、成仏をめざす菩薩の修行という観点からであって、より根本的にいえば、十界、三千のことごとくが、この妙法蓮華經の一法に具そなわり、そのそれぞれがその所をえてあらわれてくるのであります。

十界三千をどこまでいっても具えているのが凡夫であり、人間が人間として生きていくには、その

いずれが欠けてもなりません。それが「生命」の正しい姿であります。ただ、その働きが偏向を生じ、働く場を誤ったところに、悩み、苦しみが生じます。

南無妙法蓮華経は、いっさいを具足し、統合させゆく力であります。

本抄に「其の本尊の為体本師の娑婆の上に宝塔空に居し塔中の妙法蓮華経の左右に釈迦牟尼仏・多宝仏……」（御書全集二四七頁）とおおせのように、南無妙法蓮華経という根源の一法を中心にした場合には、地獄界から仏界にいたるまでの種々さまざまな生命作用が、本来の正しい位置を与えられ、本有の尊形と輝くのであります。

互具であるべき十界の個々が、割って離ればなれになり、断絶と孤独、悩みの淵をさまよっていたものが、みずからの位置を回復し、自然に本来の機能を発揮するのであります。ゆえに円教というのであります。

これを私どもの実践にあてはめていえば、御本尊を根本とする人生には、行き詰まりも挫折もなく、そこには六波羅蜜にわたるいっさいの修行の功德が、おのずと具わってくるであります。唱題によって妙法と合致した生命は、同時に大宇宙の生命を呼吸しつつ、あらゆる障害を跳躍台に、そして逆風を追い風に変えつつ、ダイナミックな回転の輪を、幾重にも広げていくのであります。

私どものあらゆる振る舞いは、深き一念の所作として、南無妙法蓮華経を「体」とした「用」として、見事に所をえていくものであります。

御書にいわく「南無妙法蓮華経は師子吼の如し・いかなる病さはりをなすべきや……いかなる処に

て遊びたはふるとも・つつがあるべからず遊行して畏れ無きこと師子王の如くなるべし」(御書全集一
一二四頁)と。

もとよりこれは、御本仏の御境界ではありますが、凡愚の私どもも、御本尊根本の信心を貫きとお
すならば、かならずやその一分に浴することができるのであります。これ「六波羅蜜自然在前」の意
義であります。

ゆえに恩師も「功德の大海に思うがままに遊戲する、自在の境涯を会得せしむるために、忍辱の鎧
を著、慈悲の利剣をひっさげて戦うのである」と述べております。皆さん方も、こうした大福運と大
満足の人生をかちえていってくださいよう、お願い申し上げます。

具足の道の本体は妙法

法華經に云く「具足の道を聞かんと欲す」等云云、涅槃經に云く「薩とは具足に名く」等云云、
竜樹菩薩云く「薩とは六なり」等云云、無依無得大乘四論・玄義記に云く「沙とは訳して六と
云う胡法には六を以て具足の義と為すなり」吉蔵疏に云く「沙とは翻じて具足と為す」天台大
師云く「薩とは梵語なり此には妙と翻ず」等云云

ここは、まえの無量義經の文を受けられて、妙法蓮華經即御本尊がいっさいの因行果徳を具足していることを裏づけるために、經文および論釈をあげられているところであります。

最初の「法華經に云く……」の文は、方便品にあるもので、一座の大衆の疑問を、舍利弗が代表して仏に質問した言葉であります。

この要請に答えて、釈尊は開示悟入かいじごにゆうの四仏知見を明かし、すべての衆生に一仏乗の法を得させることが、仏の一大事いちだいじ因縁いんねんであることを述べるのであります。この一仏乗の法が法華經の全体を明かしているものであり、それこそ妙法蓮華經にほかならないのであります。したがって、舍利弗が仏に聞いた「具足の道」の本体は、妙法蓮華經となるのであります。

つぎに「涅槃經に云く……」以下の文は、妙法蓮華經の「妙」にあたる梵語の「薩」や「沙」が具足、六の意味になることを明らかにされております。

ごぞんじのように、法華經の梵語の題名は「サ・ダルマ・フンダリキヤ・ソタラン」といい、これをそのまま音写しますと「薩達磨・芬陀梨伽・蘇多覽」となる。これを鳩摩羅什くまらじしが、その意味を訳して「妙法蓮華經」としたのであります。

「御義口伝・南無妙法蓮華經」には「又云く梵語には薩達磨・芬陀梨伽・蘇多覽と云う此には妙法蓮華經と云うなり、薩は妙なり、達磨は法なり、芬陀梨伽は蓮華なり蘇多覽は經なり」(御書全集七〇八頁)とあります。ここに「薩は妙なり」とあるように、妙法蓮華經の「妙」にあたるのが、もとの梵語の「薩」なのであります。

無依無得大乘四論玄義記の文には「沙とは訳して六と云う。胡法には六を以て具足の義と為すなり」と記されております。

これは、涅槃經の「薩とは具足」、竜樹の大智度論の「薩とは六」を受けて、なぜ同じ「薩」(沙)という言葉が一方では具足、もう一方では六と説明されるのかを、中国、唐代の学僧・慧均えきんの文によって解明されているわけでありす。すなわち「胡法には六を以て具足の義と為す」とあるように、胡法すなわちインドの習わしでは、六を具足の義としたからであるといわれている。

なぜ、六が具足の義とされたか。これも興味をそそる問題であります。おそらく、古代インドで、六をもって満数とする習慣があったと考えられます。これは、一日を十二刻、二十四時間、一年を十二か月、角度を三六〇度、また十二支、十二を一ダースとする等、六を基調とする数え方の慣習は、いまでも世界的にいたるところにある事実にもうかがわれるのであります。

ともかく、妙法はいっさいを具足するのであります。それは、妙法が宇宙森羅万象を貫いて脈動する「生命」そのものの法であるからにはかなりません。

「蒙古使御書」にも「外典の外道・内典の小乗・權大乘等は皆己心の法を片端かたはし片端説きて候なり、然りといへども法華經の如く説かず」(御書全集一四七三頁)とお示しのとおり、妙法は「生命」を、あまざず説きつくしているのであります。それに対して、外典、爾前・權教の諸經典は「生命」を部分部分に分割して説いているにすぎません。

したがって、いっさいの經典、ならびに外典の思想、哲学は、妙法に具足するのであり、妙法に支

えられて初めて蘇生するのであります。

六波羅蜜の修行に代表される釈尊の仏法の因行果徳の二法が妙法の五字に具足されるのも、まさに妙法が、生命の全体を把握した究極の法にほかならないからであります。

受持即観心の義を明示

私に会通を加えば本文を讀が如し爾りと雖も文の心は釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功徳を譲り与え給う

これまでの引用の文をうけて、受持即観心の義を正しく釈されたところであり、本抄のなかでも肝要中の肝要といえる個所であります。

「私に会通を加えば本文を讀が如し」とは、どこまでも經文ならびに論釈を重んじ、自分勝手な解釈を慎まれた謙虚な姿勢を示されております。

しかしながら、これらの經論から明確に、まちがいなく結論できるとしておおせられているのが「釈尊の因行果徳の二法は……」以下の、あまりにも有名な御文であります。

これこそ、仏法の究極であり、一切衆生成仏の根源を明快に断言された、珠玉の御金言であります。

すなわち、まえにもかかげましたが、日寛上人が「観心本尊抄文段」において「この本尊の功德、無量無辺にして广大深遠の妙用あり。故に暫くもこの本尊を信じて南無妙法蓮華經と唱うれば、則ち祈りとして叶わざるなく、罪として滅せざるなく、福として来らざるなく、理として顕れざるなきなり」とおおせのように、私どもが日夜拝している御本尊の广大無辺の功力と尊貴さを、じつに明快に示されております。

恩師戸田城聖先生も、生前、ことあるごとにこの御文を引き、病氣や貧困と必死に戦う人々に、最大の激励とされておりました。

まさに「私に会通を加えれば本文を讀が如し」とは、今この御文を講義している私自身の痛感しているところであり、拙い解説や講義を加えようものなら、大聖人のお叱りをうけるのではないかと恐れるのであります。どうかこの御文をしっかりと胸に刻み、その妙法蓮華經の五字を御本尊として顕し、私どもに譲り与えてくださった日蓮大聖人の大慈大悲に、心から報恩の誠を尽くしてほしいとお願いいたします。

ともあれ、今この御文を拝するとき、重々の深義が秘められていることを実感いたします。

いうまでもなく、一つは文字の意味から、このまま顕されているところであり、インド応誕の釈尊のあらゆる因位の修行によって得た功も、仏果を成じてからの衆生救済の大行動による徳も、すべて妙法蓮華經の五字に具足されており、私どもはこの妙法を受持することによって、おのずからそのいっさいの功德を譲り与えられるということです。

ひとことに「釈尊」といっても、そこには、さまざまな意味が含まれていることを知らなければならぬ。日寛上人は「観心本尊抄文段」や「末法相応抄」において、そこに六つの意味を立て分けられております。すなわち、インド応誕の釈尊は、蔵・通・別・円の四教を説く過程に即して、それぞれ蔵教の釈尊、通教の釈尊、別教の釈尊というふうに、仏身を現じてきた。さらに円教である法華經においても、迹門の釈尊、本門文上の釈尊と異なっております。

以上五つの釈尊が、釈尊の仏法の領域であるのに対し、日蓮大聖人は、寿量文底に秘沈せられた南無妙法蓮華經を説く、末法の御本仏としての本地を明らかにされているのであります。これ文底の釈尊であり、釈尊といっても、このように多義にわたることを心得ていかなばなりません。

廣大無辺の功德具そなう御本尊

さて本抄に「釈尊の因行果徳の二法」とおおせられているのは、これらすべての意義を含んでいわれており、しかも釈尊の功德のみならず、あらゆる仏の諸法の力を包含しております。

ゆえに日寛上人は「観心本尊抄文段」において「一切諸仏の因位の万行、果位の万徳、皆悉ことごとくこの妙法五字に具足するなり。故に本尊の功德無量無辺にして廣大深遠の力用を備えたまえり。而しかるに但『釈尊』というは即ちこれ一を挙げて諸に例する故なり」とされているのであります。

じつに御本尊は、十方三世の諸仏の因位の万行、果位の万徳の凝結ぎようけつした宝珠であり、しかもそこ

に、宇宙をもつつむ偉大なる力用が具足されているのであります。

では、インド応誕の釈尊は、どのような因行、果徳を明かしているのかということについては、この段の前文の質問として詳しくあげて述べておられます。

要約していえば、爾前迹門の始成正覺の立場でいっても、その因位の修行は三千塵点劫にわたり、能施太子、（のうせ）儒童菩薩、尸毘王、薩埵王子等として仏道を行じ、あるいは多くの仏に供養をしている。果位の菩提樹下で成道してからの功德も、凡夫の想像を絶するたいへんなものであります。

さらに本門の久遠実成の立場でいえば、その因位の修行は、五百塵点劫以前の菩薩道であり、果徳にいたっては「十方世界に分身し、一代聖教を演説して、塵数の衆生を教化し」と明かされているように、始成正覺の立場の遠く及ばぬ膨大なものであります。

始成正覺の立場でも、その修行がいかに苛烈を極めたものであったかは、私どもは、雪山童子や樂法梵志の例によって学んでいるところであります。

ここでは、本抄にもあげられている薩埵王子についてふれてみたい。

無量世の昔、ある国に大車という国王がおり、その国王に摩訶波羅、摩訶提婆、摩訶薩埵という三人の王子がいた。あるとき王は、三子を連れて野へ出かける。大竹林のなかを進んでいるうちに、一匹の傷ついた虎に出会う。かなりの重傷らしく、獲物をあさる力もなく、ひどく飢えているようである。周りには、生まれてから七日ほどたったぐらいの七匹の子供が取り囲んでいる。

波羅がいうには「この虎は七匹の子を産んで飢えきっている。そのうち、きつと子まで食べてしま
うだろう」と。また提婆はそれを聞いて「かわいそうに、この虎はまもなく死んでしまふ。なんとか
して助けてやれないものだろうか」という。

それを聞いて薩埵は、心中深く「わが身は、百生千生を経ても、むなしく朽ちてしまふ。しかも、
なんの利益も及ぼすことができない。ならば、なんとかして今、命を捨てることができないだろう
か」と思う。

そして、兄二人が王宮へ帰ったのちに、衣服を脱いで、虎の前にわが身を投げだす。しかし虎は、
薩埵の威勢に恐れをなしたのか、一声うなったのみで手を出そうとしない。そこで薩埵は、断崖をよ
じ登り、はるか下の飢えた虎の前をめがけて身を投げる。

しかし弱っている虎は、その肉体に牙をかける力もない。そこで薩埵は、身を引きずるようにして
一本の乾いた竹を手にし、自分の頸動脈に突き刺す。飢えた虎は、鮮血をしゃぶり、たちまち勢いづ
いて、薩埵王子の肉体を骨だけ残すのみで食べつくしてしまふ――。

釈尊は、阿難に向かつてこのような故事を語り、その薩埵王子が、じつは自分の因位の修行の姿で
あったことを明かすのであります。「捨身飼虎」として知られている物語であります。

經典には「時に大地六種に震動し、風の水を激するが如く、涌没して安からず、日精明無きこと羅
睺の障るが如し。天は衆の華及び妙香末を雨し、繽紛として乱れ墜ち林中に遍満し、虚空の諸天咸共
に称讃したまふ」とあります。

これは一つの説話であり、釈尊の因位の修行の壮絶さを説いたものであります。これらの因位の修行も、妙法の廣大無辺の功力のほんの一部に位置づけられてしまうのであります。しかし、この功德は釈尊の仏法における因果をよく示しています。過去の因によって現在の果があるという原理であります。

これと関連して恩師は、よく『浄玻璃じようはりの鏡』の譬たとえを引かれておりました。

その鏡は、閻魔えんま庁の光明王院の中央にかかっており、業鏡ごうぎようとも呼ばれている。亡者もうじやが閻魔のそばへ行つて「おまえは、生きているあいだに、こんな悪いことをしただろう」といわれると「なにもそんな悪いことをしておりません」と答える。すると閻魔は「そこにある浄玻璃の鏡を見よ」という。するとその鏡に、生前の悪事のかずかずが、あますところなく映しだされるというのであります。たんなる勸善懲惡かんぜんちやうあくではなく、生命にはごまかしのきかぬ因果応報があるということを、譬えをかりて示しているのであります。

恩師は「この娑婆世界においては、われわれのこの身、この境遇が、浄玻璃の鏡なのである。過去世にわれわれのなした業が、この現世にわれわれの心身に業報として感ずるのである」と述べています。

これが、だれびとも逃れることのできない、生命というものの真実の相なのであります。これを避けて通ろうとしても、絶対に避けることも逃れることもできません。その衆罪衆禍を滅尽めつじんさせんがた

めに、釈尊は、歴劫修行の重要性を説いたのであります。

しかしながら、これは本文の一往、文上の義である。この御文を、文底仏法の日蓮大聖人御自身の立場に拝するならば、無始永遠の過去から大聖人は、無作三身の仏として「百六箇抄」にあるごとく「本因本果の主」として、無量無辺の因果の功德を具されております。

しかも、そこには、日寛上人が「一を挙げて諸に例する」と述べておられるように、釈尊一仏でなく、あらゆる仏の得分を、すべて含んでいるのであります。そして、御自身のいっさいの因行果徳を三大秘法の御本尊として、そのまま移されたのであります。

「日蓮がたましひをすみにそめながして・かきて候ぞ信じさせ給へ、仏の御心は法華経なり日蓮が・たましひは南無妙法蓮華経に・すぎたるはなし」(御書全集一一二四頁)とおおせは、これをはっきりいきられており、釈尊の仏法の月光のしだいに失せゆくなか、太陽の仏法の赫々たる出現を宣言せられているのであります。

まさしく、仏法史、いな人類三千年の歴史を画する一大事であると拝する以外にありません。

御自身の久遠元初の南無妙法蓮華経如来としての御生命を、妙法五字につつま「我等此の五字を受持すれば自然に彼の因果の功德を譲り与え給う」と、私ども末代幼稚に与えてくださったのであります。

私はこの「譲り与え給う」との御文に、御本仏の比類なき大慈悲が感じられてならない。なぜなら、久遠元初の生命といっても、仏法哲理の極理を究めた難信難解の法であり、凡夫の容易に知りう

るところではありません。私どもが今、それにふれることができるのは、七百年前の歴史の現実のう
えに、日蓮大聖人が御出現になったからであります。

「^{せんだら}施陀羅が家より出たり」（御書全集九五八頁）とおおせになり、みずから凡夫の姿をとりつつ、事実
のうえに「因行果徳の二法」を示してくださったからであります。しかも、その偉大な力と無量の功
徳を御本尊にとどめられ、末法万年の衆生をうるおす本源の力として残されたのであります。

「受持」の一念に輝く大功德

「我等此の五字を受持すれば……」とは、この御本尊に帰依する受持の一念のなかに、もったいなく
も日蓮大聖人の御命、そして久遠元初くおんげんじよの自受用身如来じじゆゆうしんにょらいの命が通ってくるのであります。それこそ、宇
宙本然の姿である万法の体に合掌冥合がっしょうみょうごうしゆく尊い座であり、そこには、いっさいを包括し、統合し、
作動させてゆく、あふれるばかりの力が秘められているのであります。

私どもは、御本尊に南無する今の一瞬において、根源の法に立っているのであります。そこから、
社会に、人生に、わが当体に、妙法五字を顕現けんげんしていくのであります。

いわば釈尊の仏法が、百千枝葉が一根に趣おもむくように、妙法へと向かう努力、精進であつたとすれ
ば、私ども受持の当体には、妙法を百千枝葉へと展開する未會有みぞうの宗教運動の世界が、豁然かつぜんと眼前に
開かれていくのであります。

そして今、この元初の太陽が、全世界を照らしつつある——。思うだに感無量であります。

さらに敷衍^{ふたん}していえば、私どもの眼前には既存のあらゆる体制、イデオロギーというものが、あたかも峨々^{がが}たる高山のごとくそびえ立っている。その既存の鉄鎖^{てつさ}は、がんじがらめに人々を呪縛^{じゆばく}しつづけているようであります。人類は、みずから生みだしたものの重圧の下に従属させられ、あえいでおります。大聖人の仏法は、その主客転倒、本末転倒を正す、壮大なる逆転劇なのであります。これまさしく、一個の人間の命は地球よりも重いという、人間ないしは生命を王座にすえ、はるか二十一世紀を望む、哲理の光芒^{こうぼう}といえましょう。

この根源的変革運動に、難がきそわないはずがありません。妨害の波浪が高まらないはずはないのであります。どうか皆さんは、人生と広布の途上になにが起ころうとも、未聞の大業なるがゆえの必然の試練と受け止め「賢者^{けんじや}はよろこび愚者^{ぐしや}は退く^{しりぞ}」(御書全集一〇九一頁)の御金言のままに、胸を張って進んでいってください。

だれびとも、それぞれの悩みをもち、また将来にかける夢をいだいております。病弱の人が健康になりたいという願い、住むに家なき人がせめて一家団欒^{だんらん}の場をもちたいというせつなる願望、みずからの色心に荒れ狂う食欲^{とんよく}、修羅の衝動^{しょうどう}を克服しようとする必死の努力等々——こうした多種多様な願いをもちながらも、なすすべを知らず、悶々^{もんもん}として楽しまざる日々を過ごしているのが、通常の人生といえましょう。

だが本因妙の仏法においては、いかなる人であれ、みずからの願いを、久遠元初の妙法の当体であ

る御本尊にかけることにより、未来の輝ける人生が開けゆくのであります。

いな、厳密にいえば、人それぞれの願いが、久遠の本因と冥合した瞬間、因果俱時で、結果そのものが生命の内奥にはらまれてしまうのであります。電源にスイッチを入れたとたん、暗かった部屋のすみずみまで電光に照らしだされるように、その瞬間、すでに生命の奥底では、宿命転換が成し遂げられ、未来の実証を呼び寄せる永遠無量の宝珠が積まれているのであります。

これ、ひとえに宇宙本源の当体たる御本尊に、三世十方の諸仏の因位の万行、果位の万徳がそなわっているからであり、御本尊の仏力、法力の無量無辺なるがゆえであります。もはや釈尊の爾前經の仏法のように、過去の悪業を未来永劫にわたって断ちゆく修行をする必要はありません。たとえ過去に少しも福運を積んでいないとしても、御本尊を信じ祈る一念のなかに、因位の万行が流れこみ、果位の万徳が満ちあふれ、未来の燦たる黄金道の実証を、現在のこの瞬間に開くことができるのであります。

ゆえに大聖人は、流罪の地・佐渡において「当世・日本国に第一に富める者は日蓮なるべし」（御書全集二三三）とも、また「流人なれども喜悦はかりなし」（御書全集一三六〇）ともおおせなのであります。

ともあれ、御本尊の御建立によって、末代の荒凡夫の私どもが、久遠元初の御本仏の生命と感応し、合一できる道が開かれた。いな、一切衆生を久遠元初の仏と同じ尊極の当体ならしめようとされたところに、御本仏大聖人の大願があったのであります。

「御義口伝」には「此の我等を寿量品に無作の三身と説きたるなり、今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱うる者はなり」（御書全集七二〇頁）とおおせられ、「今日蓮が唱うる所の南無妙法蓮華經は末法一万年の衆生まで成仏せしむるなり豈今者已満足に非ずや」（同頁）といいきられております。

ただし、いうまでもなく、御本尊を受持するといっても、大切なのは信の一字であります。しかも「受くるは・やすく持つはかたし・さる間・成仏は持つにあり」（御書全集一一三六頁）とおおせのよう

に、信の一字をどこまで持続させ、深めていくか——そこに觀心の成就のカギがある。

「一生成仏抄」に「深く信心を發して日夜朝暮に又懈らず磨くべし何様にしてか磨くべき只南無妙法蓮華經と唱へたてまつるを是をみがくとは云うなり」（御書全集三八四頁）とおおせのように、朝晩の勤行を欠かすことなく、たんたんと水の流れるような信心を貫いていただきたいことをお願い申し上げます。

四大声聞の歡喜はわが歡喜

四大声聞の領解に云く「無上宝聚・不求自得」云云、我等が己心の声聞界なり

譬喩品の「三車火宅の譬え」を聞いた中根の四大声聞、すなわち摩訶迦葉、迦旃延、須菩提、目犍

連の四人が、領解した喜びを述べた言葉であります。

いっさいの仏法の究極であり、釈尊の因行果徳のすべてを収めた具足の法である妙法を、いまわれわれは求めずして得ることができた、ということです。それは、この妙法を説いてくれた仏への感謝をあらわした言葉でもある。

いうまでもなく、法は求めてこそ得られるものであります。しかるに「求めざるに得たり」とは、仏の大慈悲のゆえといわなければなりません。だからこそ、四大声聞は心から歡喜し、仏に感謝の氣持ちを込めて、この言葉を述べたのであります。

しかし、もう一步嚴密にいえば、これら声聞の弟子たちは、なにもものも求めなかったわけではありません。まさしく、それをあらわしているのが三車火宅の譬えであります。

この譬え話をここで詳しく述べることはいたしません。長者が火事になった家から子供たちを誘いだすために、日ごろ子供たちがほしがっていた羊車、鹿車、牛車が、いま門の外にあるから出てごらん、と呼びかける。子供たちが急いで出てきたのは、そういった車をほしがっていたからです。

三車とは、声聞、緣覺、菩薩の三乗の法をあらわしております。これら三乗を求める心は、きわめて強いものがあつたわけでありす。しかし、父の長者は、子供たちに三車でなく、ずっとすばらしい大白牛車を与えた。すなわち、三乗の法でなく、最高の一仏乗の法、妙法を与えたということになります。

一仏乗の法、成仏の境涯は、あまりにも高く壮大で、声聞の弟子たちにとっては、想像すら及ばな

いものでありました。想像できないくらいですから、それを求める心が起きなかったのは当然です。求めたのは、三乗の法という小さな安っぽい宝石でありましたが、この法華經にいたって仏から与えられたのは、求めもしなかった一仏乗の妙法という無上宝聚であったというのが、この文の意味であります。

これは、そのまま、末法の今日の御本尊を信受した私どもにも、当てはまるのではないのでしょうか。御本尊を信受しようという気になった動機は、ほとんどの場合、人生、生活のうえでの、低い次元の小さな願いであつたにちがいありません。成仏という最高の境涯を思い描いて、それにあこがれて信心に入つたという人は、おそらく皆無に等しいでしょう。

むしろ、仏といえば死んだ人のことと思ひ、成仏とは死ぬことだぐらいの認識しかありませんから、成仏をめざそうなどといわれると「縁起えんぎでもない」と思つた人がいるのではないのでしょうか。

ところが、信心を始めて、仏法を深く学ぶにつれて、仏とはけつして死人のことではなく、智慧と福德と生命力に満ちた、最高の人格完成の姿であることが理解できるようになつた。そして御本尊は、たんに小さな願いを実現させてくれるだけの存在ではなく、仏の生命の当体であり、私ども凡夫を無上の仏にしてくださる尊極の宝聚であることを、しだいに明確に知るにいたつたのであります。

まさしく「無上宝聚・不求自得」と叫んだ四大声聞の歡喜の生命は、御本尊を受持した私どもの己心のなかにあるのであります。

信力、行力を奮い起こす精進を

つぎに「自得」ということではありますが、「自ら得る」とは、みずからのなかに得ていくことであり、みずからの力で得るということであり、さらに自由自在に得ていくことであります。

仏界の大生命は、御本尊と自身との真剣な冥合の作業のなかに湧現するものであり、しよせん、自得とは信心であり、受持即観心であります。御本尊は絶対の対境であり、御本尊なくしては私たちの成仏、観心はありえない。しかし同時に、受持すなわち、みずからの信心より発する修行精進がなければ、御本尊の功力が顕れるはずがないことも明らかであります。

なお、声聞界とは、声を聞くという名称が示すように、仏の説法、仏法の話聞き、求める求道心をあらわします。求道の心とは、みずからの現状に甘んずることなく成長し、向上していこうとする心です。そうした求道、向上の心があってこそ、仏法の偉大さ、すばらしさは身にしみて感じられ、理解されてくることを忘れてはなりません。

この声聞について、信解品には、四大声聞が「無上宝聚・不求自得」と領解したことによって、いわゆる二乗根性を大きく脱皮して、真の声聞への大転換を成し遂げたことが説かれております。

「我等今者、真に是れ声聞なり。仏道の声を以って、一切をして聞かしむべし。我等今者、真に阿羅漢なり。諸の世間、天人魔梵に於いて、普く其の中に於いて、応に供養を受くべし」(妙法蓮華経並開

結二七五（六）と記されております。

すなわち、自己の悟りのためにのみ、仏の声を聞いていた声聞たちが、ひるがえって、人々のために、仏の声を聞かしめる声聞として、見事に蘇よみがえったことをあらわしております。

法華経以前の声聞について「開目抄」には「二乗は自身は解脱と・をもえども……父母等を永不成仏の道に入れば・かへりて不知恩の者となる」（御書全集一九二（二））と破折されています。

寂しい、孤独の世界に陥っていた声聞、増上慢とエゴイズムの暗闇くらやみの淵ふちに沈んでいた声聞、また、それゆえに爾前権教において厳しく呵責かしやくされ、自身が低くみていた大衆からもかえって軽んじられた声聞が、法華経にいたって、仏界という思ってもみなかった無上の宝聚を得て、大衆のなかへ仏の声を聞かしめる戦いへと出で立っていったのであります。

長い叱責しっせきに耐えて仏に随従ずいじゆうしてきた声聞たちは、法華経のこの開会を聞き、どれほど歓喜し、弘教の誓いを新たにしたことでありましょうか。経にいわく「歓喜踊躍かんぎゆうやく」と。いまこそ、声聞の真実の使命が明らかにされたのであります。

この法華経の開会がなければ、声聞の修行はただいたずらごとにすぎません。法華経のこの二乗作さ仏ぶつが、珠玉の原理とされるのはそのゆえであります。

「我等が己心の声聞界なり」とあるように、わが己心の声聞も、また法華経の声聞として、仏の声を聞かしめる戦いへと回転させていくべきでありましょう。

「御義口伝・譬喩品」には「仏道の声を以て一切をして聞かしむ」との文に関して、つぎのように記

されております。

「乃て身子此の品の時聞此法音と領解せり、聞とは名字即法音とは諸法の音なり諸法の音とは妙法なり……此の音声を信解品に以仏道声、令一切聞といえり一切とは法界の衆生の事なり此の音声とは南無妙法蓮華経なり」（御書全集七二二頁）とあります。

仏道の声とは、まさしく南無妙法蓮華経であります。一切とは一切衆生のことである。一切の衆生の生命内奥から尊極なる仏界を湧現せしむる力こそが、妙法なのであります。

ゆえに、南無妙法蓮華経の声をみずから聞き、体得するとともに、三惡道、六道の巷をめぐりゆく民衆に聞かしめてこそ、真の声聞、真の弟子となるのであります。したがって、五濁惡世の真ただ中で、名字凡夫の当体のまま妙法弘通に邁進する地涌の菩薩こそ、真実の声聞であります。

ある識者が「声は生命である。生命の奥深いところから発するものである。その声の響きは、宇宙に向かって発せられている」という意味の発言をしていましたが、まことに含蓄の深い言葉であります。

音吐朗々たる勤行、唱題の声は、まさにこれであり、いかなる名音楽にもまして宇宙と人間の生命を揺り動かしていくでありましょう。またその人が、ひとたび実践の場に立てば、大誠実より発するその音声は、固く凍てついた大地をたたき割るように、人々の心を閉ざす三毒の殻を、かならずや打ち破っていくものであります。

「若し能く駈遣し呵責し挙処せば是れ我が弟子真の声聞なり」との涅槃經の文は、このことをさして

いるのであります。

妙覺の釈尊はわれらが血肉

「我が如く等くして異なる事無し我が昔の所願の如き今は已に満足しぬ一切衆生を化して皆仏道に入らしむ」、妙覺の釈尊は我等が血肉なり因果の功德は骨髓に非ずや

この段について、日寛上人は、自受用身に約して師弟不二を明かした文とされております。

引用の方便品の文のままでいえば「我が如く」の「我」は、まだ迹門始成正覺の釈尊であります。

しかし、大聖人がここで引用された元意からいえば、この「我」は、久遠元初の自受用身と拝するものが当然であります。ゆえに日寛上人は「自受用身に約して」と釈されているのであります。

この点については「御義口伝・方便品」の「如我等無異・如我昔所願」の項に「我とは釈尊・我実成仏久遠の仏なり此の本門の釈尊は我等衆生の事なり……此の我等を寿量品に無作の三身と説きたるなり」（御書全集七二〇頁）と述べられていることを考えあわすとき、さらに明瞭となりました。

したがって「如我」の「我」とは末法御本仏日蓮大聖人であられます。御本尊を受持し、真剣な唱題に励むとき、私どもの凡身が即、御本仏大聖人とまったく等しい、無作の三身とあらわれるとのお

おせであります。

「妙覚の釈尊は我等が血肉なり」とは、それをいわれている。「妙覚の釈尊」とは無作三身如来であり、「我等が血肉」とは凡夫の肉身であります。すなわち、凡夫ほんぶ即極そくごくの原理をおおせられたものにほかなりません。ここに「我等」とありますが、これはもとより、別しては日蓮大聖人のことであるのはいうまでもありません。

「因果の功德は骨髓こつぱいに非ずや」とは、これまで繰り返し申し上げたごとく、無作三身、自受用身の仏の因果の功德が、ことごとく御本尊を受持する私どもの生命のなかに具そなわるとのおおせであります。なお「因果の功德」をさらに掘り下げていえば、因とは九界であるがゆえに、凡夫、人間としてのあらゆる幸せをいい、相対次元の幸福になります。それに対して、果とは仏界でありますから、仏としての内奥に開かれた絶対的幸福をいうと考えられます。

ともあれ、三大秘法の御本尊を受持したとき「妙覚の釈尊は我等が血肉なり」とあらわれることを、日寛上人は「我等この本尊を信受し、南無妙法蓮華経と唱え奉れば、我が身即ち一念三千の本尊、蓮祖聖人なり」と教えられております。

久遠元初の自受用身としての大聖人の御生命を顕されたのが御本尊であり、ゆえに、御本尊を信受して南無妙法蓮華経と唱えるとき、私どもも自受用身の当体となる。師匠である大聖人も自受用身、弟子である私どもも自受用身であり、師弟不二となるのであります。

この段を拝するたびに、私は、日蓮大聖人の一切衆生を成仏させんとの大慈悲と、仏法の本源的な

平等觀の深さを思わざるをえないのであります。

一人の人間の色心こそもつとも尊貴

古今のほとんどあらゆる宗教は、人間を超えたなんらかの「絶対者」を設けるのを常としてきました。西欧の宗教などでは、人間と神とのあいだに深い断層があり、ただ絶対神たる神の恩寵おんちようにすぎる以外にない存在です。仏法においては、われわれ衆生が仏であり、尊極無上の存在なのであります。ゆえにこの大聖人の宣言は、あらゆる人間蔑視べつしの古き宗教に訣別けつべつを告げると同様に、權威の「絶対者」の手から人間の尊嚴を取り戻そうと模索もさくしつづけてきた、近代の多くの人權宣言の根源を射ぬく、高らかな人間宣言ともいうべき師子吼くであったといつてよいと考えます。

私は、大聖人が「妙覺の釈尊」を「血肉」に、「因果の功德」を「骨髓」に配されていることに、甚深の意義が感じられてならない。

「佐渡御書」には、御自身のことをさされて「心こそすこし法華經を信じたる様なれども身は人身に似て畜身なり魚鳥を混丸して赤白二滯とせり其中に識神しきしんをやどす濁水に月のうつれるが如し糞囊ふんのうに金をつつめるなるべし」(御書全集九五八頁)とおおせであります。月の映れるがゆえに、金をつつめるがゆえに、一人の人間の色心こそ、なににもまして尊貴なのであります。

三災七難の嵐あらしが荒れ狂うなかで、必死に戦い生きていく民衆一人ひとりに、大聖人がどれほどの愛

情の眼をそそいでおられたかは、察するにあまりありません。『日蓮は・なかねども・なみだひまなし』（御書全集一三六一頁）とおおせが、あたかも肉声のように胸中に響いてならないのであります。

思うに私どもの運動も、どれだけこの御本仏の生命に感応できるかということにつきるといえます。よう。一人が一人の宝塔を開き、そのまた一人が一人の宝塔を開く——この地道にして着実な生命の開拓作業のなかに、御本尊との感応の響きは、いんいんと幾重にも、幾次元にも広がっていくのであります。

インドの詩人タゴールに、つぎのような言葉があります。

「偉大な心をもった人の体験から出てくる生きた言葉の意味はどんな体系的論理的な解釈によっても理解しつくされるものではない。それはひとりひとりの生活を通しての理解によって、たえず解明されなければならぬ。またそれは、ひとりひとりの新しい意味の発見によっていよいよその神秘と奥深さを増すものである」と。

ひじょうに含蓄の深い言葉であると思います。私どもの御書の拝読は、たんに文字を追う理解することでは決してありません。生命自体に刻んでいくのであります。「八万四千の法蔵は我身一人の日記文書なり」（御書全集五六三頁）とおおせのように、仏法はわが身一人の胸中にあるのであります。

多くの聖典のように、権威の響きをもって、上から人間を教化、訓導するのではなく、生命の内よ

り、生きて生きぬく不壊ふくわいの力を引きだしてくるのが御書の金言であります。だからこそ、生活のなかに生きているのであり、事の仏法なのであります。

ともあれ、人間の心を動かすものは、人間の心であります。大聖人は、みずから凡夫僧の姿をとって御出現になり、つねに庶民と哀歓あいかんをとものにしつつ、心のヒダにふれながら、この原理を私どもに事実のうえで示してくださいました。これは、蔵の財、身の財の次元の満足をはるかに超えた心の財の充足、すなわち絶対の幸福境涯であります。

その点について、恩師は、つぎのように述べています。

「されば、この大宗教を信ずることによって生命のリズムは宇宙のリズムに調和して、生きている幸福をしみじみと感ずるのである。生命の歓喜こそ、幸福の源泉である」

私どもの一生成仏の目標は、まさにこの一点にあります。「我が如く等しくして異なること無からしめん」との、御本仏の大慈悲に浴する道は、ここにしかないことを確信しつつ、障魔に紛動されず、わが道を進んでいこうではありませんか。

己心の仏界と輝く三仏

宝塔品に云く「其れ能く此の経法を護る事有らん者は則ちすなわ為れ我及び多宝を供養するなり、乃

至亦復諸の来り給える化仏の諸の世界を莊嚴し光飾し給う者を供養するなり」等云云、釈迦・

多宝・十方の諸仏は我が仏界なり其の跡を継紹して其の功德を受得す「須臾も之を聞く・即阿

耨多羅三藐三菩提を究竟するを得」とは是なり

ここは、無作三身に約して親子一体を成す段とされており。

なぜ無作三身に約すかといいますと、この宝塔品の文中の「我」とは釈迦であり、これは無作の報身にあたります。「多宝」は無作の法身、「諸の来り給える化仏」は法華經の会座に來集した十方世界の分身諸仏であり、これはそれぞれの世界に応現した仏でありますから、無作の応身にあたります。

この「釈迦・多宝・十方の諸仏」を無作の三身というのであります。

さて、このように法華經の会座に列なつた三仏は、無作の三身をあらわしているものであり、「能く此の經法（御本尊）を護る」者は、無作の三身を供養したと同じ功德で、ちょうど子が親の跡を継ぐように、その跡を紹繼して無作の三身とあらわれるのであります。したがって、これは、私どもの己心の仏界をあらわしているといわれるのであります。

ここで私が強調したい点は、「護る」ということの意義であります。經典には、諸処に法を護れと説かれている。「護る」というと、なにか保守的な響きがありますが、たんに消極的に護るということではない。真に仏法の流れを滅尽させないためには、よりすすんで人々に伝え、発展させるという姿勢がなければならぬ。なぜなら、不幸の人々に手をさしのべ弘教していくなかに、真の仏法の生

命があるからであります。

しかも御文には「能く護る」とある。私はこの「能く」ということに注目していただきたいと思うのであります。すなわち「能く」とは、受動ではなく能動であり、また身口意の三業で実践することであります。

護るとは、まず第一に、徹底して御本尊を護持しぬくことであります。それが、尊いみずからの仏界の生命を護りゆくことになるのであります。

「阿仏房御書」に「多宝如来の宝塔を供養し給うかとおもへば・さにては候はず我が身を供養し給う」（御書全集一三〇四頁）とあるごとく、御本尊を護持することは、即わが生命を護持することになるのであります。御本尊におしたためのように、私どもの胸中の仏界は十界三千のさまざまな生命の渦巻くなかにある。修羅の命もあれば、地獄、畜生、餓鬼界の生命もある。さらに二乗や菩薩の働きも、本有^{ほんゆ}のものなのであります。

ゆえに、少しでも油断をすれば、仏界の生命は、九界の厚い雲の陰に隠れてしまうのであります。ゆえに私どもは、つねに精進を忘れず、本来、眩^{まばゆ}いばかりの光沢^{こうたく}を放っているこの妙法の主体が、障^{しょう}魔の雲によって覆^{おほ}われることのないよう、心して御本尊を護持しぬいていきたいものであります。

水は、つねに流れていなければ腐ってしまいます。生命も同様であります。「月月・日日につより給へ・すこしもたゆむ心あらば魔たよりをうべし」（御書全集一一九〇頁）とおおせのように、朝晩の勤行を欠かさず実践し、日々新たな目標に挑戦しつづける姿勢を貫いてください。

第二に、自分一人のみでなく、尊い仏子を護っていただきたい。仏子を護ることが、即經法を護ることに通ずるからであります。

御書には「伝持の人無れば猶木石の衣鉢えはつをなほもくせき持持せるが如し」(御書全集五〇八頁)、「持たもたるる法だに第一ならば持つ人随したがって第一なるべし、然らば則ち其の人を毀そしるは其の法を毀そしるなり其の子を賤いやしむるは即ち其の親を賤いやしむなり」(御書全集四六五頁)等とおおせであります。ゆえに、仏子を徹底して護りぬくことが大切であります。

皆さん方にとって、因縁深き仏法兄弟であり、それぞれが尊い使命をもつ、地涌の菩薩けんぞくの眷属けんぞくであります。どうかそれらの人々を「起たって遠く迎うべきこと、当まさに仏を敬うが如くすべし」の經文のごとく遇ぐしていただきたいと思います。

第三に大切なことは、互いに激励しあい、薰発くんぱつしあえる尊い仏法教団を護りぬいていくことであります。大聖人は「されば仏になるみちは善知識にはすぎず、わが智慧なにかせん、ただあつきつめたきばかりの智慧だにも候ならば善知識たいせちなり、而しかるに善知識に値あう事が第一のかたき事なり」(御書全集一四六八頁)とおおせであります。すなわち、われわれ凡夫が仏道を成じていくには、善知識にあう以外にない。熱さ冷たさを知るほどの才覚があったならば、ひたすら善知識を求めよ、と述べられているのであります。

ここで私が訴えたいことは、私ども一人ひとりが、ほかならぬこの善知識であるということであります。一生成仏と広宣流布という尊い使命のもとに、互いに寄りあって自己をみがく友と友——これ

が日蓮正宗創価学会なのであります。ゆえに、この尊い法団、尊い同志を大切にし、尊重していくことが、護るということの重要な意義となってくるのであります。

私どもの教団は、世界的にみれば、まだまだこれからであります。しかし、そこに深く流れ通う御本仏の威光は、十年、二十年後には、かならずや人類の未来を明々と照らしだすでありましょう。「是あに地涌の義に非ずや」(御書全集一三六〇頁)との御金言に照らして、それは私どもの確信であります。ゆえに、自身を護り、正義の仏教教団を護るということは、即、全人類の未来を護ることに通じていくということを知っていただきたいのです。

「我聞」は全生命で聞く義

つぎに「須臾も之を聞く……」は法師品の文でありますが、ここでいう「聞く」とは、御本尊を受持することであります。

「聞く」との言葉を、受持、実践の意に拝すべきことを示されている例としては「御義口伝」の「如是我聞」の項があります。そこで大聖人は「我聞とは能持の人なり」(御書全集七〇九頁)との天台の釈をうけて「不信の人は如是我聞の聞には非ず法華経の行者は如是の体を聞く人と云う可きなり」(同頁)と教示されております。

したがって「須臾も之を聞く」とは、ほんの一瞬でも御本尊を信受し実践するならば、「阿耨多羅

三藐三菩提を究竟するを得」——すなわち、無上の仏の悟りを得ることができるということです。こ

れは、御本尊を信じ唱題しているその瞬間瞬間、私どもの生命に仏界が顕れているとおおせです。

この瞬間瞬間の持続、また、真剣な祈りで出発し、報恩感謝の唱題で終わる一日一日の積み重ねのなかに、一生成仏があり、未来永劫の成仏が決定づけられることを忘れてはなりません。

なお、ここで「我聞」についての「法華文句」の文を紹介しておきます。

「問ふ、まさに耳聞じもんと言ふべし、なん那ぞ我聞と云ふや、答ふ、我は是れ耳の主、我を挙げて衆縁を攝さつす、此れ世界の釈なり」

「聞く」という本義が、ここに明らかに読みとれます。すなわち、たんに耳で聞くという作業ではなく、生命全体で迫ることが「聞」の趣旨なのであります。「衆縁」すなわち眼、耳、鼻、舌、身、意のすべてが作動して、「我」すなわち生命全体で聞くのが「我聞」の意義であるということです。

また「釈論に云く、凡夫に三種の我あり、見と慢と名字とを謂ふ」という一節もあります。「我」といっても、いかなる「我」なのか、これが問題です。邪見の我や、慢の我であっては、真実の仏法の精神の流入は妨げられてしまうのであります。

「如是我聞」の「我」とは、具体的、直接的に言えば阿難あなんをさしております。この阿難について、いまあげた釈論（智度論）には「阿難は是れ学人、邪我無くして能く慢我を伏す、世の名字に随て我と称するに咎無し」と説かれている。阿難のごとくに、慢心、邪見等を吹き払って、清浄な求道の生命で迫りゆくときに、初めて「聞く」ことになるということです。

「聞を釈せば、阿難は仏の得道の夜生れ、仏に侍^じすること二十余年、未だ仏に侍せざる時は応^{まさ}に是れ聞かざるべし」との記述もあります。「仏に侍す」ことが「聞」の本義だというのであります。ここから「聞」とは、もはやたんに言葉として聞くというものではなく、生命のふれあいのなかに、その真義があることを知るのであります。

その生命それ自体のふれあいを妨^{さまた}げるものが怨嫉^{おんしつ}であります。御書には「障り未だ除かざる者を怨と為^なし聞くことを喜ばざる者を嫉^{なつ}と名く」(御書全集二〇一頁)との妙楽の言が引かれております。

ここに「聞くことを喜ばざる」とある点に注目したい。「忠言耳にさからい良薬口に苦^{にが}し」といわれているように、自分にとってきらいなこと、生命に痛いことは聞きたくないというのが、凡夫の常でありましょう。逆に、お世辞や甘言に、いとも簡単に乗ってしまう。こうした通性^{きょうせい}に棹^{さお}さしていたのでは、そこには自身の成長などありえず、氣の合った者や自分の取り巻きにのみ甘え、かえって墓穴を掘ってしまうことは必定^{ひつじょう}であります。

「太閤記」のなかに、毛受勝助家照^{めんじゅかつすけいえてる}という人物が描かれています。柴田勝家の小姓頭であったのですが、若いに似ず、なかなかの見識の持ち主でありました。あるとき彼は、主君・勝家が、大将としての振る舞いが粗暴^{そぼう}にすぎるのをみて、勝家から乞^こわれた本のあるページを目につきやすいように折っておく。開いてみるとその個所には、暗に勝家を戒める文々句々が書かれてあった。それを読んだ勝家は、露骨にいやな顔をして、それ以来、毛受家照を遠ざけてしまうのであります。

しかし、真の忠臣はいいだれであったのか。後に柴田勝家は、賤ヶ嶽の戦いにおいて、秀吉軍に壊滅に近い打撃をこうむるのですが、そのとき死中の勝家を救ったのが、ほかならぬ毛受家照でありました。彼は敗走する主君に対して、大将の居所を示す馬印を手渡すように、再三にわたって懇願する。そして、ついにそれをもらいいうけるや、わずかな手兵を引きつれて、秀吉軍のなかに取って返し、壮烈な戦死を遂げる。勝家は、馬印を望む毛受家照の姿を見て、翻然として悔い、悟るのであるが、すでに後悔先に立たずであった。そして勝った秀吉は、毛受家照の首を篤く弔い、彼の母を探しだして、丁重な慰問を行ったと伝えられています。

もとよりこれは、戦国時代史をかざる忠君道德にまつわる一つのエピソードではありますが、私には、貴重な教訓が含まれているように思います。すなわち勝家は、毛受家照の言を聞くことを喜ばなかったのです。その安逸におぼれる彼の怠惰と傲りが、後に賤ヶ嶽の敗北をよび、北の庄での壊滅をもたらしした遠因であったといえましょう。

ともかく私どもは、積極的に和合の輪のなかに飛び込んでいき、みずからも語り、人のいうことをよく聞いてあげるという姿勢を忘れてはなりません。怨嫉ということの恐ろしさは、本来、同心であるべき地涌の連帯のなかで、心の壁をつくってしまうことでもあります。そして、ひとたび壁をつくってしまうと、四壁に閉じ込められた狭い空間のなかで、三毒の炎は燃えさかるばかりであります。これでは、みずからの福運を消してしまいます。

ゆえに、個人指導、一人対一人の親身の激励が大切となってくるのであります。組織といっても、

せんじつめれば一人の人間をどう成長させるかの一点に、存在意義があるといえましょう。たしかに悩める友、嘆きの友の声を聞いてあげるとは、たいへんな生命力を要するものであります。また、自分が苦手な人の前に胸襟きょうきんを開いていくことは、ひじょうな勇氣を必要とするものであります。しかし、そこをあえて突破してこそ、自身の人間革命もあるのであり、宮殿堂きやうでんどうの奥深く眠っていた友の魂を呼び起こしていくことができます。ゆえに私は、まず勇氣をもって動こう、そして友の声を聞き、そして語ろう、と申し上げておきたいのであります。

御書に「竹の節を一つ破やぶねれば余の節亦破るるが如し」(御書全集一〇四六頁)と示されています。これは一人の成仏の重要性を述べられたものですが、このたとえを応用して、どんなつらいことがあろうと、それを避けずに「一つの節」を突破するならば、思ってもいなかった境涯が開けてくるものであるということがいえましょう。そのことを確信して、まず祈ることが大切であります。なぜなら御本尊への強盛な祈りが内なる真我しんがを輝かせていくことになるからであります。

仏も菩薩もわが生命に厳然

寿量品に云く「然しかるに我実われじつに成仏してより已来このかた・無量無辺百千万億那由佉劫なり」等云云、我等が己心の釈尊は五百塵点じんてんないし乃至所顯しよけんの三身にして無始の古仏なり、經に云く「我本菩薩もとの道を

行じて・成ぜし所の寿命・今猶未だ尽きず・復上の数に倍せり」等云云、我等が己心の菩薩等なり、地涌千界の菩薩は己心の釈尊の眷属なり、例せば大公・周公旦等は周武の臣下・成王幼稚の眷属・武内の大官は神功皇后の棟梁・仁徳王子の臣下なるが如し、上行・無辺行・淨行・安立行等は我等が己心の菩薩なり

この一節は、久遠元初に約して君臣合体を示すと、日寛上人は釈されております。

すなわち、久遠元初の仏も私どもの己心にあり、地涌千界の菩薩も私たちの己心にあることを示し、ゆえに、久遠元初に立脚した私どもの一個の生命のなかに、君（仏）、臣（菩薩）ともにあると、合体を明かされているのであります。

まず寿量品の「然我実成仏……」の文は、五百塵点劫の成道を明かしたものでありますが、大聖人は「五百塵点乃至所顕の三身にして無始の古仏」とおおせのごとく、久遠元初に所顕の無始無終の仏を示されております。

ここにいう「乃至」とは、後より前に向かって、つまり久遠本果の時から、久遠名字の時をのぞんで「乃至」といわれているのであります。したがって「乃至」とは「当初」の意であり、たとえば「当体義抄」に「釈尊五百塵点劫の当初此の妙法の当体蓮華を証得して世世番番に成道を唱え能証所証の本理を顕し給えり」（御書全集五一三）とある「五百塵点劫の当初」にあたると拝するのであります。

また日寛上人の文段によると「我実成仏已来」は、通じて三身を明かしており、我は即無作の法身、成仏は即無作の報身、已来は即無作の応身となります。

つぎに「我本行菩薩道」の文は、^{がほんぎようばさつどう}因位の修行を明かしたものであり、ここでは本因の久遠元初の無始の九界をあらわしております。一方、さきの「我実成仏」の文は本果の久遠元初の仏をあらわし、この両者がともに私どもの己心にあることが示されているのであります。

日寛上人は「我本行菩薩道 所成壽命 今猶未^{しよじようじゆみよう}尽」を「流入^{るにゆう}の義」と釈され、たとえば「衆流の海に入るが如し」といわれております。すべての河川がやがて大海にそそぐように、仏においては、いっさいの万行が果徳^{かとく}の海にそそぎこんでいるとの意であります。

もとより、これは久遠の仏についていわれているのでありますが、この原理は、私たちの実践においても、きわめて重要なものです。世間では、いかに辛酸^{しんさん}をなめ努力を重ねたとしても、所期の目的が成就されとは限りません。むしろ悲しい結末となることが少なくない。因は確実に果をもたらしのではなく、努力が空転し、幾多の悲劇を生んでいるのが現状であります。

しかし、御本尊を根本とした場合には、因はかならず果にいたるのです。いな、果のなかにすべての因は流れているのであります。広布のために尽力し、御本尊のために働いたことは、すべて無駄なく自身の財産となっていくのであります。

ちょうど深山に発した流れが、だれの目にも入らない微々たるものであったとしても、やがて平野へと躍りでて、大海へと流入しゆくようなものであります。と同じく、いかなる陰の目立たない努力

も確實に未来の大海へと向かっていく、その大海こそ大涅槃だいねはんの大海、すなわち真実の幸福の世界なのであります。これが「流入の義」であります。

強い信心に立っての広布のための辛勞は、すべて三世にわたる、功德への揺るぎない道であると確信してください。

さて「地涌千界の菩薩は己心の釈尊の眷属けんぞくなり」とおおせのように、地涌の菩薩の九界の生命が、つねに己心の釈尊の眷属として仏界を助け、その働きを顕していくと明示されております。このように久遠元初の仏も、地涌千界の菩薩も、私どもの己心にあることをお述べなのであります。

大聖人は、以上を説明するために、二つの例をあげられております。一つは、中国の太公たいこうや周公旦しゅうこうたんの例で、周の武王を助け、武王なきあとには幼い成王を助けてもり立てた。もう一つは、わが国の歴史にとられたもので、神功皇后じんくうを助けた武内宿禰たけしうみのすくねは、神功皇后の孫である仁徳王子の臣下としても補佐した。この君臣の関係を例とし、己心の地涌千界の菩薩は己心の釈尊の眷属として、己心の釈尊を助け顕していく関係にあることを示されているのであります。

君臣の関係といいますが、なにか封建的なイメージがありますが、大聖人がここで述べられているのは、自身の生命に冥伏みょうふくするところの仏界の生命を限りなく躍動させていくための君臣合体であり、自己の胸中の内なる高揚こうようを説かれたものであることはいうまでもありません。

さらにいまの譬えたとのなかに、じつは重要な視点があります。太公とは太公望であり、周の文王に会

い、見いだされてその師となり、文王の死後はその子・武王に仕え、そして武王の滅後には武王の子である幼い成王を助けた歴史上の人物であります。周公旦は武王の弟で、成王にとっては叔父にあたります。その周公が成王が長ずるまで摂政せつしやうとなって政事を担当している。また、武内宿禰が助けた仁徳王子も、主君はいずれも幼児であります。

これは、私どもが御本尊を信受したとき、仏界の生命が顕れるけれども、まだきわめてかよい状態であることを表現されているのであります。

では、この仏界の生命を揺るぎなく力強いものとするためには、なにが必要なのか。それは臣下にあたるところの地涌の菩薩の働きが不可欠であり、地涌の菩薩があつてこそ、仏界の生命は脈動するのであります。

仏法広宣こそ地涌の本懐

地涌の菩薩とは、妙法流布への実践の生命であります。なぜなら、地涌の菩薩とは、悪世末法に仏法を流布する使命をうけるために法華經の会座に涌出した菩薩だからであります。つまり仏法広宣を己が使命と決定した実践の生命こそ、地涌の菩薩の真骨頂しんこつちやうなのであります。

したがって、私どもの己心に住する仏界を助け、守り、育てていくためには、広宣流布への使命を深く自覚した力強い実践が不可欠であることを、この譬えをとおして教えられていると拝することが

できます。

振り返ってみれば、創価学会の今日あるは、まさしく獄中における初代会長牧口常三郎先生と二代会長戸田城聖先生の、壮絶無比な死身弘法の戦いあつてのゆえであります。恩師戸田先生は、よく男子青年部に語られていました。

「男というものは、自分がどの分野にしようとも、どのような仕事を担おうとも、当面する現実と、ともかく戦うことだ。私は獄中にあつて『いまは獄にいる。獄にいるかぎり、私はここで戦うのだ』と決めていた」と述懐じゆつかいされておりました。

その獄中で戸田先生は、翻然ほんぜんとしてご自身の深い仏法上の使命を自覚され、偉大な境涯を得られたのであります。

「出獄の日を期して、私はまず故会長に、かく、こたえることができたようになったのであった。『われわれの生命は永遠である。無始無終である。われわれは末法に七文字の法華経を流布すべき大任をおびて、出現したことを自覚いたしました。この境地にまかせて、われわれの位を判ずるならば、われわれは地涌の菩薩であります』と」（創価学会の歴史と確信）

この恩師の生命の叫びのなかに、私どもの原点の誓いと不動の使命があり、この自覚に立った不屈の実践行動によって、今日の未曾有の広布伸展があるのであります。

皆さんはどうか、妙法広布をめざす仏法運動にわが身をおき、敢然かんぜんと成長、前進していくところに、日蓮大聖人がおおせのごとく、内証の仏界、わが己心の力強き生命を厳然と守り、薰発くんぱつさせ、た

くましく成長させていく地涌の金の道があることを、深く銘記していただきたいのであります。

つぎに「上行・無辺行・淨行・安立行等は我等が己心の菩薩なり」とおおせであります。法華經涌出品において、この四菩薩を上首として、六万恒河沙ごうがしやの地涌の菩薩が、大地から陸続と出現したと説かれております。これはもとより、別して日蓮大聖人の己心の生命についていえることであります。が、総じての立場で拝すれば、私どもも、この四菩薩の生命をすべて己心にたたえていっているということです。

御本尊に唱題していったとき、あの法華經の涌出品に説かれる無量の地涌の菩薩も、わが己心の菩薩であり、はたまた一切經の仏菩薩、そして、ありとあらゆる十界の衆生は、すべてわが己心のなかにあるのであります。ゆえに天台大師は「説己心中せつこしんちゆうしよぎやうほうもん所行法門」(己心の中に行ずる所の法門を説く)とされたのであります。結局、この己心の偉大な生命を説き顯していく対境が「觀心の本尊」であり、その実践が「觀心」すなわち御本尊を受持することにつきるのであります。

社会も揺れ動いています。それにつれて、人の心も猫ねこの目のように揺れ動いていくであります。しかし、私どもの信念のなかには、大宇宙と己心との偉大な律動りつどうが脈打っております。すなわち、御本尊という根源と、信仰という不動の一点があるということは、なににもまして、人生における強いささえであります。

なお、以上のように「我が如く等くして……」から「……己心の菩薩なり」の段について、師弟不

二、親子不二、君臣合体に拝するのは、主師親三徳具備の人本尊を開顕せられた「開目抄」の本意も包含されているゆえであり、そして、末法の人本尊としての御本仏日蓮大聖人の御生命は、いっさいそのまま、観心の御本尊のなかに移されているとの深意であります。

大聖人即御本尊、御本尊即主師親三徳具備の御本仏との甚深の義を深く拝するとともに、御本尊を拝することのありがたさを、いまさらのように実感するものであります。

一身一念法界に遍しあまね

妙楽大師云く「当まさに知るべし身土しんど一念の三千なり故に成道の時此の本理かなに称なづうて一身一念法界に遍あまねし」等云云

妙楽大師の摩訶止観まかしかんぶぎょうでんぐけつ輔行伝弘決の文であります。ひじょうにむずかしい文であります。この段の結びとして掲げられた文であり、成仏の境地の廣大深遠を知るうえで欠かすことのできない文でありますので、日寛上人の文段をよりどころに詳しく拝しておきます。

まず「身土」とは久遠元初自受用身の身土であり、十界互具・一念三千の御本尊になります。

「一念の三千」の「一念」とはわれらの信心の一念であり、したがって「身土一念の三千なり」と

は、自受用身の身土といっても、御本尊、妙法を信ずる私たちの一念のなかの三千である、ということとであります。

「故に成道の時此の本理に称^{かな}うて一身一念法界に遍^{あまね}し」とは、私どもの成仏の姿をいわれております。「本理」の「本」とは本地久遠元初であり、「理」とは難思境智^{なんしきょうち}の妙法であります。したがって「本理に称う」とは、久遠元初の境智の妙法にかなうことであります。

「一身一念法界に遍し」の「一身」とは五大からなる私どもの身体即生命であり、これは所証の境となります。「一念」は信心の一念で能証の智となります。すなわち、私どもの生命がそのまま、久遠元初の境智冥合の自受用身と顕れるとの意であります。

したがって、まとめてこの文の意味をいえば、御本尊が依正不二の一念三千の当体であるがゆえに、この御本尊を受持した私どもの生命も、即一念三千の当体となるということです。受持即観心の義は、ここにつきるのであります。

と同時に私は「一身一念遍^{いつしんいちねんへんのほうかい}於法界」の文は、仏界の生命がいかに関わりなく広大なものであるかを、また、衆生の生命も同様であるということを教えているように思われるのであります。たんに人界に十界を具足することの説明ではなく、衆生の生命がいかに大きく尊いものであるかを、雄大なスケールをもって示している文であり、真実の自由の境地を説いた御文であると読んでおきたいのであります。

「一身一念法界に遍し」といっても、抽象の世界の話に聞こえるかもしれない。しかし、現代科学の

知識は、人間生命がいかに巨大で精密な構造をもっているか、その一端を明らかにしております。

現代科学が明かす多くの例証

たとえば、われわれの肉体をとってみても、一つひとつの臓器は精妙そのものです。肝臓は主として身体の中に入ってくる物質の解毒作用を行います。現在わかっているだけで約二百種類の働きを有している。おそらく千種類の作用にもものぼると推定される。肝臓が作りだしているさまざまな化学物質の一つひとつは、人工的に作りだすことはむずかしい複雑なものばかりで、まさに一大化学工場と称すべきである。それを工場で作るとすれば、巨大な化学工場群を動員しても、まだ十分ではないともいわれている。肝臓の悪い人は精神状態にも影響し、夜中に突然、起きだしたり、夢遊病者のようになるといふ。

また、肺胞はいぼうの壁の全面積は、比較的大きな部屋四つ分ほどの広さになる。その肺が血液を清浄にするのであります。その血液を運ぶ血管の長さは九万六千キロ。地球を二周してあまりあります。それをすべての人間がそなえているのであります。

これが脳になると、もっと規模が大きい。千数百グラムの大脳には約二百億の脳細胞がある。その神経細胞には突起とっきがあつて、それがからみあつていくことによって知能の発達があるわけですが、そのからみあいの仕方によって個性ができていきます。その組み合わせたるや、地球的規模を超えて宇

宙的規模である。計算によれば、われわれを取り囲んでいる島宇宙のすべての原子の数よりもまだ多くなるともいうのであります。

単純な計算では、小さな電子卓上計算機でもわれわれはかなわない。大きな電算機ともなると、複雑な計算もいっきよにする。しかし、判断、創造などの高度な働きは、小さな脳細胞のほうがはるかに優れている。大腦に匹敵する人工頭脳をつくろうとすれば、現在の科学では地球の全表面を覆うほど巨大なものになるだろうとされており、それほどの規模と労力で作ったとしても、はたして人間の頭脳を超えるものが作れるかどうかは疑問であるといひます。

このように、外見たかだか一メートル数十センチの身体の臓器も、一つ一つが地球的規模、宇宙的規模の科学技術に相当する働きをもっているのです。なおかつ、大腦にしても、身体の各機能にしても、本来もっている力の数分の一を、人間は一生のあいだに使用するにすぎないのであります。これが人間の精神になると、もっと深遠で広大であります。意識的な精神活動さえ、いかに複雑多岐であるか、人間の生みだした人文、社会、自然の諸文明の成果をみるまでもなく、十分に知るところであります。

ところが、フロイト等によって見いだされた無意識の世界にいたると、もっと広大な世界であるといわれます。氷山の海面上に現れた部分を意識とすれば、氷山の海面下の部分を無意識にたとえられる。われわれが意識をもって行動しているものも、じつは無意識の命ずるところによつ

て、意識が引きだされっているとさえいわれているのであります。

心理学者・宮城音弥氏は、その著「精神分析入門」のなかで、無意識の力が意識や行動を動かす、つぎのような実例をあげております。私たちが偶発行動ぐふはつこうであると思っっているものでも、その底には、無意識の深海からの衝動しょうどうが働いているという例です。

チューリヒに住むある人が、休日に自宅で楽しく過ごそうか、それとも行きたくはないがルツェルンの知人との約束があるから、そこを訪問しようかと迷っていた。しばらく躊躇ちゅうちよしたあと、思いきつてルツェルンに向かった。そして、その途中の駅で朝刊を読みながら機械的に乗り換えた。ところが、やがて車掌がやってきて、初めて自分がチューリヒに帰る列車に乗り込んでいたことがわかったというのであります。

この事実、自宅で楽しい休日を通じたいという無意識の願望のほうか、その人の義務的な力、意識の判断よりも強く、彼の行動を支配したのは、まぎれもなく無意識の力のほうであったことを示している、と心理学者は主張しております。

また私たちは、ある人に会おうと思っっているのに、ふと、この約束を忘れてしまうことがあります。これを意図ぼうきやうの忘却ぼくわくというのですが、たとえば、つぎのような興味深い例があります。

ある人が知人を招待しなければならなかったことができたが、内心ではそれを望んではいなかった。彼は知人に電話をかけて「ご招待したいのですが、日時を正確に覚えていないので、のちほど手紙で招待状をお送りします」といった。しかし、彼は、当日をすぎるまで、招待状を出すことをすっかり忘

れてしまったのです。この場合も、その知人に会いたくないという無意識の行動が、彼の行動を支配してしまったと考えられます。

ブリルは「われわれは小切手の入っている手紙よりも、請求書の入っている手紙のほうを置き忘れやすい」と述べておりますが、人間心理の一つの模様であるといえましょう。

また、無意識からの力が色法の世界である身体に影響を与えずにおかないことも、精神身体医学でのかずかずの実験によって指摘されているところであります。

九州大学の池見酉次郎教授は「心療内科」という著書のなかで、無意識の力が身体にさまざまな病氣をおこすことを立証していますが、二、三の実例をとりあげてみたいと思います。

ある中年の未亡人の社長の話ですが、両側の太ももの付け根あたりから足先までしびれて、自力で立つこともできず、なにかにすがらなければ一歩も歩けない状態になってしまった。

その女性は、結婚してまもなく夫の戦死を知らされ、それ以後は遺児をかかえて自活してきた苦勞人ですが、四年ほど前に、ある会社を興して社長として経営に励んできた。ところが、二年ほど前に、信頼していた従業員に売掛金をごまかされて巨額の穴をあけてしまい、ひじょうなショックをうけ、そのときから人の心をまったく信用できなくなってしまったというのであります。同時に、そのころから、自転車に乗っているとき、足のしびれ感に気づくようになって、あらゆる治療をうけたにもかかわらず、いっこうによくならない。

この女性の場合、足が立たなくなった原因は、二年前のショックであり、自分以外は信頼できないという無意識の不信感であったことは明らかですが、本人はそれに気づくすべもなかったのであります。人間への心からの信頼を取り戻すことによって、初めてこの病気も治療しうるのであります。

「立つあたわざるショックのために、ほんとうに足が立たなくなった」という痛ましい話であります。

また、このような例もあります。数か月前からジンマシンと吐き気を訴えているサラリーマンの話ですが、この人の症状を日記につけさせたというのであります。

そうすると、毎週土曜日には、まったく無症状であり、日曜日の午後からジンマシンがはじめ、水曜日になると吐き気の症状があらわれてきた。さっそく、会社での状況をきくと、彼は職場で上役とうまくいっていなかった。仕事の内容も自分の希望に反していた。それが入社以来ずっと続いていたのです。

池見教授は、この病気の原因は、入社するときからの無意識の感情があらわれたものであると示唆しております。

心の内奥の感情のもつれ、未来への絶望、自己不信などが身体の上へに表出して、ジンマシンや吐き気をひきおこしていたのです。その証拠が、土曜日だけは解放感を味わうから無症状になり、日曜日の午後になると憂うつになり、不安や絶望が症状をおこさせているという日記の事実でありました。

このように、人間生命の無意識層にうずまき、情念や衝動の葛藤が、色法の世界を混乱させ、病気をさえひきおこしていくのであります。

しかし、いままで述べたようなことは、まだ比較的生命の浅い領域の出来事にすぎないのです。人間生命の内面に広がる領域は、われわれの想像さえできない深層へとつながっていくのであります。ユング心理学者であり、京大教授の河合隼雄博士は「無意識の構造」で、心の構造をつぎのように明言しております。

「ユングはこのような例から、人間の無意識の層は、その個人の生活と関連している個人的無意識と、他の人間とも共通に普遍性をもつ普遍的無意識とにわけて考えられるとしたのである。ただ、それはあまりにも深層に存在するので、普通人の通常の生活においては意識されることがほとんどないわけである」と。

また、普遍的無意識については「個人的に獲得されたものではなく、生来的なもので、人類一般に普遍的なものである」と。

この普遍的無意識という一個の人間生命の最深層は、その名の示すとおり、人類共通の基盤を形づくっているであります。そして、この深層には、人類発生以来、二百万年ともいわれるすべての精神的遺産が流れこんでいるというのです。

たとえば、これもユング心理学では有名なことでありますが、ユングの弟子、C・S・ホールとV・J・ノードバイは、その著書のなかで、人間の蛇恐怖、暗闇恐怖について、つぎのような趣旨のことを明言しております。

人間は、生まれてきてから、蛇や暗闇を経験することによって、これらの恐怖を身につけたのでは

なく、ただ経験は、恐怖の素質を強化し、再確認するだけである。われわれは、蛇や暗闇を恐れる素質を遺伝的に受け継いでいる。人類の先祖が無数の世代にわたって恐怖を経験してきたからである。つまり、このことは、人間生命の深層に、先祖の経験が記憶として刻印されている事実の証明となるのであります。

だが、無意識の大海は、人類先祖の経験を包含しているにとどまらない。さらには、人間以前の動物の先祖の経験さえもふくんでおり、最終的には、この大宇宙流転のあらゆる足跡が、一人の人間の最深部に脈動しているのであります。

ユングのいだいたイメージは、人類約四十億が一個の生命体であり、さらに、この大宇宙自体が巨大なる生命的存在である、そして、一人ひとりの人間は、その宇宙生命の根源力から生命エネルギーをえて活動する細胞のごときものであったと思われるのであります。この事実を、ユングは普遍的無意識という概念でさし示そうとしたのであります。

宇宙に遍満する仏界の生命がわが身に

「一身一念法界に遍し」の原理は、現代の自然科学の着目した一個の生命の広がり、直観的にさらに宇宙大に拡大してとらえたものであります。仏法のこの発想は鋭く、限りなく人間の可能性を謳いあげたものであります。自然科学が到達した人間の潜在力の説明は、いまや地球的規模をも超えるに

いたっているといえる。

しかし、仏法の説いているのは、さらに広く、法界遍満ほうかいへんまんであります。これほど広く強大なものはない。それをわが一身に湧現した存在を「自受用身」というのであります。

われわれが成就するところの自受用身とは「自ら受け用いる身みづか」であります。これを「御義口伝」においては「ほしいままに受け用いる身」と読まれている。仏身とは、みずからを自由自在に回転させ、大宇宙をも揺り動かす生命のことであります。

「我即宇宙」は、けっして抽象の世界のことではなく、億劫やくこくの辛勞を尽くす仏界の振る舞いにおいて、現実の莊嚴な事実であると拝すべきであります。

しかも、この原理によれば、われわれの生命のなかにも、仏身と同じ力が潜在していることは明瞭めいりょうであります。あと必要なのは、大聖人と同じ生命を、いかにすればわが生命の奥底から掘り起こすことができるかであります。

そのために、大聖人は「観心の本尊」を御図顕してくださいだったのであります。しよせん「受持即観心」の義が成り立つのは、これを受持すれば観心になる、すなわち仏の悟達になっているという本尊、「観心の御本尊」を顕されたればこそであります。この「観心の御本尊」即三大秘法の大御本尊御図顕に、日蓮大聖人の生涯にわたる御苦闘があられたのであります。

ゆえに、末法一切衆生のために、信仰の根本対象として大御本尊を建立された弘安二年十月、大聖人は、余は二十七年にして出世の本懐を遂げたと叫ばれたのであります。

その間の大難は筆舌に尽くせぬものであり、しかも、対告衆たる純信の末法民衆の代表というべき、熱原の農民信徒の死身弘法の実証をみられて、初めて御図顯され、授与せられたのであります。

まさに、弘安二年の大御本尊こそ、仏法の深遠の極理と御本仏の廣大無辺の慈悲とが凝集ぎようしゅうされた尊極の当体であり、末法万年の闇やみを照らす光源であります。

以来、連綿れんめん幾星霜——。「日蓮が慈悲曠大ならば・南無妙法蓮華経は万年の外・未来までもながるべし」(御書全集三二九頁)の御金言のままに、戒壇の大御本尊の御威光は、わが国一千有余万の人々の生命を照らし、全世界にまで及びつつあります。

そして教学の年・第二年を迎えた今、創価学会創立五十周年、そして宗祖第七百遠忌の佳節は、文字どおり指呼しこの間にあります。

どうか皆さん方におかれては、各自の一生成仏のため、全人類の幸福と平和のために、信心を奮い起こし、勇氣をもって行学の二道を進んでいていただきたいことをお願いして、講義を終わらせていただきます。

〔「大白蓮華」昭和五十三年一月号・二月号掲載〕

「佐渡御書」講義

文永九年三月 五十一歳御作
与弟子檀那

(御書全集 九五六ノ、九六一ノ)
編年体御書四七一ノ、四七六ノ)

大難の時こそ強盛な信心を

この御書は、日蓮大聖人が、もっとも大きい難を受けられ、佐渡の国へ流されたときに、弟子檀那に与えられた御書です。したがって「佐渡御書」と申し上げます。

このとき、多数の弟子檀那が退転しました。そこで、大聖人が「退転なんかしてはいけない、いまこそ強盛な信心をする時ではないか」と、強く指導された御文です。

当時、流罪というのは死罪につぐ重い刑罰で、食べ物もあまり与えられず、大聖人は、ときには雪を食^ゆしあがって、飢^うえをしのがれていました。そういうひどい待遇だったのです。

師匠がそのような大難にあっていますから、当然、弟子檀那のなかには、臆^{おくびよう}病になり、退転した人もいたでしょう。

日蓮大聖人は「こういう難にあった時こそ退転してはいけない。いま信心しきっていけば、成仏は

疑いない、といわれています。それが、この御書の元意です。

此文は富木殿のかた三郎左衛門殿大蔵塔たうのつじ十郎入道殿等辻さじきの尼御前塔いちいちに見させ給べき人人の御中おんちゆうへなり、京鎌倉に軍いくさに死しる人人を書付かきつけてたび候へ、外典抄文句もんぐの二玄げんの四の本ほん末勘文宣旨等まつかんもんせんじこれへの人人持もちてわたらせ給へ

「此文」すなわち「佐渡御書」は、富木常忍、そしてまた三郎左衛門（四条金吾）等のお弟子の方々に与えられたものです。

富木常忍も四条金吾も、大聖人のおんもとで、もっとも活躍した大信者です。それから「大蔵たうのつじ十郎入道」——この人はあまり御書にでていませんが、このように、大聖人が大迫害を受けられたときに、名前をおしたためくださった人でありますから、やはり強信な人であったと考えられます。

「一一」に見させ給べき人人の御中へなり——ここは、一人ひとり、多くの弟子に、この御書を見せてあげなさい。そして信心を奮起ふんきさせなさい。この御書は、弟子檀那全員に与えるのだということですよ。

「京鎌倉に軍に死る人人」——この御書は、文永九年三月のものです。この年の二月には、京都と

鎌倉で、北条一門の争い、すなわち自界叛逆難があつて、そうとうの人が死にました。そのときに、やはり、日蓮大聖人の弟子、信者のなかの武士で、亡くなつた人もいるであろう。その人たちの名前を、みんな書いてよこしなさい。ぜんぶ追善供養してあげますよ、という大聖人の大慈悲です。

大聖人御自身が、ほんとうは佐渡の国でたいへんな御難儀をしていらつしやる。しかし、そのことより、亡くなつた人々のことを思われて、追善供養してあげますよ、拔苦与樂の供養をしてあげますよ、とおおせになつてゐるのです。

この一文をみても、大聖人が仏さままでいらつしやる——御本仏の大確信でいらつしやるということが、よくわかるわけです。

そして「外典抄」また「法華文句」「法華玄義」あるいは勘文、宣旨等の資料も、こちらへ来る人に託して持つてきてもらいたいといわれています。

日蓮大聖人が、どれほど勉強なされていたかということがわかるでしょう。また、大聖人は根本をぜんぶ知つていらつしやいます。しかし、さらにこのように、参考として、本を持つていらつしやいとおっしゃつてゐるのです。

世間に人の恐るる者は火炎の中と刀劍の影と此身の死するとなるべし牛馬猶身を惜む況や人身をや癩人猶命を惜む何に況や壯人をや、仏説て云く「七宝を以て三千大千世界に布き満るとも

手の小指を以て仏經に供養せんには如かず」取意、雪山童子せつせんどうじの身をなげし樂法梵志がくほうぼんじが身の皮をはぎし身命に過すたる惜おしき者のなければ是を布施ふせとして仏法を習へば必かならず仏となる身命を捨する人。他の宝を仏法に惜おしむべしや、又財宝を仏法におしまん物まさる身命を捨すべきや、世間の法にも重恩をば命を捨て報ずるなるべし又主君の為に命を捨る人はすくなきやうなれども其数多し男子ははちちに命をすて女人は男の為に命をすつ、魚は命を惜む故に池にすほむに池の浅き事を歎きて池の底に穴をほりてすほむしかれども魚魚にばかされて釣つをのむ鳥は木にすむ木のひ低き事をおじて木の上枝にすむしかれども魚にばかされて網にかかる、人も又是かくの如し世間の浅き事には身命を失へども大事の仏法などには捨る事難し故に仏になる人もなかるべし

「世間に人の恐るる者は」——人が「恐ろしい」ということに二つある。

一つは「火炎ほのほの中と刀劍つるぎの影」——これは今でいえば戦争です。原爆も、水爆も入ります。大聖人のこの一節をみても、戦争反対です。戦争はみんな恐ろしいのです。この戦争を防ぐのが仏法です。正法です。

また「此身このみの死するとなるべし」——この生命が死ぬということも恐ろしい。その生命の問題を解明し、解決するのが、大聖人の仏法です。

したがって、絶対平和主義と、生命の根本的な救済、これが三大秘法の仏法なのであります。牛や馬でもなお命を惜しむ、いわんや人身においてをや、重病人でもなお命を惜しむ、生あるもの

は死にたくはないのです。たくさん病人がいますが、どんな病人でも、少しでも長生きしようと努力しています。死にたくない証拠です。

「何に況や壯人をや」——まして健康な人が、死をこわがるのは当然です。

仏が薬王品に説いていうのには「七宝を以て三千大千世界に布き満るとも」——これは、金銀等の最高の七つの宝をもって、三千大千世界に布き満たして仏に供養するということであり、それよりも手の小指を以て仏経に供養せんには如かず」——自分自身の体をいためて、仏に供養するほうが、この場合には小指を例にあげられています。もっと偉大なる供養になるのだということです。

三千年も昔に、ここまで経文に説かれているということは、ひじょうに革命的なことです。インドは、今日においてもそうですが、当時はいまよりもはるかに貧富の差がはげしかったのです。金持ちといったらたいへんな金持ちだった。その金持ちよりも、ほんとうに自分の体を使って仏に仕える、また、仏法のために活躍するという庶民の人々を、大きく宣揚しているのです。

なかんずく、大聖人の仏法は庶民のための仏法であり、それであって、また全体に通ずる仏法なのです。ぜんぶ、広く救っていける仏法です。

「雪山童子」は身をなげうって仏法を求めた。「樂法梵志」という人は、身の皮をはいで、それに經文を書きとめ、仏法を習おうと思った。そのようにして、みな仏になっている。

「身命に過たる惜き者のなければ是を布施として仏法を習へば必仏となる」

ということとは、当時は、このような布施をして仏法を習わなければならなかった。したがって、そ

の身をなげうって、身命を捨てて仏法を習った人が、みな仏になったのです。

今の時代は、その必要はありません。今の時代は、御本尊に題目をあげて、大聖人の仏法を人に知らしめていく折伏によって、大功德を得られるのです。昔は小乗教ですから、そのような修行をしなければならなかった。大聖人の仏法は、大乘のなかの大乘で、根本的に違うわけです。

しかし、原理は同じです。信心という心がけ、求道心は同じでなくてはいけないのです。

「身命を捨る人・他の宝を仏法に惜べしや」——身命を捨てて、随力弘通をしようという人が、他の宝を惜しんだらおかしいではないか。

「又財宝を仏法におしまん物まさる身命を捨てべきや」——仏法のために宝を惜しむような、ケチくさい人間が、広宣流布のために、どうしても大事な命を捨てるであろうか。したがって、仏になれるわけがない。「世間の法にも」——一般社会の法は世間法、仏法は出世間法といえます。一般世間、社会の法のうえからみても、重恩をば命を捨て報じているではないか。世間のことでも、重恩を感じて命を捨てた例は、歴史をみればたくさんあります。

「又主君の為に命を捨る人はすくなきやうなれども其数多し」

忠臣蔵で有名な大石内蔵助をはじめ四十七士は、主君のために命を捨てております。西洋でも、東洋でも、日本でも、このような例はたいへん多い。しかし大聖人は、そのような必要はないとおっしゃるのです。主君のためなどに捨てる必要はない。あくまでも、御本尊に題目をあげて生ききって、御本尊に題目をあげながら死んでいきなさいといわれています。これだけでよいのです。

「男子ははぢに命をすて」——今はそんな恥で命を捨てる人などはいませんが、男というものは見栄や体裁ていさいを重んずるものです。

「女人は男の為に命をすつ」——これは氣をつけなさいよ。これは今でも多いのです。男のために命を捨てたりしたら損してしまいます。御本尊以外に、信じて絶対にまちがいのないものはないのです。

「魚は命を惜む故に池にすむに……」——ここは、命ほど大事なものは無いということです。生命の尊厳を明かしていらっしゃるのです。色心不二しきしんふにの法理は、一貫して生命の尊さを説いています。

新興宗教はみな、生命力を奪う宗教です。人々を奴隷どれいにします。小乗教等は、厳しい戒律などによって、人々の主体性、個性を殺していく宗教です。日蓮大聖人の仏法は、人々の生命力、智慧ちゑを最高に発揮させていく宗教です。根本的に違います。

真言宗は、どうしても長男、一家の柱が倒れていく。残るのは女の人ばかりです。父親がいなくなってしまう。豊臣秀吉も、やはり真言宗です。だから長男がだめになってしまったのです。それから念仏は「念仏無間地獄」のとおりです。また神道しんとうの場合には精神障害者が多い。戦争中は神道が日本を支配しました。その代表的立場にいたのが大川周明おおかわしゅうめいで、やはり精神障害者です。

結局、ほんとうの生命の確立、幸福、それを説いていらっしゃるのは、大聖人の仏法だけです。

「池の浅き事を歎きて」——魚は、池が浅いとかまってしまいうから、それで池の底の方へ行つて、穴を掘つて、隠れよう隠れようとしているということです。しかし、エサによって釣つられてしまう。

「鳥は木にすむ木のひきき事をおじて木の上枝にすむ」——鳥は木の低いことをこわがって木の上の

ほうに住むけれど、やはりエサにだまされて、網にかかってしまう。

「人も又是^かくの如し世間の浅き事には身命を失へども」——人もまた同じようなものだ。恋愛に失敗して心中してしまったり、夫婦ゲンカ、兄弟ゲンカをして殺してしまったり、それから海や山に遊びに行つて、大事な命を捨ててしまったり、それでは鳥や魚と同じようだというのです。生命の前途がわからないという点では、動物と同じなのです。

一生涯、正しく生きいきと、いな永遠に崩れない幸福への道を、今後歩んでゆくには、この仏法をたもち、鏡とし、レールとする以外にない、といわれているのです。世間の浅きことに大切な命を捨ててはいけません。

「大事の仏法などには捨る事難し故に仏になる人もなかるべし」

世間の浅いことにはみんな命を捨てているけれども、大事の仏法には命を捨てない。ゆえに仏になる人も少ない。絶対の幸福、色心^{しきしん}ともに幸福に満ちみちた人生を、生ききっていける人は、ほんとうに少ないということです。

摂受・折伏時によるべし

仏法は摂受^{しやうじゆ}・折伏^{しやくふく}時によるべし譬^{たとえ}は世間の文^{ぶん}・武^ぶ二道の如しされば昔の大聖は時によりて法を

行ず雪山童子・薩埵王子は身を布施とせば法を教へん菩薩の行となるべしと責しかば身をすつ、肉をほしがらざる時身を捨つ可きや紙なからん世には身の皮を紙とし筆なからん時は骨を筆とすべし

仏法の修行には、時代によって、授受と折伏の二通りがあります。

正法、像法年間までは、釈尊の仏法ですから授受になります。末法の場合には折伏です。「時によるべし」とは、そう立て分けなくてははいけません。釈尊在世、正法、像法年間の時は授受、それから末法は、邪智、謗法の時といって、人々の根性が悪い時です。

その時は、御本尊を根幹として、折伏していかなくてはいけない。なんのканのと非難されるけれども、折伏によって大勢の人が御本尊を知り、救われてきたのです。末法の衆生は、人のいうことをなかなかきかない。生徒が学校の先生のいうことをきかない、そういう時代です。ですから仏法においても、すべて、折伏の精神でいく以外にないのです。

「譬ば世間の文・武二道の如し」

世間、社会においては、戦争の時は「武」です。平時は「文」です。授受、折伏もそのようなものだということです。末法のように、思想、宗教が紊乱して国が乱れている時には、闘諍言訟といって戦争の時代ですから、折伏のいき方をする以外にありません。

仏法は、かならず「授受・折伏時によるべし」です。授受ということは、相手が信じているものを

打ち破らないで、やわらかく人の機根にあわせながら教えていこうというやり方です。

釈尊の場合には、法華經を説くまえは「四十余年未顯眞実みけんしんじつ」といって、四十二年間、ほんとうのことをいわないで、衆生の機根を調節しながら説いていきました。これを授受というのです。

しかし、法華經は隨自意ずいじいといって、釈尊自身の境界で、そのまま最高の悟りの仏法を説いた。その意味からいえば、これは折伏になるのです、ですから、釈尊の場合においても、授受、折伏が、じつはあったわけです。

けれども、釈尊の仏法と大聖人の仏法を比べると、法華經も爾前經も、ともに釈尊の仏法は、ぜんぶ授受になってしまふのです。ですから、在世、正法、像法二千年までは、いっさいが釈尊の仏法を根底にした仏法ですから、總体的に授受ということになります。そして末法にはいった場合には、大聖人の仏法では、根幹がぜんぶ御本尊になりますから、いっさいの振る舞いが折伏の行動になります。「昔の大聖は」——「大聖」というのは、仏と訳してもよいし、立派な菩薩と訳してもよい。この場合には「大聖」は雪山童子せつせんどうじ、薩埵王子さつた等をさします。しかし、これらは結局、釈尊の過去世の姿ですから、仏になります。

昔の立派な人は、かならず時にしたがって仏法を修行しております。たとえば「雪山童子」、また「薩埵王子」——ともに釈尊が過去世において因位の修行をしていたときの名ですが、この人たちは、身を布施としなければ仏になれない時代であったがゆえに、自分の体を布施としてささげることが菩薩の修行としたのです。

以前、国語の本にも、雪山童子と鬼に姿をかえた帝釈天との対話がありました。あるとき雪山童子が、仏法を求めていると「諸行無常、是生滅法」と、これは涅槃經にある經文なのですが、それだけがどこからか聞こえてきた。後の句を教わりたいと一生懸命探すと、向こうの方に鬼がいる。そしてその鬼が、おまえの肉を食わせてくれれば後の句を教えてあげるといいます。そこで雪山童子が身を投げて、食べてくれというのです。すると鬼がパッと変わって、帝釈と現れた。じつは雪山童子の求道心をためしたというのです。そのことをおおせられているのです。

薩埵王子は、飢えのために子を育てられないでいた虎のために、自分の体を与えたといわれております。いまは肉屋へ行けば肉はたくさんあります。ですから、無理に自分の肉を食べさせる必要はないのです。

また、樂法梵志は、紙がなかったから、自分の皮をはいで經文の紙にしたり、または筆がなかったから骨を筆のかわりにしました。当時は、そういう修行をして仏になったのです。今は、紙はいっぱいあります。ですから、そのような修行は絶対に必要ない。

そのように現代では、当時とは、ぜんぜん修行法が違うのです。ところが、今の邪宗邪義は、ぜんぶ昔の修行法をやっているのです。大聖人の仏法の修行法は、最高に近代的なのです。二十一世紀、三十世紀、五十世紀、いな、末法万年尽未来際までの近代性をふくんだ仏法であり、修行法なのです。

今は、まだそのはしりですから、他の人々にはわからないのです。みな、いままでの釈尊の仏法とか、天台仏法とか、神道とか、キリスト教とか、そういう先入観念で大聖人の仏法をみておりますか

ら、どうしても、正しい判断ができない。だから皆さんが立派に成長して、だんだん理解をさせてもらいたいし、時代が進めば進むほど、科学が進めば進むほど、しだいに仏法に対する理解が深まっています。ですから、少々の批判とか苦難などに負けてはいけません。

破戒・無戒を毀^{そし}り持戒・正法を用^{もち}ん世には諸戒を堅く持^{たも}つべし
儒教・道教を以て釈教を制止せん
日には道安法師・慧遠法師・法道三蔵等の如く王と論じて命を軽うすべし、
釈教の中に小乗大乘権經実經・雜^{ぞうらん}乱して明珠と瓦礫と牛驢の二乳を弁^{わきま}へざる時は天台大師・伝教大師等の如く大
小・權実・顯密を強盛^{ごうじやう}に分別すべし

ここは、正法、像法、末法の時にしたがって、正しい修行のあり方を示されております。

「破戒・無戒を毀^{そし}り持戒・正法を用^{もち}ん世には諸戒を堅く持^{たも}つべし」

正法時代の修行は、戒をたもつことです。もともと「破戒」とは戒を破る、「無戒」とは釈尊の戒をたもたないということです。正法時代は、破戒、無戒ではいけなかった。戒をしつかりたもつことが正しい仏道修行でした。

「儒教・道教を以て釈教を制止せん日には道安法師・慧遠法師・法道三蔵等の如く王と論じて命を軽うすべし」

これは、像法時代の、天台出現以前の、權大乘教が流布した時代です。

儒教とは、中国の孔子の教えです。道教とは、やはり中国古来の外道の教えです。儒教だとか、道教だとか、そういう外道が、釈教すなわち釈尊の説いた仏教を批判して、流布することを止めようとしたときには、道安法師とか、慧遠法師とか、法道三蔵等が、仏教を妨げる王と戦ったごとく、命を捨てて戦わなくてはいけないということです。

その当時の歴史は、資料はいろいろ残っておりますから、将来、諸君が大学へでも行ったならば調べていただきたいし、または慧遠法師とか、法道三蔵の伝記などを読んで研究してください。

「釈教の中に小乗大乘権經実經・雜亂（ぞうらん）して明珠（みやうじゆ）と瓦礫（がりやく）と牛驢（ごろう）の二乳を弁（わきま）へざる時は天台大師・伝教大師等の如く大小・權実・顯密を強盛（かうじやう）に分別すべし」。

ここは全体として五重の相對から述べられています。

「釈教の中に小乗大乘」——これは大小相對です。このまえのところまでは内外相對です。

それから「權經実經」——これは權実相對です。それが雜亂して、乱れて、明珠——きれいな珠と、瓦礫（がりやく）——かわらのかけらと、また、牛とロバの乳を混同しているように、乱れている時は、天台大師や伝教大師のごとくに、大乘教と小乗教、權教と実教、顯教と密教とをしっかりと判別していきなさい、とのおおせです。

ここで「顯教」とは、だれにでもわかりやすい浅い法門、爾前教をさします。また「密教」とは、仏にしか理解できない甚深の法門、法華經を意味します。

また「道安法師・慧遠法師・法道三蔵等の如く王と論じて」というところは像法の前半です。そしてこの段の「天台大師・伝教大師等の如く大小・権実・顕密を強盛に分別すべし」のところは像法の後半です。この論じ方からいって、つぎには、末法の日蓮大聖人の時代がくるのです。

師子王のごとき信心を

畜生の心は弱きをおとし強きをおそる当世の学者等は畜生の如し智者の弱きをあなづり王法の邪をおそる諛臣と申すは是なり強敵を伏して始て力士をしる、悪王の正法を破るに邪法の僧等が方人をなして智者を失はん時は師子王の如くなる心をもてる者必ず仏になるべし例せば日蓮が如し、これおごれるにはあらず正法を惜む心の強盛なるべしおごれる者は必ず強敵に値ておそる心出来するなり例せば修羅のおごり帝釈にせめられて無熱池の蓮の中に小身と成て隠れしが如し、正法は一字・一句なれども時機に叶いぬれば必ず得道なるべし千経・万論を習学すれども時機に相違すれば叶う可らず

なんといっても「佐渡御書」の前半の肝心要はこの段です。ここさえはつきりしていればよいのです。

「畜生の心は弱きをおどし強きをおそる」

「畜生の心」とは、弱い者に対しては威張り、いじめて、強い者にはへつらうという、いやしい心です。こういう心であってはいけない。たとえ相手がどんなに強かろうと、悪い者に対しては断固、戦わなくてははいけません。

「当世の学者等は畜生の如し智者の弱きをあなづり王法の邪をおそる諛臣ゆしんと申すは是なり強敵きやうてきを伏して始はじめて力士をしる」

「当世の学者」とは、大聖人御在世当時の学者、邪宗の僧侶たちです。また現在の学者にもあてはまります。これらの学者等は畜生のような心をもっている。「智者の弱き」——日蓮大聖人が、権力をもたず、お一人であるのをあなどり、権力者の横暴な力をおそれ、へつらっている。「諛臣ゆしん」というのは、このような者をいうのである。

強敵を倒してこそ、はじめてその力の強いことを知ることができるのである。

「悪王の正法を破るに邪法の僧等が方人かたうどをなして智者を失はん時は師子王の如くなる心をもてる者必ず仏になるべし」

「悪王の正法を破るに」——「王」とは権力者、「悪王」とは悪い権力者のことであり、ここでは北条一門のことをさしています。

「邪法の僧等が方人かたうどをなして」——時の権力者が正法を破ろうとしているそのときに、邪法の僧等が方人をなす、仲間になるということです。大聖人御在世当時でいえば、極樂寺良観や建長寺道隆のこと

であり、現在でいえば、全日仏や新宗連がまったくこのとおりでしょう。

「智者を失はん時は」――「智者」とは、日蓮大聖人です。現在でいえば、日蓮大聖人の教えを正しく信奉し実践している日蓮正宗創価学会も、その末流の一分にあたるといってもよいでしょう。そしていま、日蓮正宗そして創価学会を破壊しようとする陰謀が、しばしばあります。しかし、私たちはこの大難を喜ばなくてはならないのです。

なぜならば、このような情勢だからこそ、広宣流布の戦いに、師子王のごとき信心をもって励んでいくならば、その人は、かならずこの御金言どおりの結果になれるからです。

「師子王の如くなる心をもてる者」の「心」とは信心です。たいへんなときほどがんばれば、偉大な功德があるのです。

皆さんの日常生活においても、競争率の激しい試験に勝った場合に、あの人は、なかなかがんばったな、頭がいいな、と思うでしょう。競争が激しければ激しいほど、勝利の価値は大きいのです。これはオリンピックにしても、野球の試合にしても、世間の事象のすべてに通ずることです。仏法は道理ですから、その道理は同じなのです。

また「師子王の如くなる心」とは、私たちの信心に約していえば、あくまでも、困難にぶつかった場合に、御本尊を中心に題目を唱えて唱えて唱えぬいていく者という意味になります。個人においても、学会においても、広宣流布においても、結論はそこへきます。

しかし、題目を唱えるというだけのことなら、だれでもできます。ほんとうの師子王の心とは、あ

くまでも広宣流布を実現するという一念、戦いの信心がなくてははいけない。受け身でなく、積極的でなくてはならない。「よし、やるぞー みんな退転しても、自分はやるぞー 断じて広宣流布するぞ、大聖人の教えを最後までいいきるぞー」と、その決意がなくてははいけません。

受け身の題目と、積極性の題目と、それは違います。積極性が師子王です。建設です。

戸田第二代会長は牢へ入られました。しかし「断じて広宣流布する、負けてなるものか」と決意され、題目をあげられたのです。それが師子王の心です。

建設的、積極的な強さ、同志を守ってみせる、広宣流布を勝ち取ってみせる、一人立ってみせるぞという、その強さがなくてははいけません。しかし、われわれはみな凡夫で、一人ひとりは弱いものです。だからこそ団結していきましょう。団結は力です。互いに励ましあっていくのです。また、人を励ましていけるような自分になっていくのです。

大聖人は御本仏だから、お一人で世界を変え、宇宙を動かされました。われわれは、そうはいきませんから、多数の人間が団結して、一つの目的に向かって、広宣流布を願って、題目を唱えていけば、大聖人御在世当時と同じように、世界をも変えていきます。今は民主主義の時代ですから、民衆が起ち上がる時です。その民衆の題目によって、大聖人の所作と同じようにさせてくださるのです。

「例せば日蓮が如し、これおごれるにはあらず正法を惜む心の強盛なるべし」

すなわち、大聖人こそ「師子王の如くなる心」をもって戦ってきた、もっともよい例である。これは、おごっているのではない、慢心しているのでもない。すなわち正法を惜しむ心が強く、民衆を救

おうという心が強いから、このように実践してきたのである。

私たちもまた、「正法を惜む心」が強盛でなくてはいけません。その人には仏界が湧現します。御本尊を大事にしよう、総本山を大事にしよう、仏法を守ろう、この心が大事なのです。そこから情熱ができる。丈夫の心が、脈々とでてくるのです。利己主義ではできません。

「おごれる者は必ず強敵に値ておそるる心出来するなり例せば修羅のおごり帝釈にせめられて無熱池の蓮の中に小身と成て隠れしが如し」

慢心している者は、かならず自分より強いものにあうと、恐れる心がでるものである。たとえば、おごりたかぶって大きくなっていた修羅が、帝釈に責められて、無熱池の蓮のなかに小さくなって隠れてしまったようなものだ、とのおおせです。

「正法は一字・一句なれども時機に叶いぬれば必ず得道なるべし」

「正法」とは日蓮大聖人の仏法です。具体的にいえば大聖人の御書が正法の一字、一句になります。これが末法の正法であり、成仏できる法です。他の經、釈、論ではだめなのです。

「千經・万論を習学すれども時機に相違すれば叶う可らず」

あらゆる哲学、あらゆる經典等を学んだとしても、時機に相違すれば、つまり現在においては、日蓮正宗の御本尊を根本としないかぎり、絶対に成仏することはできません。いくら東大でインド哲学をマスターして博士になったとしても、絶対的幸福境涯は得られない。

私たちは、日蓮正宗に入信できてほんとうによかったのです。そのことは、あとになって、皆さん

が、いろいろな時代を生き、人生の複雑性を知り、さまざまな体験を積んできて、初めてわかってきます。ですから御本尊だけはきちんと持^{たも}っていないさい。あとで振り返ってみて、大勢の人々をみていけばわかります。

「立正安国論」の予言的中

宝治の合戦^{かつせん}すでに二十六年今年二月十一日十七日又合戦あり外道・悪人は如来の正法を破りがたし仏弟子等・必ず仏法を破るべし師子^{しし}身中の虫の師子^{しんちゅう}を食^はむ等云云、大果報の人をば他の敵やぶりがたし親^{した}しみより破るべし、薬師経に云く「自界叛逆難^{じかいはんぎやくなん}」と是^{これ}なり、仁王経に云く「聖人去る時七難必ず起らん」云云、金光明経^{こんこうみょう}に云く「三十三天各瞋恨^{しんこん}を生ずるは其^その国王悪を縦^{はしい}にし治せざるに由^よる」等云云

ここでは、自界叛逆難をはじめとする七難が起こっているのは、立正安国論の予言どおり、正法を用いない罰であり、日蓮大聖人を佐渡へ流した罪によるのであることを示されています。

「宝治の合戦」とは、宝治元年に、三浦一族が北条一族に対して謀叛^{むはん}を起こして滅亡した有名な合戦です。鎌倉幕府の内乱です。それから二十六年たって文永九年二月に、また内乱、自界叛逆難が起き

た。すなわち、北条時宗ときむねの兄時輔ときすけが、弟の時宗に執権職しつけんをとられたことを恨み、京都と鎌倉とで同時に叛亂を起こそうとして失敗し、殺された事件です。

「外道・悪人は如来の正法を破りがたし仏弟子等・必ず仏法を破るべし師子身中の虫の師子を食等云云」

外道、悪人は、如来の正法を破ることが絶対にできない。もし仏法が破れるとしたら、それは内部の者が破るのです。師子はどんな敵にも負けないが、自分の身中に発生した害虫には弱いのです。

皆さんも、創価学会を護る大事な役目があるのです。最後まで団結していただきたいと思います。現在のことは、すべて最後は皆さんに、いっさいを任せていくための礎石そせきなのです。ですから、みんな尊敬しあって、ガッチリ団結して、一人も師子身中の虫、悪人を内部からは発生させないぞ、という確信をもって進んでいただきたいと思います。それを覚えておかなくてははいけません。

自分が師子身中の虫になってもいけない。また、師子身中の虫をわかしてもいけない。内部が大事なのです。これは私の決意です。それは、また代々の会長の精神でもあるのです。みんなで結束するのです。

会長は一人です。これは仕方がない。何人もいたら派閥になってしまいます。あとは皆さんが、御本尊を根幹にして、立派に成長し、そして世界の広宣流布を成し遂げようという異体同心の心で、お互いに尊敬しあい、信頼しあって進んでいただきたいと思います。

「大果報の人をば他の敵やぶりがたし親したしみより破るべし」

「大果報の人」とは、ここでは北条時宗のことをいわれていますが、もっとも大きい大果報の人は、大御本尊を持った人です。大御本尊を持った人は他人には破られない。しかし内部からは、怨嫉や反感で破られてしまうのです。そのことは、十分気をつけていきなさいとおっしゃっているのです。

いままでは創価学会には、そんなことはありませんでした。だが、これから将来が問題である。というのは、みんな社会的に偉くなってしまふ。そして、だんだんと信心を忘れてきて、我見がでてき、怨嫉が始まるのです。そのときに、それを食い止め、信心の伝統を護っていくのがあなた方です。

「薬師経に云く『自界叛逆難』と是なり、仁王経に云く『聖人去る時七難必ず起らん』云云、金光明経に云く『三十三天各瞋恨を生ずるは其の国王悪を縦にし治せざるに由る』等云云」

薬師経に「自界叛逆難」と書いてあるではないか。このたびの北条一門の内乱は、幕府が、大聖人を島流しにしたから起こったのである。立正安国論の予言とおりです。それをわが弟子檀那はわかっていきなさい、とおっしゃっているのです。

日蓮大聖人は、御年三十九歳のとき、立正安国論ですでに、七難のうち五つの難が起きている。このまま北条幕府が正法を護持しないならば、さらに自界叛逆難、他国侵逼難が、かならず起こってくる」と予言されていました。その自界叛逆難が、ここでまず的中したのです。

それからこのつぎに、他国侵逼難として、元寇の難があらわれてきます。すべて大聖人のおおせどおりです。

ところで、七百年過ぎた今日においては、その七難の起こる順序が逆次になっています。すなわち

他国侵逼難の太平洋戦争から始まったのです。今は自界叛逆難に移っています。日本じゅう、世界じゅうが自界叛逆難です。それから物価が上がるとか、七難がだんだんと現れてきている。疫病、これも七難のなかほどにでてきます。

仁王經のなかの「聖人」とは、日蓮大聖人のことです。大聖人が去る時とは、佐渡へ流された時です。鎌倉にいらっしゃればまだよかったのに流されたから、七難が厳然と起こってきた。

またじつをいえば、他国侵逼難も当時すでに起こっている。それは元の使いがすでに来ていて、その兆^{きざし}がありました。

それから最後に「金光明^{こんこうみょう}經に云く『三十三天……』——これは天上界を三十三天に分けてあるわけです。ぜんぶの天上界が怒りをなす。瞋^{しん}恨^{こん}を生ずる。それは、国王が邪宗邪義をほしいままに流布させて、正法をおさえるから、三十三天が怒りをなして、自界叛逆難も起こるし、他国侵逼難もある。三災七難が競い起こるとの予言書です。

大聖人は全世界の棟梁

日蓮は聖人にあらざれども法華經を説の如く受持^{じゆじ}すれば聖人の如し又世間の作法兼^{かね}て知るによて注^{しる}し置くこと^{これたゞ}是^{べか}違^いう可^{べか}らず現世に云^いをく言^{たが}の違^いはざらんをもて後生^{ごじやう}の疑をなすべからず、日

蓮は此関東の御一門の棟梁なり・日月なり・亀鏡なり・眼目なり・日蓮捨て去る時・七難必ず起るべしと去年九月十二日御勘氣を蒙りし時大音声^{だいおんじやう}を放てよばはりし事これなるべし纔に六十日乃至百五十日に此事起るか是は華報^{けほう}なるべし実果の成ぜん時いかなげか^歎はしからんずらんあるということです。

「日蓮は聖人にあらざれども」とは、御謙遜^{けんそん}です。「説の如く受持すれば」とは、色説^{しきとく}です。大聖人が、身口意^{しんくうい}の三業^{さんごう}で、法華經のままの實踐をなさっているがゆえに「聖人の如し」、すなわち聖人であるということなのです。

「又世間の作法兼て知るによて」の「作法」というのは、理法と訳します。理の法、道理の法ということです。それは、悪人、正法誹謗の者ばかりがふえてくれば、世の中はどうなっていくか、それをまえもって見ぬいておられるのです。

「注し置くことは是違^{これたご}う可^{べか}らず現世に云^いをく言の違はざらんをもて後生^{ごじやう}の疑をなすべからず」

ここで断言なさっているのは、大聖人が、立正安国論でなさった予言が、現世に厳然とあらわれてきたではないか、ということです。なにしろ大聖人が佐渡に御流罪になったので、みんな疑ったのです。疑ったけれども、現実には、大聖人が立正安国論で予言されたとおりになってきた。

この実証をみて、信心を全うするならば、かならず後生に成仏できることも、信じていきなさい。

また、大聖人の門下は、かならず「現世安穩、後生善処^{ごじやうぜんじょ}」になるのだから、大聖人のいったことを疑わないで、素直に信心していきなさい、とのおおせです。

「日蓮は此関東の御一門の棟梁なり・日月なり・亀鏡なり・眼目なり」

「関東の御一門」ということは、一往は北条幕府ですが、再往は全日本ということです。全日本ということは、依正不二で、全世界ということになります。これは日寛上人の文段に、明瞭に示されています。

日蓮大聖人は、その「棟梁なり」——全世界の棟梁、柱である、との御文です。これは主師親の三徳のうち、主徳をあらわします。「日月なり・亀鏡なり・眼目なり」とは、日蓮大聖人の師徳をあらわしています。

「日蓮捨て去る時・七難必ず起るべし」

大聖人を流したから、当然、七難が起こっているのです。

たとえば、ここに、ひじょうに人柄のよい、そしてまた聡明な人がくれば、なんとなく雰囲気が変わるものです。きれいなお嫁さんがくれば、まわりの雰囲気が変わります。一人の人間で、そのように変わっていきます。ここにマイクを置けば、多数の人に大反響する、一個の当体でそうなるのです。一人のよい支部長がいれば、支部員がみんな変わる。よい部隊長がいれば部隊が変わる。悪い幹部がいますと、みんなが迷惑をし、なんとなく悪影響がおよんでくるものです。一人の平凡な存在であっても、それだけ作用が大きいわけです。

ケネディが死んだときも、そのケネディはたった一人ですが、アメリカの国民にも、それから自由圏の人々にも、さらに共産圏の人々にも、なんらかの動揺を与え、注目をされました。それらもすべ

て、ただ一人の人間の作用です。

いわんや、日蓮大聖人は、宇宙の本源をぜんぶ悟っていらっしゃる末法の御本仏です。その方を佐渡へ流したり、いじめたりした場合には、宇宙に、大きい天変地天、ならびにその影響によって、国土とか、社会に、なんらかの衝動、結果というものがあらわれないわけがありません。

「去年九月十二日御勘気を蒙りし時大音声を放てよばはりし事これなるべし」

この自界叛逆難、他国侵逼難のことは、前年の九月十二日、竜口の法難のとき、日蓮大聖人が平左衛門尉に向かつて大音声でいったことである。わずかに六十日に蒙古の使いが来、百五十日で自界叛逆の現証が現れているではないか。

「是は華報なるべし実果の成ぜん時いかなげかはしからんずらん」

日蓮大聖人を迫害した結果、自界叛逆難が起こってきた。しかし、これは華報、まだ軽い報いである。そのつぎの「実果の成ぜん時」、実果とは未来の重い果ということで、ここでは蒙古軍の襲来や国じゅうを巻きこむような内乱を意味しますが、そのときはいったいどうするつもりなのか、といわれているのです。

世間の愚者の思に云く日蓮智者ならば何ぞ王難に値哉なんと申す日蓮兼ての存知なり父母を打子あり阿闍世王なり仏阿羅漢を殺し血を出す者あり提婆達多是なり六臣これをほめ瞿伽利等こ

「日蓮智者ならば何ぞ王難に値哉なんと申す日蓮兼ての存知なり」

世間の信心していない人々は、日蓮大聖人がほんとうに智者ならば、どうして「王難」、すなわち竜口の法難や佐渡の流罪にあうのか、などと疑問に思っている。しかし日蓮大聖人は、それらの大難にあわれることは、「兼ての存知なり」、まえまえから知っておられたというのです。

阿闍世王あじやせは父の頻婆沙羅王ひんばしやらを殺し、母をも殺害しようとした。また提婆達多は釈尊を殺害しようとして大石を投げ、釈尊の足の小指を破って血を出したし、多数の阿羅漢を殺しているのである。

「六臣これをほめ瞿伽利等くぎやりこれを悦ぶ」

謗法の人間は、そのような悪逆の行為をほめ、喜ぶものなのである。

日蓮当世には此御一門の父母なり仏阿羅漢あらかんの如し然しかるを流罪し主従共に悦びぬるあはれに無慚むざんなる者なり謗法の法師等ほつしが自ら禍とがの既に顕あらわるるを歎なげきしが新かくなるを一旦いったんは悦ぶなるべし後には彼等が歎なげき日蓮が一門に劣るべからず、例れいせば泰衡やすひらが弟せうとを討うち九郎判官はうがんを討うちて悦よろこしが如し既に一門ほろぼを亡ほろす大鬼の此国に入なるべし法華経に云く「惡鬼入其身あつきにゆうごしん」と是なり

「日蓮当世には此御一門の父母なり仏阿羅漢あらかんの如し」

この御文が親の徳にあたります。さきにあげた主徳と師徳をあわせ、大聖人は、三徳具備の末法の御本仏であることをお示しになっているのです。

その大聖人を島流しにして、主君も家来も、みんな喜んでいゝとは、哀れなことだ。また邪宗の法師等も、自分たちの謗法の罪が、大聖人の折伏によってすでに現れているのを嘆いていたが、このように大聖人が島流しにあつたのをみて、いったんは喜んでいゝであらう。しかし、後には、彼らの嘆きは、今の大聖人門下の嘆きに劣らない、たいへんなものにならう、といわれています。

「例せば泰衡たいへいがせうとを討九郎判官こうはんを討て悦よろこびしが如し既に一門を亡ほろす」

藤原泰衡は、奥州の平泉ひらいずみにいた有名な豪族、秀衡ひでひらの子供です。父の秀衡の遺言によって源義経みなもとよしつねを匿かくまっていたが、頼朝の圧力に耐えきれず、義経の味方であつた弟の忠衡ただひらを討ち、義経を討ちました。しかしその後、頼朝の討伐をうけて、敗走の途中、家来の河田四郎に殺害されて、一族滅亡してしまつたのです。

邪宗を信じている謗法の徒は、今は大聖人が難にあつていゝのをみて喜んでいゝが、この例のおおりに、後にはかならず滅びていくのだということです。

「大鬼の此国に入なるべし法華経に云く『悪鬼入其身あくきにゆうごしん』と是なり」

日蓮大聖人を島流しにして、みな喜んでいゝのは、すでに日本中に謗法がはびこつていゝのである。法華経に「悪鬼入其身」と説かれていゝのがこれである、とのおおせです。

日蓮大聖人に先業なし

日蓮も又かくせめらるるも先業なきにあらず不輕品に云く「其罪畢已」等云云、不輕菩薩の無量の謗法の者に罵詈擲せられしも先業の所感なるべし何に況や日蓮今生には貧窮下賤の者と生れ旃陀羅が家より出たり心こそすこし法華經を信じたる様なれども身は人身に似て畜身なり魚鳥を混丸して赤白二帝とせり其中に識神をやどす濁水に月のうつれるが如し糞囊に金をつづめるなるべし

「日蓮も又かくせめらるるも先業なきにあらず」

日蓮大聖人が、このように佐渡の国へ流されたのも先業のゆえである、過去世の罪業のゆえである、とのおおせです。

しかし、これは、あくまでも私ども末法の衆生を教化し、一生成仏せしむるために、因果の理法を示してくださったところにほかなりません。日蓮大聖人は久遠元初の自受用報身如来、人法一箇の当体でありますから、先業のあるわけがないと考えるのが道理です。

しかし大聖人も、少年時代、清澄寺にはいられ、道善房のもとで念仏も称えられたと思われま

これらのことは、外用の姿の面においてではありませんが、一つの罪障であるとも述べられております。

「不輕品に云く『其罪畢已』等云云」

ここで大事なことは、皆さんが信心をまっとうしていく過程には、自分の罪業をぜんぶ消していくために、どうしても三障四魔という具体的な現象なり、難がある。しかし、それらに信心で敢然と挑んでいったとき、「其罪畢已」（其の罪畢え已って）、すなわち罪障を消滅できる。そして、絶対的な幸福、永遠の幸福を確立することができなのです。

たとえば、お風呂へは行ってよごれをとるでしょう。そのよごれはきたないですが、洗い去った後は、清潔になり爽快な気分になるでしょう。その道理と同じなのです。

したがって難を恐れてはいけません。堯爾かんじとして、その嵐あらしというか、難というか、一つの現象を乗り越きっていく信心がなければ、一生成仏はかないません。

「不輕菩薩の無量の謗法の者に罵詈りちややく打擲うちちやくせられしも先業の所感なるべし」

過去において不輕菩薩が、たくさんの謗法の連中に罵詈されたたり、打擲されたのも、ぜんぶ過去世の謗法の所感であるということです。

「何いかに況いゝや日蓮こんじょう今生には貧窮下賤びんぐげせんの者と生れ旃陀羅せんだらが家より出たり」

日蓮大聖人は、貧乏な、賤しい、なんの特権も名誉もない家にお生まれになった。旃陀羅の家、すなわち漁師の家に生まれ、民衆のなかにお生まれあそばされた。これこそ大聖人が、民衆を救済され

る仏さまであるという証拠です。

大聖人は、どこまでも庶民の味方として振る舞っていらっしゃるし、説いていらっしゃるのです。皆さんが、究明すればするほど、実践すればするほど、大聖人の仏法の民主性がわかってきます。

なにしろ、まだ末法にはいつて、わずか九百年前後です。末法にはいつて一千年目が、西暦二千五十二年になるのです。末法万年^{じんみちうさい}尽未来際にわたる大聖人の仏法です。したがって、現在は土台のなかの土台です。先駆のなかの先駆です。時代が進めば進むほど、科学が進めば進むほど、また、人々の社会観、人生観、生命観などが進めば進むほど、大聖人の仏法の正しさが証明されていくことは、絶対にまちがいありません。

「すこし法華経を信じたる様なれども」——御謙遜^{けんそん}の立場でいわれています。凡夫僧のお姿です。「身は人身に似て畜身なり」——大聖人の仏法は、どこまでも人間性を根本とした仏法です。虚像^{きやうざう}ではない。形式でもない。きらびやかでもないのです。ほんとうの人間性そのままの本源的な説き方をしているらしいのです。

「魚鳥を混丸^{こんがん}して」とは、魚や鳥を食べて自分の体ができるという意味です。「赤白二滯^{せきびやくたい}とせり」とは、お父さん、お母さんから生まれてきたということなのです。

「其中^{そのなか}に識神^{しきしん}をやどす濁水^{だくすい}に月のうつれるが如し糞囊^{ふんのう}に金^{かね}をつつめるなるべし」

そのなかに識神、すなわち人間としての精神、生命を宿している。それはちょうど、濁った水に月が映っているようなものであるし、糞囊に金を包んでいるようなものであります。

権力を恐れず悠然と前進

心は法華經を信ずる故に梵天帝釈をも猶恐しと思はず身は畜生の身なり色心不相応の故に愚者のあなづる道理なり心も又身に對すればこそ月金にもたとふれ、又過去の謗法を案ずるに誰かする勝意比丘が魂にもや大天が神にもや不輕輕毀の流類なるか失心の余殘なるか五千上慢の眷屬なるか大通第三の余流にもやあるらん宿業はかりがたし鉄は炎打てば劍となる賢聖は罵詈訕して試みるなるべし、我今度の御勘氣は世間の失一分もなし偏に先業の重罪を今生に消して後生の三惡を脱れんずるなるべし

「心は法華經を信ずる故に梵天帝釈をも猶恐しと思はず」
ここは大事なところです。皆さんも、これから十年先、二十年先、学会を背負っていくときに、この言葉を忘れないでもらいたい。

「心は法華經を信ずる故に」——末法の法華經、すなわち三大秘法の南無妙法蓮華經、即御本尊を信ずるゆえに「梵天帝釈をも猶恐しと思はず」です。梵天、帝釈とは、生活に約していえば、権力者です。今でいえば、総理大臣や大臣級、大金持ちの人々で、民衆をいつも愚弄したり、正法を護持して

いる者をいつも弾圧しようとし、小バカにしている連中をさすのです。

御本尊を持った者は、そのような輩を断じて恐れてはならない。勇気がなくてはいけないのです。正法を護持する人を弾圧する者に対しては、断固、戦いぬくぞという決心がなければいけない。

「身は畜生の身なり」

身体は、あくまで凡夫の身であるということです。

「色心不相応の故に愚者のあなづる道理なり」

ということは、日蓮大聖人は皇族として生まれて信心したのでもない。釈尊の場合には王家の生まれですが、大聖人はそういう立場でもない。いちばん貧乏な旃陀羅の家に生まれて、なんの名誉も、財産も、位もないから、いくら法華経が第一といっても、みな侮るであろうという意味です。

「心も又身に対すればこそ月金にもたとふれ」

心も、そのような貧しい身に対するから月や金にも譬えることができるのである、とおおせです。

「又過去の謗法を案ずるに誰かする勝意比丘が魂にもや」

今は心に法華経をたもっているとはいっても、だれが、その過去にどんな謗法の罪があるかを知ることができようか。過去をたずねるならば、小乗教に執着して、正法を毀った罪によって、生きながら地獄に堕ちた勝意比丘のような生命をもっているかもしれないということです。

「大天が神にもや」

大天という人は、仏の滅後百年にインドに生まれた人です。父を殺し、母を殺し、さらに阿羅漢を

殺し、三逆罪を犯した身で出家しました。そして、我見で仏法を乱し、後に仏教界分裂の源となった人です。過去をたずねれば、その大天の生命であったかもしれない。

いまでも、そういう人がいるかもしれないから気をつけなければいけません。また、そういう人になつてはいけません。邪宗教は、ぜんぶこの眷属です。勝意比丘の眷属であるし、大天の眷属です。

「不輕輕毀の流類なるか」

不輕とは、威音王仏の滅後、像法の時代に法華經を受持した人です。その不輕菩薩をそしり、千劫のあいだ、阿鼻地獄に墮ちた人々の子孫でもあるのだろうか。

「失心の余残なるか」

失心とは、寿量品に説かれている本心を失った者のことです。すなわち、釈尊が法華經を説いたとき、五百塵点劫の昔の下種を忘れてしまつて、信じようとしなかった者のことです。その失心の者の一人であろうか。

「五千上慢の眷属なるか」

釈尊が方便品を説いていたときに、五千人の増上慢の人々が、釈尊の説法をすべて悟つたと思つて退座しましたが、その五千人の増上慢の者たちの眷属であろうか。

「大通第三の余流にもやあるらん宿業はかりがたし」

過去に釈尊が、大通智勝仏の第十六番目の王子として法華經を説いたときに、ある人々は信心して仏になり、ある人々は信心したが途中で退転し、後に釈尊によつて救われた。そして残りの第三の人

人は、まったく法華經を信じようとしなかった。その人々が「大通第三」ですが、その流れをくむ者であろうか。

このように、過去をたずねてみるならば、われわれの宿業ははかりがたいのです。

「鉄は炎打てば劍となる」

鉄というのは、熱いうちに打てば打つほど、立派な劍とすることができるとのことです。この鉄とは、いまの皆さん方のことです。

「賢聖は罵詈雑言して試みるなるべし」

賢人、聖人というのは、世間から悪口され、迫害を受けて、初めてその真価がわかるのです。迫害を受けながら、悠然と前進できる人が、ほんとうに偉いのです。

たいていの人は恐がったり、世間体を考えたり、臆病になったりします。そういう人は、根本的には偉くないのです。みえっぱりで、確信も、哲学も、信念もないということになってしまう。個人も団体も、ぜんぶ同じです。ここは大事なところです。

ですから、なにがあっても、それを試練と考えて、喜んで挑んでいくことです。この御書のこの段を、一生涯、どんなことがあっても忘れてはいけません。

「我今度の御勘気は世間の失一分もなし」

大聖人の島流しは、世間の失はなにもない。世間的には、なにも悪いことはしていないというのです。

「偏ひとへに先業の重罪を今生こんじょうに消して後生ごじょうの三悪を脱だつれんずるなるべし」

このように日蓮大聖人が、多くの難をうけられているのは、過去世の重罪をぜんぶ消してしまつて、未来に地獄、餓鬼、畜生の三悪道に墮おちることをまぬかれていくためなのです。

御本尊を中心とし、広宣流布に進んでいけば、罪業はぜんぶ消えてしまいます。皆さんは、若いときから信心しているから、早く消してしまふことができます。ですから皆さんが、ちょうど私と同じ年輩になったときには、さぞかし立派な境涯けいがいになっていることでしょう。こんなにも自分は幸せになったか、すごい立場になったか、といえるような人生を遊あそ戯げしていくことはまちがいありません。それは確信をもってください。

ただし、この世の中は娑婆しゃば世界です。使命があればあるほど、いろいろとたいへんなこともあります。だが、たいへんなことがあるということは、より以上福運が積めるといふ証拠しやうこなのです。

正法誹謗の者は在世の外道の末流

般泥洹はつたいおん經に云く「当来たうらいの世仮かりに袈裟けさを被きて我が法の中に於て出家学道し懶惰らいだ懈怠けたいにして此れ

等の方等契經ほうとうけいきやうを誹謗はいぶすること有あらん当まさに知るべし此等は皆是今日こんにちの諸もろもろの異道いどうの輩やからなり」等云云、

此經文を見ん者自身しんをはづべし今我等が出家して袈裟をかけ懶惰懈怠なるは是これは仏在世の六師外

道が弟子なりと仏記し給へり、法然がほつぜん一類大日が一類念仏宗禪宗と号して法華經に捨閑闍しやへいかく抛ほうの四字を副そへて制止を加て權教の弥陀称名計りを取立教外別伝と号して法華經を月をさす指只ただ文字をかぞふるなんと笑ふ者は六師が末流の仏教の中に出来しゅつせるなるべし、うれへなるかなや涅槃經に仏光明こうみょうを放て地の下一百三十六地獄を照し給に罪人一人もなかるべし法華經の寿量品にして皆成仏せる故なり但し一闍提人せんだいじんと申て謗法の者計り地獄守もりに留とどめられたりき彼等がうみひろげて今の世の日本國の一切衆生となれるなり

まず「般泥洹經」の文を引かれています。

「当來の世假りに……誹謗すること有らん」

「當來の世」とは、末法をさしております。末法において、かりに袈裟けさを着て、仏法の修行者のような姿をして、出家學道している者がいるであろう。そして、なまけ者で、最高の仏法を求めようともしず、方等契經ほうとうがいぎきょうを誹謗する者がいるであろうということです。

「方等契經」とは、大乘經のことです。文底から拝するならば、末法の法華經、すなわち南無妙法蓮華經になります。

「當に知るべし此等は皆是今日の諸の異道の輩なり」

末法において三大秘法の仏法を誹謗し、日蓮正宗を誹謗する者は、みな今日、すなわち釈尊の時代にさかのぼってみれば、ぜんぶ外道の輩だったのである。釈尊に対して敵対してきた輩が末法に生ま

ここは、禪宗の邪義について述べられています。禪宗では、釈尊の悟りが、經文に書かれたほかに迦葉かじょうに別伝されて、伝承されてきたとします。そして經文は、悟りの月を指さすものにすぎないから、そのような經文を根本とする教えにしたがっていても、なんの役にもたたないとしています。

「六師が末流の仏教の中に出来しゅつたせるなるべし」

それらの、正法を誹謗する邪宗の輩やふちは、ぜんぶ釈尊在世の時代の六師外道の弟子が末法に生まれて、仏教のなかに現れ、仏教を乱している姿なのである。

「うれへなるかなや涅槃經に仏光明こうみょうを放はなて地の下一百三十六地獄を照し給たまひに罪人一人もなかるべし法華經の寿量品にして皆成仏せる故なり」

これは、釈尊の仏法の広宣流布の時について、おおせられたところですが。

涅槃經とは、釈尊が死ぬときに、一日一夜にして説いた經典です。

涅槃經で、仏が地獄を照らしたときに罪人は一人もいなかった。それは、法華經の寿量品のときに、みな成仏したからであるとおっしゃっています。

「但し一闍提人せんたいじんと申もうて謗法の者計はかり地獄守もりに留とどめられたりき彼等がうみひろげて今の世の日本国の一切衆生となれるなり」

ただし、一闍提人、すなわち不信謗法の者だけは、寿量品のときにも成仏できなかった。その人々が生み広げたのが、いま末法の時代の日本国の一切衆生なのである。そういう謗法の人々がだんだんとふえてしまったのです。ですから、御本尊の力によって仏になる以外ないのです。

「今生に念仏者にて」というのは、まえにも述べたとおり、大聖人が幼年時代に出家なされて、数年間、念仏の寺である安房国、清澄寺の道善房のもとですごされたことをいわれているのです。

「未有一人得者」というのは、中国の念仏者である道綽が「安樂集」という書のなかで述べたことばで、法華経では、未だ一人も成仏した者がいないという意味です。

「千中無一」というのは、善導が「往生礼讃」のなかで述べた言葉で、法華経では千人のうち一人として成仏した者がいないということです。これらの言葉を、法然が「選択集」で法華経を誹謗するために引用して使っているのです。

せんじつめてみれば、今、われわれは御本尊を根幹として、これらの邪宗教を折伏していることになる。なぜなら、これまでもっとも仏に弓を引き、もっとも正しい仏法を誹謗し、ないがしろにしてきたのは、今の邪宗教だからです。釈尊の仏法、また大聖人の仏法を、ほんとうにふみにじってきたのです。

それを今、私たちは強折しているのですから、難があるのはあたりまえのことです。

「今誹法の酔さめて見れば酒に酔る者父母を打て悦しが酔さめて後歎しが如し歎けども甲斐なし此罪消がたし」

誹法の酔がさめて、正法を護持してから、過去の自分を振り返ってみると、ちょうど酒に酔って自分のことがわからなくなり、父母を打って悦んでいたものが、酔がさめて自分のしたことに気がついて、たいへんなことをしたと後悔し、嘆いているようなものである。しかし、どんなに嘆いても、父

母を打った罪は消えないのです。

「何に況や過去の謗法の心中にそみけんをや經文を見候へば烏の黒きも鷺の白きも先業のつよくそみけるなるべし外道は知らずして自然と云い」

ここも、まえのところも、因果の理法を示されているところです。いっさいの事象は、すべて原因結果の法則です。大聖人の仏法は最高の科学なのです。生命科学なのです。生命の因果を追究した偉大な哲理であります。

一般の自然科学は、物質界の原因結果の法則について、帰納法的に確立したものであって、生命については、なにも解明できえない。外道は因果の理法を知らないから、生命のさまざまな現象をみても自然という。それ以上追究しようとしないのです。

仏法はいっさいを映すことのできる鏡です。その鏡がないから、どこまでいっても悪循環が繰り返されるのです。不幸な世の中です。皆さんも鏡があれば、自分がわかってくるのです。ソクラテスも「汝自身を知れ」といいましたが、鏡がなければ、すなわち仏法の真髓を実践しなければ、汝自身は絶対にわかりません。

よく民主主義の基調は主体性の確立、自己の確立であるなどといいますが、それも、実際はできないのです。できたつもりであっても、それは錯覚です。末法の仏法の真髓である御本尊を信心する以外にはできません。

私たちは、それを実行しているのです。ひじょうにたいへんな道を通っているようですけれども、

一人ひとりの主体性を確立しつつ、末法万年尽未来際への恒久平和をめざす大事な進軍です。

「今の人は謗法を顕して扶けんとすれば我身に謗法なき由をあながちに陳答して法華經の門を閉よと法然が書けるをとかくあらかひなんどす」

今の人、すなわち大聖人御在世当時の人は、大聖人が、その一人ひとりの謗法の罪を明らかに示して、信心につかせて、幸せにしてあげようとする、自分にはそのような謗法はないといいはって信心しようとしなない。そして法然の捨閉閣拋の言葉などをもちだして反対しようとするのです。

これは現代でも、つねにあることです。信仰なんか必要ないとか、罰がでるなんて非科学的だなどといっている。しかし、そういう人間ほど、心のなかでは信仰したいと思っています。御本尊の力がわかっていなのです。

念仏者はさてをきぬ天台真言等の人人彼が方人をあながちにするなり、今年正月十六日十七日に佐渡の国の念仏者等数百人印性房と申すは念仏者の棟梁なり日蓮が許に來て云く法然上人は法華經を抛よとかかせ給には非ず一切衆生に念仏を申させ給いて候此の大功德に御往生疑なしと書付て候を山僧等の流されたる並に寺法師等・善哉善哉とほめ候をいかがこれを破し給と申しき鎌倉の念仏者よりもはるかにはかなく候ぞ無慚とも申す計りなし

「念仏者はさてをきぬ天台真言等の人人彼が方人をあながちにするなり」

念仏者はともかくとしても、法華經を理論的に体系づけた天台、伝教の流れをくむ天台宗の人々までが、念仏の味方となって法華經を誹謗しているのである。

この姿は、ちょうど、今の全日仏と新宗連、既成宗教と新興宗教とが仲間となって、日蓮正宗創価学会を誹謗するのと同じです。

「今年正月十六日十七日に佐渡の国の念仏者等数百人印性房と申すは念仏者の棟梁なり日蓮が許に來て云く」

この文永九年の一月十六日、十七日の両日にわたって、佐渡はもとより越後、越中、出羽、奥州、信濃の国々から、念仏者などが数百人集まってきました。そして印性房を中心として、塚原の三昧堂の外へ押し寄せて、大聖人に法論をいどんできたのです。

「法然上人は法華經を抛よとかかせ給には非ず一切衆生に念仏を申させ給いて候此の大功德に御往生疑なしと書付て候を山僧等の流されたる並に寺法師等・善哉善哉とほめ候をいかがこれを破し給と申しき」

これは、印性房を中心とする念仏者たちの言葉です。

法然は、法華經を抛よとはいっていない。「選択集」では、ただ念仏を唱える功德を説いているだけである。山僧とは比叡山の僧、寺法師とは園城寺の僧をいいます。この島へ流されてきた天台宗の僧たちもそれを讀んでいるが、これをどう破折されるか、などと確信もないような質問をして

きたのです。

「鎌倉の念仏者よりもはるかにはかなく候ぞ無慚むざんとも申す計はかりなし」

日蓮大聖人は、たったお一人です。しかも流罪の身です。そこへ数百人もの人数が攻めてきました。が、みんなかるがると打ち負かされてしまった。ある僧などは、その場で数珠じゆすを切って大聖人に帰依したりした。大聖人は、正しく強かったのです。どうか皆さんも、大聖人のように力強く戦っていただくさい。

鎌倉の念仏者等も、大聖人に破折されつくしてしまったのですが、その人々よりも、この佐渡の塚原へ押し寄せてきた念仏、天台、禪宗等の人々のほうが、なお愚かな姿であったということです。

八難がすべて符合

いよいよ日蓮が先生せんしやうこんじやう今生こんじやう先日せんじつの謗法おそろし新かりける者の弟子と成なりけんかかる国に生れけんいかなるべしとも覚えきやういず、般泥洹はつないおん經に云く「善男子過去に無量の諸罪・種種あくごうの悪業を作らんには是の諸の罪報・或は輕易きやういせられ或は形状ぎやうじやうしゆりるえ醜陋衣服足らず飲食おんじきそ羶そ財を求めて利あらず貧賤の家及び邪見の家に生れ或は王難に遇あう」等云云、又云く「及び余の種種の人間の苦報現世に軽く受くるは斯これ護法の功德力に由よる故なり」等云云、此經文は日蓮が身なくば殆ほとんど仏の妄もう

語となりぬべし、一には或被輕易二には或形状醜陋三には衣服不足四には飲食麤疎五には求財不利六には生貧賤家七には及邪見家八には或遭王難等云云、此八句は只日蓮一人が身に感ぜり。

「いよいよ日蓮が先生今生先日せんしやうこんじやうの謗法おそろし」

先生とは前世、今生とは今世、先日とは大聖人の修行時代のことです。いよいよ大聖人の前世から現在にいたるまでの謗法は恐ろしい。

「かかりける者の弟子と成なりけんかかる国に生れけんいかなるべしとも覚えず」

このような重罪のある者の弟子となり、また、このような謗法の国に生まれているのだから、このさき、どのようなようになっていくかもまったくわからない。

「般泥洹經はんないおんに云く『善男子過去に無量の諸罪・種種の惡業あくごうを作らんに是の諸の罪報・或は輕易きやういせられ或は形状醜陋衣服足らず飲食麤疎財を求めて利あらず貧賤の家及び邪見の家に生れ或は王難に遇あう』等云云」

ここは般泥洹經に説かれる八種の大難です。過去におかした罪によって受ける報むくいをあげているのです。過去の罪の報いによって人からバカにされたり、容姿が醜みにくかったり、衣食住に事欠いて、經濟面でも恵まれず、貧乏の家、邪宗の家に生まれる等の難を受けるのです。

「又云く『及び余の種種の人間の苦報現世に輕く受くるは斯これ護法の功德力に由る故なり』」

いまあげた八難やその他の苦しみを、正法を護持したことによって軽く受けているという経文です。「護法の功德力に由る故なり」のところは、信心をしている場合をいうのです。

この世は娑婆世界——勘忍の世界ですから、また日本全体が総罰を受けているのですから、だれびとにも苦難はある。しかし、信心している者は、その種々の苦難を軽く受けているのです。法を護っているという功德の力によって、どんなに苦しいことが眼前にでたとしても、それが、本来のものよりはるかに軽いものなのだとこの経文であります。それを確信しなければなりません。

「此経文は日蓮が身なくば殆ど仏の妄語となりぬべし」

王難に遭うなどということは、釈尊の時代にも多少はありました。この八難ということがぜんぶあてはまっている仏さまは、日蓮大聖人だけです。ということは、末法の御本仏としてのお姿を予言してあるこの般泥洹經に、ピッタリ符合しているのは、日蓮大聖人だけであるということです。

したがって、もし大聖人の出現がなかったら、このような実相がなかったならば、仏の金言は虚妄となってしまう、金言とはいえなくなってしまうのです。

つぎに、この八難の一つひとつをあげていらっしゃいます。

「一には或被輕易」

日蓮大聖人は、国じゅうの人々からバカにされ、悪口罵詈された。

「二には或形状醜陋」

大聖人は、形状醜陋ではありません。ほんとうに立派なお姿であったと思いますが、ただこれは貴

族階級のような高い身分ではない、また姿、形が貧しかったという意味だったのでしょう。どんな貴族よりも、大聖人のほうが、ずっとご立派であったことはまちがいありません。

「三には衣服不足」

着るものがなかったのです。

「四には飲食麤疎」

大聖人は、佐渡で、食べる物がなく、雪を食しあがっておられたこともありました。当時は佐渡の国へ流されるということは、死刑に匹敵したのです。

「五には求財不利」

財を求めるに利あらず、と読みます。だが大聖人はお金などは欲しくないので。金もうけのための邪宗の僧とはぜんぜん違います。

「六には生貧賤家」

大聖人の場合は、貧しい漁師の家に生まれました。

「七には及邪見家八には或遭王難」

邪見の家に生まれ、また王難にあう。二度の流罪のみならず、死罪にもおよんだのです。

この八難は、日常生活において、皆さんが、自分自身にあてはめて考えていくべきです。なぜならば、ここは、大聖人が、示同凡夫のお姿で、身口意の三業で經文をお読みになって、われわれの信心のあり方、仏法の修行の決意をお示しになっているところだからです。

ですから、われわれがみな、こういう姿になっていることは、過去をたどってみるならば、謗法の罪なのです。地によって倒れた者は、地によって立つ。謗法によってこういう結果になったのですから、正しい仏法によって信心修行に励めば、ぜんぶ改革できる、そして人間革命ができるということなのです。

「此八句は只^{ただ}日蓮一人が身に感ぜり」

この八難は、ただ大聖人お一人の身にあてはまることである。かさねて、大聖人が末法の御本仏であることを述べられています。

厳しき因果の理法

高山に登る者は必ず下^{くだ}り我^{われ}人を軽^{かろ}しめば還^{かえ}て我身^{わがみ}人に輕易^{きようい}せられん形状^{ぎやうじやう}端嚴^{たんごん}をそしれば醜陋^{しゆうる}の報^えいを得^え人の衣服^{えふく}飲食^{おんじき}をうばへば必ず餓鬼^{がき}となる持戒尊貴^{ぢけいそんき}を笑へば貧賤^{ひんせん}の家に生^{しょう}ず正法の家を
そしれば邪見の家に生ず善戒を笑へば国土の民となり王難^{わうなん}に遇^あふ是は常の因果の定^{さだま}れる法なり

ここもまた、因果の理法を述べていらっしゃるところです。

「高山に登る者は必ず下り」

山に登った人は、かならず下りなければならぬ。もし、そのまま帰ってこなかったら遭難です。

「我人^{われひと}を輕^{かろ}しめば還^{かえつ}て我身^{わがみ}人に輕易^{きようい}せられん」

一般的にもよくいわれることですが、人をバカにすれば、因果の理法で、やがては人からバカにされるようになるのです。まして仏法をたもち、広宣流布のために戦っている日蓮正宗創価学会を笑い、小バカにしている評論家などがいますが、未来にどれほどの報いがあるかしれません。かならず証拠がでるのです。この確信でいきましよう。

「形状端嚴^{ぎやうじやうたんこん}をそしれば醜陋^{しゆうろう}の報^えいを得^え」

「形状端嚴」とは、顔かたちが端正でおごそかなことをいい、世間的には立派な人、人格者などをさします。また日蓮大聖人、即御本尊にも通じます。そしる人は「醜陋の報い」、いやしく、醜くなるという報いをうけるのです。

ですから、女の人は、あんまりお友だちにヤキモチをやかないことが大事ですね。

「人の衣服飲食^{えぶくおんじき}をうばへば必ず餓鬼^{がき}となる」

人のものを盗めば、かならず餓鬼となる。食べられなくなって苦しむ。貧しい最低の生活におちるということです。

「持戒尊貴を笑へば貧賤^{ひんせん}の家に生^{しょう}ず」

すなわち、正法の御僧侶を笑えば、貧賤の家に生まれる。また総じては、御本尊を持った者を笑っても、貧賤の家に生まれる。ですから、われわれを笑う者がいたら、ああ、あの人はかわいそうに、

来世は貧乏な家に生まれる、と思えばよいのです。

「正法の家をそしれば邪見の家に生ず」

正法をたもっている家の悪口をいえば、邪見の家、すなわち謗法の家に生まれて、ふしあわせになるのです。

「善戒を笑へば国土の民となり王難に遇ふ」

「善戒」とは、御僧侶です。総じては日蓮正宗創価学会です。ですから、信心しているわれわれを笑っても、なにかの罪にとわれたり、牢へはいったりするということです。また広く約せば、税金で苦しむとか、権力でさまざまに圧迫されていかなばならない生活になるともいえると思います。

「是は常の因果の定れる法なり」

これは世間一般の因果の定まった法なのです。

護法の功德力による

日蓮は此因果にはあらず法華經の行者を過去に輕易せし故に法華經は月と月とを並べ星と星とをつらね華山に華山をかさね玉と玉とをつらねたるが如くなる御經を或は上げ或は下て嘲弄せし故に此八種の大難に値るなり、此八種は尽未来際が間一つつこそ現ずべかりしを日蓮つよく

法華經の敵を責るによて一時に聚り起せるなり譬は民の郷郡などにあるにはいかなる利錢を地頭等におほせたれどもいたくせめず年年にのべゆく其所を出る時に競起が如し斯れ護法の功德力に由る故なり等は是なり

「日蓮は此因果にはあらず法華經の行者を過去に輕易せし故に」

大聖人が難にあわれるのは、この世間一般の罪業によるのではない。ひとえに、過去に法華經の行者をバカにし、御本尊に対して謗法を犯したゆえである、と。もちろんこれは、さきほども述べたように、大聖人が示同凡夫のお立場で述べられているのです。末法の一般の民衆の立場でおおせになっているのです。

したがって、われわれの不幸な生活の根本原因も、やはり御本尊を誹謗したことにあります。釈尊の法華經に対する謗法、それから釈尊自身を誹謗した等のいろいろの謗法の姿がありますが、日蓮大聖人、また南無妙法蓮華經を誹謗するという罪は、いちばん重いのです。それを頭にいれておきなさい。

「法華經は月と月とを並べ星と星とをつらね華山に華山をかさね玉と玉とをつらねたるが如くなる御經を或は上げ或は下て嘲弄せし故に此八種の大難に値るなり」

法華經が最高唯一の經文であるさまを、月、星、華山、玉をかさねることによってあらわしています。その最高唯一の法華經、すなわち御本尊を、あるいは、立派な教えであるがむずかしくてだれも

それを実践できないといったり、あるいは、第二、第三の教えであると下したりした罪によって、この八種の大難に遭っているのである。

「此八種は尽未来際が間一つつこそ現ずべかりしを日蓮つよく法華經の敵を責るによて一時に聚り起せるなり」

この八種の大難は、尽未来際の長いあいだにわたって、一つずつ現れてくるべきものであったのを、日蓮大聖人は強く法華經の敵を責めることによって、一時に集まり起こされたのです。

これは一生成仏です。南無妙法蓮華經は、過去の謗法の罪をみんな消してしまふ。それを一生成仏というのです。

今世がいちばん大事なのです。今世の実態が来世の実態となるわけです。ですから今世が大事なのです。今世をいいかげんにしておいて、来世にがんばればいいといっても、そうはいきません。やはり今世にきちんと罪業を消滅しておかなくてははいけません。大聖人の仏法はどこまでも現実主義なのです。

「譬^{たとえ}ば民の郷郡などにあるにはいかなる利錢を地頭等におほせたれどもいたくせめず年年にのべゆく其所を出る時に競起^{きようおこる}が如し」

たとえば、民が地頭の領地のなかにいるあいだは、税金などを滞納^{たいのう}してもひどくは責められないため、年々に延ばすこともできる。しかしそこを出て、他の土地へ移ろうとするときには、一時にぜんぶを払わなければならなくなってしまうようなものである。

「斯れ護法の功德力に由る故なり等は是なり」

日蓮大聖人が、このような大難を受けて成仏なさったということは、護法の功德力によるのです。

不輕菩薩の實踐を

法華經には「諸の無智の人有り惡口罵詈等し刀杖瓦石を加うる乃至國王・大臣・婆羅門・居士に向つて乃至数数擯出せられん」等云云、獄卒が罪人を責ずば地獄を出る者かたかりなん当世の王臣なくば日蓮が過去謗法の重罪消し難し日蓮は過去の不輕の如く当世の人人は彼の輕毀の四衆の如し人は替れども因は是一なり、父母を殺せる人異なれども同じ無間地獄におついかねれば不輕の因を行じて日蓮一人釈迦仏とならざるべき又彼諸人は跋陀婆羅等と云はれざらんや但千劫阿鼻地獄にて責られん事こそ不便にはおぼゆれ是をいかんとすべき、彼輕毀の衆は始は謗せしかども後には信伏随從せりき罪多分は滅して少分有しが父母千人殺したる程の大苦をうく当世の諸人は翻す心なし譬喩品の如く無數劫をや經んずらん三五の塵点をやおくらんずらん

「法華經には『諸の無智の人有り惡口罵詈等し刀杖瓦石を加うる乃至國王・大臣・婆羅門・居士に向つて乃至数数擯出せられん』等云云」

法華經勸持品第十三の文です。三類の強敵について明かされているところです。

「諸の無智の人有り惡口罵詈等し刀杖瓦石を加うる」が俗衆増上慢をあらわし、「国王・大臣・婆羅門・居士に向つて」、そして「数数擯出せられん」が僭聖増上慢です。道門増上慢については、ここでは略されています。

一つひとつの經文がぜんぶ、日蓮大聖人のお振る舞いにあたっているのです。

「獄卒が罪人を責めれば地獄を出る者かたかりなん当世の王臣なくば日蓮が過去謗法の重罪消し難し」獄卒が罪人を責めなかったならば、いったん地獄へ墮ちた者は、その罪を消して地獄を出ることができない。それと同じように、大聖人御在世當時も、大聖人を迫害した北条幕府がなかったならば、大聖人の過去の重罪も消すことができなかったであろう、といわれているのです。

「日蓮は過去の不輕の如く当世の人人は彼の輕毀の四衆の如し」

日蓮大聖人は、過去に種々の迫害をうけて仏になった不輕菩薩のようなものであり、大聖人を迫害する人々は、不輕菩薩をバカにした大衆のようなものである。

「人は替れども因は是一なり」

大聖人と不輕菩薩、大聖人を迫害した人々と不輕菩薩を迫害した人々というふうには、人はかわつても、同じ法華經を行ずるといふ因、また法華經の行者を誹謗するといふ因は同じである。

「父母を殺せる人異なれども同じ無間地獄におついかなれば不輕の因を行じて日蓮一人釈迦仏とならざるべき」

父母を殺す人は異なるけれども、みな同じく無間地獄に墮ちてしまふ。それと同じ道理で、不輕菩薩は二十四文字の法華經を弘めて、迫害を受け、仏になっている。そして日蓮大聖人も、七文字の末法の法華經を弘めて、このような大難にあつていらつしやる。どうして大聖人お一人が仏にならないことがあるであらうか、との大確信を述べられているのです。

「又彼諸人は跋陀婆羅等と云はれざらんや但千劫阿鼻地獄にて責られん事こそ不便にはおぼゆれ是をいかんとすべき」

「跋陀婆羅」というのは、不輕菩薩を輕毀して、地獄に墮ちたが、再び不輕に会つて救われ、法華經の会座にも出席した大衆のなかの代表者です。大聖人を迫害する人々は、不輕輕毀の跋陀婆羅と同じように、のちには妙法に巡りあつて救われるであらう。ただ千劫も阿鼻地獄で苦しまなければならぬことが、かわいそうに思われる。

「彼輕毀の衆は始は謗ぜしかども後には信伏随從せりき罪多分は滅して少分有しが父母千人殺したる程の大苦をうく当世の諸人は翻す心なし譬喩品の如く無數劫をや経んずらん三五の塵点をやおくらずらん」

不輕をそしつた人々は、たしかに初めはひどい謗法をおかしたけれども、最後には不輕に信伏随從した。そのことによって、謗法の罪は大部分消えて、わずかしが残っていなかった。だが、その少分残っている罪によつても、父母千人を殺したほどの大苦をうけたのである。

ところが大聖人を迫害した人々は、まったく反省する気持ちもなく、ますます謗法の心が強盛であ

る。最後まで信伏随従しないのだから、どれほどの罪があるだろうか。

法華經譬喻品第三に説かれてゐるように、無数劫のあいだ、阿鼻地獄あびじごくにあって苦しまねばならないであらう。もしくは三千塵点劫、五百塵点劫の長きにわたるであらう、とおおせです。

これはさてをきぬ日蓮を信ずるやうなりし者どもが日蓮が新かくなれば疑ををこして法華經をすつるのみならずかへりて日蓮を教訓して我賢かしこしと思はん僻人ひやくにん等が念仏者よりも久く阿鼻地獄あびにあらん事不便ふびんとも申す計りばかなし、修羅しゆらが仏は十八界我は十九界と云ひ外道が云く仏は一究竟道くきやうどう我は九十五究竟道と云いしが如く日蓮御房ごぼうは師匠にておはせども余あまに剛こはし我等はやはらかに法華經ひるを弘ひろむべしと云んは螢火ほたるびが日月をわらひ蟻塚ありづかが華山かさんを下し井江せいこうが河海かかいをあなづり烏鵲かきさぎが鸞鳳らんほうをわらふなるべしわらふなるべし。

南無妙法蓮華經

文永九年太歲三月二十日
壬申

日蓮弟子檀那等御中

日蓮花押

「これはさてをきぬ日蓮を信ずるやうなりし者どもが日蓮がなくなれば疑ををこして法華經をすつるのみならずかへりて日蓮を教訓して我賢しと思はん僻人等が念仏者よりも久く阿鼻地獄にあらん事不便とも申す計りなし」

ここの大事なところです。皆さんは将来、立派になることはまちがいないのです。日本的、いな世界的な人物として活躍する人もあるでしょう。そのときに、御本尊を忘れたり、信心を忘れれば、この教訓と同じになってしまいます。

「これはさてをきぬ」

謗法の者は別として、こんどは日蓮門下の弟子等に戒めていうということです。

日蓮大聖人がこのような難にあったのをみて、いままで信心していた者が疑いを起こして退転し、それどころか大聖人を批判さえしている者がいるが、その人々は、信心しない人よりもっと長いあいだ地獄へ墮ちるのだ、かわいそうだ、ということです。もっとも罪が深いのです。謗法の人より深いのです。

「修羅が仏は十八界我は十九界と云ひ外道が云く仏は一究竟道我は九十五究竟道と云いしが如く日蓮御房は師匠にておはせども余にこはし我等はやはらかに法華經を弘むべしと云んは螢火が日月をわらひ蟻塚が華山を下し井江が河海をあなづり烏鵲が鸞鳳をわらふなるべしわらふなるべし」

増上慢の修羅は、仏の悟りは六根、六境、六識の十八界であるが、自分の悟りはそれより一界多い十九界であるといい、外道は、仏の最高の悟りは一仏乗という一つのものしかないが、外道には九十

五種の悟りがあるといっている。そして、その悟りの数が多いから、自分たちのほうがすぐれていると慢じているのです。

同じように、退転していった者たちが、大聖人は師匠ではあるが、折伏などをあまりにも強くやりすぎるのではないか、われわれはやわらかに法華経を弘めていこうといっている。それは、螢の小さな光が明るい太陽や月を笑い、蟻塚が中国のもっとも大きな山の一つの華山を自分より低いといい、井戸や小川が大河や海をあなどり、烏鵲が鳥の王である鸞鳥や鳳凰を笑うようなものである、と大聖人はおおせです。

われわれはどんなことをいわれても、悪口をいう人間はぜんぶ螢火である、われわれは日月の光である、との大確信でいきましよう。

佐渡の国は紙候はぬ上面面に申せば煩あり一人ももるれば恨ありぬべし此文を心ざしあらん人は寄合て御覧じ料簡候て心なぐさませ給へ、世間にまさる歎きだにも出来すれば劣る歎きは物ならず当時の軍に死する人人実不実は置く幾か悲しかるらん、いざはの入道さかべの入道いかになりぬらんかはのべ山城得行寺殿等の事いかにと書付て給べし、外典書の貞観政要すべて外典の物語八宗の相伝等此等がなくしては消息もかかれ候はぬにかまへてかまへて給候べし。

「佐渡の国は紙候はぬ上面面に申せば煩あり一人ももるれば恨ありぬべし」

大聖人流罪の佐渡の地には、手紙をおしたためになる紙さえもないのです。また一人ひとりに便りをするのは煩雑ですし、一人でもお手紙をいただかない人があったら、その人は恨みに思うでしよう。ですから日蓮大聖人は、このお手紙を弟子檀那全員に与えられ、皆で見るように述べられているのです。

「心ざしあらん人人は寄合て御覧じ料簡候て心なぐさませ給へ」

大聖人をほんとうに信じ、師匠と思っている人は、寄りあって、みんなでこのお手紙を拝読しあっていきなさい。そして信心の糧としていきなさい、といわれているのです。

ちやうど皆さんが寄りあって、「佐渡御書」をこのように読みあっているのと同じ姿です。

「世間にまさる歎きだにも出来すれば劣る歎きは物ならず」

世間にあっても、大きな難が出来たときは、小さな難などは、なんでもなくなってしまおう。

ここが大事です。自分の小さなことで悩んでいる人がいますが、広宣流布という最高の目的観に立った場合は、自分一個の小さい問題などはいっぺんに吹き飛んでしまうのです。偉大な目的観のない人は、小さい問題を拡大して苦しんでいるのです。信心が大切なゆえんは、ここにあるのです。

「当時の軍に死する人人実不実は置く幾か悲しかるらん」

この御書の初めに述べられている北条幕府の自界叛逆難の戦で死んだといわれている人々は、そのうわさの真偽のほどはわからないけれども、どれほどか悲しいことであろうか。

「いざはの入道いざは 入部さかべの入道いかななりぬらんかはのべ山城得行寺殿等の事いかにと書付て給べし」
この人々は皆、大聖人の弟子です。その人々のことを、このように心配されているのです。こんどの戦いで皆どうなったか、消息を知らせなさい、といわれています。

「外典書の貞観政要じょうがんせいようすべて外典の物語八宗の相伝等此等これらがなくしては消息もかかれ候はぬにかまへてかまへて給候たひべし」

「貞観政要」とは、唐の太宗皇帝が群臣たちと政治について語ったものを編纂へんさんした書物です。その貞観政要や、その他の外道の物語、また俱舎くしゃ、成実じょうじつ、律りつ、法相ほうそう、三論さんろん、華嚴けごん、天台、真言等の大聖人の時代にさかんであった八宗の相伝書などを送るように指示されています。それらも参考にされて、お手紙を書かれていたのです。

(昭和四十一年四月、五月 高等部講義)

「如說修行抄」講義

文永十年五月 五十二歳御作
佐渡一ノ谷に於て

(御書全集 五〇一ノ一、五〇五ノ一)
編年体御書五五四ノ一、五五八ノ一

法華經の行者にはかならず難がある

この「如説修行抄」は、日寛上人の文段にもとづいて拝読するのが、もっとも正しい読み方です。

日寛上人は、日蓮正宗の第二十六世の御法主上人です。日寛上人は、「開目抄」とか、「観心本尊抄」とか、または「立正安国論」とか、重要な御抄について、それぞれ文段を著され、こう拝読すべきだと、ことこまかに御教示くださっております。

同じく「如説修行抄」についても、厳しく、そしてまた正しく読むことができるようにとの意味で、文段を著されております。

ただし、その文段をとおしての読み方は、ここでは略しておきます。あくまでも、この御抄を中心にして、信心のうえから読んでいくいき方にしておきます。

将来は、日寛上人の文段を根本とし、基本として拝読していくべきであることを、頭に入れておい

てもらいたいと思います。

夫れ以んみれば末法流布の時・生を此の土に受け此の経を信ぜん人は如来の在世より猶多怨嫉の難甚はなはだしかるべしと見えて候なり、其の故は在世は能化のうけの主は仏なり弟子又大菩薩・阿羅漢あらかんなり、人天・四衆・八部・人非人等なりといへども調機調養じようきじようようして法華経を聞かしめ給ふ猶怨嫉多し

「如説修行抄」——説の如く、修行する抄、ということです。

「説の如く」とは、一義は、釈尊の説の如くということですが、根本は、末法の御本仏である日蓮大聖人の説の如くということとあります。「修行する抄」とは、実践する抄、との意味です。

「夫れ以んみれば末法流布の時・生を此の土に受け此の経を信ぜん人は如来の在世より猶多怨嫉の難甚しかるべしと見えて候なり」

ここには、宗教の五箇が明らかに説かれています。宗教の五箇とは、教・機・時・国・教法流布の先後せんごをいいます。教え、機根きこん、時、国、そして、教法が流布していく姿が、宗教の五箇です。

「夫れ以んみれば」——つらつら考えてみるならば、「末法流布の時」——末法とは、釈尊在世を中心にして、滅後千年が正法、つぎの千年が像法、それから釈尊滅後二千年以降を末法というのです。

いまは末法の時です。末法とは、末法万年尽未来際です。これから永遠に末法が続くのです。その先驅が今です。

宗教の五箇にあてはめれば「末法」は、「時」をあらわしています。「流布の時」というのは「教法流布の先後」にあたります。

「生を此の土に受け」——「此の土」が「国」になります。日本国のことです。

このように、大聖人の仏法の説き方は、ひじょうに論理的です。説いている論理が完璧かんぺきなのです。

「此の経を信ぜん」の「此の経」が「教」になり、「信ぜん」が「機根」になります。

わずかこれだけの御文のなかに、宗教の五箇をぜんぶ明かしているのです。大聖人の御書のどこを拝読しましても、宗教の五箇とか、三重秘伝とか、五重の相對とか、四重興廢とかが、このように組み立てられているのです。それは、長く教学を学んでいきますと、だんだんわかってきます。

しかしながら、相伝のない日蓮宗の輩やからが御書を拝読すると、それが読めない。そこに大きい誤謬ごびやうが生じるのです。

相伝ある日蓮正宗のみが、完璧な大聖人の仏法を、正しく、深く拝読することができなのです。

「夫れ以んみれば……信ぜん人は」——末法の時代に流布をしなくてはならない時に、生をこの日本国にうけ、そしてこの経、すなわち三大秘法の南無妙法蓮華経を信ぜん人々は、「如来の在世より」

——釈尊在世より、「猶多怨嫉ゆたおんしつの難はなはだ甚しかるべしと見えて候」と、そのように法華経のなかに予言されている。このことは法華経の法師品、ならびに勸持品等々に説かれております。

「猶多怨嫉」——「猶怨嫉多し」と読みます。釈尊の時代よりも、末法において、三大秘法の南無妙法蓮華經を流布する人、それを信ずる人は、なお怨嫉が多い、やきもちを焼かれる、非難される。しかし、いくらやきもちを焼かれても、批判されても、非難されても、經文どおりだから、なにも恐れる必要はないのです。

怨嫉されることによって、自分は罪障消滅になります。相手も罰をうけて、結局、最後は罪を消します。信ずる人も、謗ずる人もともに、せんずるところは救われていくのです。これが仏法の法則です。

「其の故は在世は能化の主は仏なり弟子又大菩薩・阿羅漢なり」

「其の故は」——それでは、なぜそのような難を受けるのだろうか。ここでは、釈尊在世のこと、仏法発祥の時のことを述べられております。「在世」すなわち釈尊の時は、「能化の主は」——一切衆生を指導し、救済してゆくあるじは、「仏なり」——釈尊であり、三十二相を具備した立派な仏さまであつた。本をただせば、釈尊は王宮に生まれた貴族です。

「弟子又大菩薩・阿羅漢なり」——また釈尊の弟子は、大菩薩です。現代でいえば、東大の教授のような立派な人たちばかりです。釈尊が出現した当時は、大菩薩といえば、仏法を根底にして、その当時のインド全体を指導しきつた指導者をいったのです。

いまは「菩薩」などというと、なんらわれわれの生活に密着しない別世界のもののように思われていますが、そこにも仏法の乱れ、また一般に仏教が現実生活に対して価値をなくしてしまっている姿

があらわれています。しかし、釈尊在世はそうではなかった。

いまわれわれは地涌の菩薩の眷属けんぞくです。現実の社会に、国家に、民族に、世界に、もったも貢献こうけんし、それを指導していく力ある指導者でなくてはいけないのです。

それはさておいて、つぎに「阿羅漢」というのは、やはり、悟りをえた大学者ともいえます。か。仏法上では、小乗教の悟りをえた人々をいいます。やはり大菩薩に等しい、優秀な人たちです。

「人天・四衆・八部・人非人等なりといへども調機調養じょうきじょうようして法華経を聞かしめ給ふ猶怨嫉多し」

人界の人々、天界の人々、そしてまた「四衆」——一般の僧侶、一般の尼僧、そして一般の男の人、一般の女の人、これを四衆といっています。

それから八部というのは、これは、天、竜、夜叉やしや、乾闥婆けんたつば、阿修羅あしゅら、迦楼羅かろうら、緊那羅きんなら、摩睺羅迦等まごらかで、ちょっと言葉はむずかしいですが、どんな生命の持ち主であっても、ということなのです。

それから「人非人」——これは、人生という観点からみた場合には、人間以下のものであってもとということ。地獄界、修羅界、そういうところで生活をしているもののことであります。

「調機調養して法華経を聞かしめ給ふ」というのは、釈尊が長いあいだかかって、小乗教から、権大乘教、実大乘教と、説いてきたことをいうのです。だんだん仏法を認識させ、だんだん釈尊を信奉させるようにして、最後に法華経を聞かせたのです。

また、この調機調養というのは、「四十余年未顕真実」でいう四十余年間の調機調養という意味だけではありません。過去世の過去世、そのまた過去世を説かれているのです。何百年、何千年、何万

年のあいだ、釈尊が、何回も生まれては人々を教え、だんだんと衆生の機根がととのい、頭がよくなり、法華経がわかるようになってきて、信心するようにうまくリードしてきたという意味なのです。それであっても、なお、まだ怨嫉があったというのです。仏にさせまいという魔の働きがでるものだ、批判があるものだ、ということです。この釈尊の時代の衆生のことを、本已有善ほんいりぜんの衆生ということです。すでに過去にずっと化導され、調機調養じょうきじょうようされ、「本已もとすでに善が有る」衆生をいうのです。しかしながら、末法の衆生は本未有善ほんみりぜんというのです。なにも仏道修行を積んできていない。ですから、御本尊のいわれを五年や十年聞いただけでは、末法の人々が信心するわけではないのです。それを説明もしないで、はじめから信心しなければ罰がでるぞなどというのですから、怨嫉も大きいわけです。

このように釈尊は、やわらかく長く、そしてまた包容しながら、説明しながら、何百年、何千年、何万年と説いたが、まだ怨嫉が多かったというのです。

末法は三毒強盛の人が集う

何に況んや末法今の時は教機時刻当来とうらいすといへども其の師を尋ねれば凡師たふしなり、弟子又闍諍とうじよう堅固・白法隱没・三毒強盛の悪人等なり、故に善師をば遠離し悪師には親近す、其の上真実の

法華經の如説修行の行者の師弟檀那とならんには三類の敵人決定せり、されば此の經を聴聞し始めん日より思い定むべし況滅度後の大難の三類甚しかるべしと、然るに我が弟子等の中にも兼て聴聞せしかども大小の難來る時は今始めて驚き肝をけして信心を破りぬ、兼て申さざりけるか經文を先として猶多怨嫉況滅度後・況滅度後と朝夕教へし事は是なり・予が或は所を・をわれ或は疵を蒙り・或は兩度の御勘氣を蒙りて遠國に流罪せらるるを見聞くとも今始めて驚くべきにあらざる物をや

「何に況んや末法今の時は教機時刻當來すといへども其の師を尋ねれば凡師なり」

ここからは、末法の大聖人の時代のことを述べられています。

いかにいわんや末法の今の時は、「教機時刻當來す」——「教」は三大秘法の御本尊、「機」は、南無妙法蓮華經を信じなければならぬ衆生の機根です。「時刻當來す」とは、釈尊の仏法は、すでに二千年で終わつた。いまは大聖人の仏法のひろまるべき時です。

「其の師を尋ねれば凡師なり」——「其の師」とは人本尊。これは日蓮大聖人のことであります。

「凡師なり」とは、日蓮大聖人は、漁師出身の凡夫僧のお姿です。ですからだれも信用しません。なんだ、あんな僧侶が、といつてきかないのです。釈尊の場合には、ずっときらびやかに振る舞つてきたから尊敬されたのです。

「弟子又闘諍堅固・白法隱没・三毒強盛の惡人等なり」

これは、大集經等にでている文です。末法の衆生は、「闍諍堅固」——教義の面で、闍諍言訟ごんしやうともいいますが、みな喧嘩けんかばかりしている。いま、日本の国のなかでも、争ってばかりいる。また世界中が、広い意味でこの予言どおりではありませんか。

「白法隱没」——釈尊の仏法が、まったく効力を失う、ということなのです。新しい仏法でなくてはならない、という意味です。

「三毒強盛」——末法は本末有善ほんみゆうぜんの衆生ですから、「貪・瞋・癡」の三毒強盛の悪人ばかりです。

「貪」は食欲です。人を殺しても、押しのけても、食っていこう、生きていこうとする。「瞋」は、すぐに怒ることです。おっとりして、福運豊かに、悠々と人生を生きていくことができないのです。電車に乗っても、ちょっとしたことですぐ腹をたてる、怒りだす。「癡」はおろか。自分では、ひじょうに頭がよいつもりでいて、あすの生命いのちすらもわからない。人生の根本のいき方を知らない。おろかなのです。そのように、末法の衆生はみんな悪人なのです。

「故に善師をば遠離おんりし悪師には親近しんこんす」と述べられているのです。

「善師」とは日蓮大聖人、「悪師」とは邪宗の僧侶などのことです。

「其の上眞実の法華經の如説修行の行者の師弟檀那とならんには三類の敵人決定けつじやうせり」

「眞実の法華經」とは法本尊です。三大秘法の御本尊を根本として、本門の題目を唱えきっていくという如説修行の行者の「師弟檀那とならんには」——現代というならば、日蓮正宗創価学会員として、広宣流布という使命に向かって、題目をあげながら進んでいく人は、「三類の敵人決定せり」——

かならず難があるのだ。批判をこうむるのだ。そんなことで驚いてはいけないとおおせなのです。

「されば此の經を聴聞し始めん日より思い定むべし」

三大秘法の仏法を実践し始めん日より、決意をなささい。心に決めてかかりなささい。

「況滅度後の大難の三類甚しかるべしと」

釈尊の予言どおり「況滅度後の大難」——これは末法をさしている予言です。その大難がかならずあるということを、覚悟しておきなさい、とのおおせです。

この大難に、事実遭あわれたのは、日蓮大聖人です。師匠に難があれば、その門下の一分であるわれわれにもやはり難があるのは当然です。

「然るに我が弟子等の中にも兼かねて聴聞せしかども大小の難来きたる時は今始めて驚き肝きんをけして信心を破りぬ」

この「如説修行抄」は、日蓮大聖人が佐渡の国へ流されたときの御書です。まえまえから、この三大秘法の南無妙法蓮華經を弘める人には大難があるときいていた弟子檀那も、日蓮大聖人が佐渡へ流され、また自分たちにも大小の難がふりかかってくると、はじめてビックリして退転してしまった。それに対する戒めいましが、この御書なのです。

「兼て申さざりけるか」

まえもってよく教えておいたではないか、ということです。

「經文を先さきとして」——あくまでも經文を示して教えられたのです。われわれもまた、御書どおりに

進めばよいのです。

「猶多怨嫉おんしつぎやうめつとこ況滅度後・況滅度後と朝夕教へし事は是なり」

仏になるためには、末法においては、世の中が悪いのだから、難はかならずあるのだ。だが、難があったからといって、絶対に退転をしてはならないということは、朝夕教えておいたではないか。

「予よが或は所を・をわれ或は疵きずを蒙こうむり」

「所を・をわれ」とは、松葉ヶ谷まつはがやの法難であり、「疵を蒙り」とは、小松原の法難のとき東条景信の迫害をうけ、刀で眉間みけんにきずをうけたことをいいます。

「或は両度の御勘氣を蒙りて遠国おんごくに流罪せらるるを」

これは島流しです。「御勘氣を蒙り」とは幕府のとがめをうけたということです。島流しにも近流こんる、中流ちゅうる、遠流おんるとありますが、日蓮大聖人は、いちばん遠い所へ流された。死刑に匹敵ひつてきします。両度とは、二回ということです。弘長元年五月十二日の伊豆の伊東と、文永八年十月の佐渡の二回です。

「見聞くとも今始めて驚くべきにあらざる物をや」

大聖人が遠流されるのを見たり聞いたりしたとしても、今はじめて驚くべきことではないではないか。大聖人のこのお姿は、況滅度後の三類さんるいの強敵ごうてきがあるという釈尊の予言を、そのままの姿で示しているにすぎない、喜ばなさい、とおっしゃっているのです。

諸君もこの段だけは、よく肝きまに銘めいじておくべきです。どんな難があっても、信心だけは破ってはいけないということです。

スピードのある新幹線には、風は強く当たる。飛行機だって、強い風が当たります。風が当たるのがいやだったら、走らなければいい。だが、走らなければ目的地へ着きません。難があるということです、それと同じ道理なのです。

戦いのなかに真の安楽がある

問うて云く如説修行の行者は現世安穩なるべし何が故ぞ三類の強敵盛んならんや、答えて云く釈尊は法華經の御為に今度・九横の大難に値ひ給ふ、過去の不輕菩薩は法華經の故に杖木瓦石を蒙り・竺の道生は蘇山に流され法道三蔵は面に火印をあてられ師子尊者は頭をはねられ天台大師は南三・北七にあだまれ伝教大師は六宗にくまれ給へり、此等の仏菩薩・大聖等は法華經の行者として而も大難にあひ給へり、此れ等の人人を如説修行の人と云わずんばいづくにか如説修行の人を尋ねん、然るに今の世は鬭諍堅固・白法隱没なる上悪国惡王惡臣惡民のみ有りて正法を背きて邪法・邪師を崇重すれば国土に惡鬼乱れ入りて三災・七難盛に起れり

「問うて云く如説修行の行者は現世安穩なるべし何が故ぞ三類の強敵盛んならんや」

「如説修行の行者は現世安穩なるべし」ということは、じつは法華經に説かれているのです。「猶多

怨嫉況滅度後」と、三類の強敵の予言もまた、法華經にある。ひじょうに矛盾むじゆんがあるといえ、矛盾があります。一方では現世安穩と説き、他方では難があると説かれている。

ここは、法華經のなかには現世安穩と説かれている個所があるのに、なぜ、三類の強敵が盛んであるのか、という質問です。たしかに正しい質問です。

これは、一般論で申し上げますが、一つは、先覚者というものは、かならずその時代において大なり小なり難を受けるものです。たとえていうならば、吉田松陰もそうです。また、福沢論吉もそうです。毎日命をねらわれていた。ソクラテスにしても毒をあおって死んでおります。キリストもそうです。孔子もずいぶん迫害を受けています。

いわんや、仏さまです。三世を知るを聖人といいますが、仏さまは、外道の聖人とは本質的に違うのです。外道の聖人は、今世こんぜのことはわかるかもしれない。でも来世のことはなにもわからないのです。それでも難を受けている。仏さまは、三世常恒じょうこう、すなわち永遠の先まで見とおせるのですから、その時代の人々に仏の説く法がわかるはずもなく、したがってより大きな難があるのは当然といえましょう。

しかし、仏法には、あくまでも現世安穩と説かれている。難を受けても、かならず安穩になることもまちがいない。そこが外道の難とは違うのです。また仏法のために受ける難には、宿命転換という原理があるのです。

たとえば私たち個人にとってみれば、信心しきって、罪業を消滅し、自分自身の信心のうえの使

命、すなわち今世の使命を果たしていくなれば、それによってかならず現世安穩になるのです。

さらに日本全体にとつた場合には、折伏をしきって、そして広宣流布を実現していくならば、日本の国の現世安穩も疑いありません。広く開いて、世界も同じ方式になります。

ですから、たとえば日本の広宣流布はすぐには達成されなくとも、それをめざして励みゆくところに、個人の現世安穩、所願満足、すなわち一生成仏はまちがいないのです。われわれの前進には犠牲はありません。

しかし、個人だけ幸せになって、あと日本の国は、それからまた世界は、どうなってもよいというわけにはいかない。日本の、世界の平和を実現するまでは、どうしても戦わなくてはなりません。ある中国の革命指導者のいわく「大闘争のなかに、はじめて平和がある」と。まさに至言^{しげん}です。

広宣流布を達成して日本の国を救おうと、題目をあげて戦いきっていく、その人生もまた大闘争です。苦労もあるでしょう。しかし、そのなかにこそ、自分のほんとうの大満足がある、安穩があるのです。

あれほどの鎌倉時代の権力主義の渦中^{かちゅう}において、日蓮大聖人は、真っ向から四箇の格言をかざして、大闘争をなされ、法体の折伏をされた。けれども、全員が信心したとはいえません。日本全国の広宣流布、いわゆる化儀の折伏を、後世の課題として残されたのです。しかし結局、日蓮大聖人は、最後には身延の沢にお入りになられて、安穩の生活で御入滅になっ^ていらっしゃいます。これが証拠です。

「答えて云く釈尊は法華經の御為に今度・九横の大難に値ひ給ふ」

釈尊であっても、九つの大きい難に遭っている。難に遭ったからといって、それでは、現世安穩の仏の境地ではなかったかといえ、そんなことはありません。悠々たる仏の御境界でありました。

どんな人であっても、信心をしていない人は、その生活の実態、心境、境涯をみた場合には、みんな不幸です。砂上の樓閣なのです。

「過去の不輕菩薩は法華經の故に杖木瓦石を蒙り」

不輕菩薩は、二十四文字の法華經を弘めた人です。そしてやはり、法華經のために、杖で打たれたり、石を投げつけられたりしているのです。ここで、法華經というのは「生命の本源を説き明かした教え」と訳してよいと思います。法華經は、いつの時代にも、その時代の民衆救済の最高の哲理になるのです。そのもっとも究極的に完璧なものが、三大秘法の法華經、すなわち御本尊なのです。

たとえば飛行機といえ、空を飛ぶ。人を乗せていくという働きにおいては、飛行機ならば、みな同じです。けれども、ひとくちに飛行機といっても、戦前の飛行機と、今のジェット機とはおのずと異なる。速度も、性能も、收容人数においても、格段の相違があります。

同じように、法華經といっても、釈尊の法華經と、日蓮大聖人の法華經とは目的は同じようであっても、その内容や規模など、ぜんぜんちがいます。南無妙法蓮華經は、これ以上の完璧な法理はないという、最高の法華經なのです。

「竺の道生は蘇山に流され」

道生とは、中国東晉とうしんの時代の人です。その道生は正法を弘通したために、大衆にあだまれて呉の国の蘇山に流された。

ここでは、正法を流布して難に遭あった何人かを、日蓮大聖人が、正法流布の先覚者という意味で取り上げていらっしやるのです。

「法道三蔵は面おもてに火印かなやきをあてられ」

この人は、中国宋代そうだい、徽宗皇帝きそうの時代に、やはり正法を護持していた人です。仏法を護るためにたたかって、顔に火印を押されて、江南の道州に追放になったのです。

「師子尊者は頭こうべをはねられ」

師子尊者は、釈尊滅後千二百年ごろのインドの人です。正法のために、国王の檀弥羅王だんみらに首をはねられた。

「天台大師は南三・北七にあだまれ」

天台大師は、中国に出現された像法時代の仏さまです。「南三・北七」とは中国の南北朝時代、江南に三人、江北に七人、それぞれ異なった学説を唱える者がいたのです。天台は、その南三北七に、たいへんにあだまれました。

「伝教大師は六宗にくまれ給へり」

六宗とは、奈良の六宗、あるいは南都の六宗といい、当時のいちばん中心の指導階層がいた宗派です。これを伝教大師が桓武天皇かんむの前で、法華経によって打ち破った。そして迹門の戒壇を建立したの

は有名な話であります。

「此等の仏菩薩・大聖等は法華經の行者として而も大難にあひ給へり」

これらの人々は、法華經を修行して、しかも大難にあっているではないか。

「此れ等の人人を如説修行の人と云わずんばいづくにか如説修行の人を尋ねん」

この人たちは、在世の、脱益の法華經の、如説修行の人であります。それに対して大聖人は、下種家の法華經の修行者であります。したがって、難を受けていることがかえって、如説修行の人である証明となるのです。

現在でも、あだまれているところは、日蓮正宗創価学会だけです。他の宗教は、天理教でも、立正佼成会でも、昔から存在する既成宗教の集まりである全日本仏教会（全日仏）でも、新興宗教の集まりである新宗連にしてもぜんぶ、権力と結託けつたくしており、なにも迫害などは受けていない。

仏意仏勅を蒙こうむって、権力と戦い、邪法と戦い、迫害を受けているのは、われわれだけではありません。永遠にぜんぶ御書のとおりです。このように勇敢に戦って、仏になれないわけはありません。永遠に幸せになる因をつくっているのです。確信をもって進むのです。

とくに男子は、たくましい人、強い生命の人になっていただきたい。女子は、純粹な信心の人になつていただきたい。

「然るに今の世は鬭諍堅固・白法隱没なる上」

今の世、末法は、争いの絶えない時であるし、釈尊の仏法も隱没してしまふ時です。

また「悪国」——国も悪い。たしかに悪いです。それから「悪王」——政治家も悪い。買収ばかりではないですか。選挙のときは頭を下げて、後はなにをしているかわけがわからない。悪いことばかりやっている。悪王です。「悪臣悪民のみ有りて」——官僚や民衆もよくない。悪臣悪民、結局、民衆のことです。

「正法を背きて邪法・邪師を崇重すれば」

日蓮正宗、大聖人の仏法に背いて、他の思想、哲学、邪教、邪宗等を崇重していくならば。

「国土に悪鬼乱れ入りて三災・七難盛に起れり」

国土の思想が乱れる。「悪鬼乱れ入り」とは、思想が乱れることです。思想が乱れるがゆえに、いっさいが乱れていくのです。それで三災、七難が盛んに起きてくる。あらゆる不幸が、悪循環で連続して起こってくる、との教えであります。

凜々たる折伏弘教の實踐を

かかる時刻に日蓮仏勅を蒙りて此の土に生れけるこそ時の不祥なれ、法王の宣旨背きがたければ經文に任せて権実二教のいくさを起し忍辱の鎧を著て妙教の劍を提げ一部八巻の肝心・妙法五字の旗を指上て未顕真実の弓をはり正直捨權の箭をはげて大白牛車に打乗って權門をかつぱ

と破りかしこへ・おしかけ・ここへ・おしよせ念仏・真言・禪・律等の八宗・十宗の敵人をせむるに或はにげ或はひきしりぞき或は生取られし者は我が弟子となる、或はせめ返し・せめをとしすれども・かたきは多勢なり法王の一人は無勢なり今に至るまで軍いくさやむ事なし、法華折伏・破權門理の金言なれば終に權教權門の輩やからを一人もなく・せめをとして法王の家人けふんとなし

「かかる時刻に日蓮仏勅を蒙りて此の土に生れけるこそ時の不祥なれ」

このような惡世末法の時に、仏の命を受けて日本国に生まれたことこそ、時の不祥である。悪い時に生まれてきたものだ、とおおせです。

「法王の宣旨背きがたければ經文に任せて權實二教のいくさを起し」

この場合の「法王」は釈尊です。釈尊の命令に背くわけにはいけないから、權實二教のいくさ、邪宗破折のいくさを起こした。

大聖人の場合には、釈尊の命令に背くわけにはいけないと述べられて、わかりやすく論理的に釈尊を立てたわけです。一つの仏教史観です。ほんとうは、大聖人は、すべてお悟りあそばしているのです。ですから、大聖人の仏法は、まったく独自のものであるのですが、順序正しく、このようになっていいるのだと、歸納法的に御明示くださったところであります。

「經文に任せて」——法華經に任せて、「權實二教のいくさを起し」——權教と實教を、はっきり分けておっしゃっています。邪法と正法をはっきり立てわけなければならぬという意味です。

「忍辱の鎧よろいを著きて」——「忍辱の鎧」とは慈悲です。どんな難があっても、一切衆生を救いきる三大秘法の仏法をたもたせて、根本的幸せを与えきるという、その行動です。

「妙教の剣つるぎを提ひつまげ」——「妙教」とは南無妙法蓮華經です。

「一部八卷の肝心・妙法五字の旗きを指さし上あげて」

法華經一部八卷の肝心である南無妙法蓮華經の題目をさしあげてということですが、陰でこそそやっていてはいけないのです。「妙法五字の旗を指上さしあげて」です。その決心でいくのです。凜々たる信心りんりんの息吹をもって、というのです。

「一部八卷」が、釈尊の脱益の法華經です。「肝心」が、下種家の南無妙法蓮華經、すなわち大聖人の法華經です。種脱相對しているのです。

「妙法五字」とは、南無妙法蓮華經のことです。五字といっても、七字といっても、同じことです。

「末頭眞実の弓をはり正直捨權しやけんの箭やをはげて」

無量義經の「四十余年末頭眞実」の弓をはり、法華經方便品の「正直に方便（權教）を捨て」の箭やをつがえて、「大白牛車びやくごしやに打乗うちりやって」——この「大白牛車」とは、法華經のことです。インドにおいては、いちばん高貴な、強い、立派な車をいうのです。羊車ようしや、鹿車ろくしや、牛車ごしやの三車とはくらべようもなくすばらしいのが、大白牛車です。

「權門をかつぱと破りかしこへ・おしかけ・ここへ・おしよせ念仏・眞言・禪・律等の八宗・十宗の敵人をせむるに」

權教の門、邪宗教の門を打ち破り、あちらへおしかけ、こちらへおしよせして戦ったと——勇ましいですね、大聖人は。われわれは、こういうわけにはいきませんが、座談会でしっかり折伏しようではありませんか。

「或はにげ或はひきしりぞき或は生取られし者は我が弟子となる」

あるいは逃げ、あるいは退却し、また逃げおくれて生け取られた者は大聖人の弟子となった。

「或はせめ返し・せめをとしすれども・かたきは多勢なり法王の一人は無勢なり今に至るまで軍やむ事なし」

あるいはせめ返し、せめおとしたりするけれども、敵の邪宗の連中は多勢であり、大聖人はただお一人である。だから現在にいたるまで、邪宗破折の戦いはやむことがない。

大聖人は佐渡へ流されても、その広宣流布のための戦^{いくさ}やむことなしだったのです。どんなことがあろうとも、こりはしない、死ぬまで広宣流布のためには指揮をとるぞ、一人であっても、無勢であっても、最後まで、この戦は、法戦は、断固としてするぞ、といわれているのです。

それを、高等部員は忘れてはいけません。生涯の決心にしなければなりません。

大聖人の当時は、大聖人お一人で、無勢です。弟子はみんな退転したのです。しかし今は、老人から赤ん坊までぜんぶ入れれば、約一千万におよぶ同志がいるのです。日本の人口の十分の一いるのですから、むしろ敵は無勢、味方は多勢ではないですか。それでいて退転するなどというのは、よほどおろかな人ですよ。そのような人はどんなところへいっても、人生の敗北者です。

「法華折伏・破權門理の金言なれば」

「折伏」ということばが、はっきり御書にでております。けっして、学会の発明したものでもなければ、学会でかってにやっている実践でもない。大聖人がおっしゃっているのです。御書にあり、法華經にあるのです。

法華經は折伏であり、權教を破していくという金言です。

「終に權教權門の輩やからを一人もなく・せめをとして法王の家人けにんとなし」

この「法王」とは、ここでは大聖人と拝すのです。総じていえば、皆さん方は法王の娘であり、むしろここであり、すなわち王子であり、王女です。その氣位でいくのです。

人法共に不老不死

天下万民・諸乘一仏乗と成ひとつて妙法獨ひとり繁昌はんじやうせん時、万民一同に南無妙法蓮華經と唱え奉らば吹く風枝をならさず雨つちぐれ壊くわいを碎くだかず、代よは義農ぎのうの世となりて今生こんじやうには不祥ふしやうの災難を払ひ長生の術を得、人法共に不老不死の理ことわり顯あらわれん時を各各御覽ぜよ現世安穩の証文疑い有る可からざる者なり

これは広宣流布の暁あかつきのすがたです。この段は有名なお言葉です。ここも日寛上人は、さまざまな角度からお説きになっていらっしやいますが、いまは省略します。

大聖人は、今の中国が、昔、もともと平和であったときの故事を引かれて、広宣流布した社会の様相を述べていらっしやるところです。夢に見たよい社会ができるのです。

「天下万民・諸乗一仏乗と成って妙法独ひとり繁昌せん時、万民一同に南無妙法蓮華經と唱え奉らば」

「天下万民」とは、日本国民、また全世界の人々と訳してよいのです。人々が、あらゆる邪宗を捨て、日蓮大聖人の妙法が、独り繁昌する時、すなわち、すべての人々が一同に、三大秘法の御本尊に向かつて南無妙法蓮華經と唱えるならば、ということなのです。

「吹く風枝をならさず雨つちくれ壤をを砕かず」

梢こすえを吹く風は、そよそよと吹き、降る雨も、しとしととして壤つちくれを砕かない。集中豪雨で山崩れや洪水を起こすようなことはなくなるのです。

「代は義農ぎのうの世となりて」

古代、中国に、伏羲ふつぎ、神農しんのうという帝王によって治められた、ひじょうに理想的な、平和な社会があった。泥棒などはいなかったのです。広宣流布になれば、そういう世の中となるのです。

「今生には不祥の災難を払ひ」——「不祥の災難」とは事故です。交通事故も少なくなる。炭坑事故もなくなるのです。「長生の術を得」——長生きできる。

「人法共に不老不死の理ことわり顕れん時を各各御覽ぜよ」

「人法共に」——人生も、そしてまた妙法とともに、ということ。妙法が、この宇宙のいっさいの本源力であり、その妙法にもとづくいっさいの社会、また人生なのです。

「不老不死」——どこまでいっても、幸福を満喫まんきつしきっていける人生を生きていくことができるという事です。

ここは、日寛上人によりますと、深甚しんじんの解釈がありますけれども、わかりやすくいえば、妙法は宇宙の本源力です。永久に崩れることなく、発展せしめていく力です。したがって、妙法は不老不死です。

その法に全人類がのっとるのですから、妙法とともに、最高に満足できる一生を送ることができるというのです。所願満足です。

スウェーデン等は、ひじょうに社会保障制度が発達している。社会もよくなった。それでも自殺者が多い。これでは不老不死ではありません。どんなによい社会ができて、妙法がなければ、御本尊がなければ、不老不死の所願満足はないのです。

「現世安穩の証文疑い有る可からざる者なり」

ですから、結局、現世安穩はまちがいない。広宣流布になれば、いま申し上げたような世の中になるのです。

因果俱時ですから、それを、まず個人が実践していくのです。そして自分自身の「吹く風枝をならさず」等の文の証拠をつくっていく。それから自分の住む社会へと広げていくならば、やがては、そ

の国へ、また世界へと、その証拠がつくられていくのです。そのようにしなさいとの御文です。このように、まず個人にとり、それから国家、人類世界にとっていくことが大切です。

これからも、この御書は何回も拝読していくようにしましょう。そうすれば、だんだんとわかっていくようになります。しっかり勉強していただきたい。

如説修行の行者とは

問うて云く如説修行の行者と申さんは何様いかに信ずるを申し候べきや、答えて云く当世・日本国中の諸人・一同に如説修行の人と申し候は諸乗一仏乗と開会かいえしぬれば何れの法も皆法華經にشته勝劣浅深ある事なし、念仏を申すも真言たもを持つも・禅を修行するも・総じて一切の諸經並びに仏菩薩の御名を持ちて唱るも皆法華經なりと信ずるが如説修行の人とは云われ候なり等云云

「問うて云く如説修行の行者と申さんは何様に信ずるを申し候べきや」

如説修行の行者というのは、どのように信ずる人というのか、との質問です。

「答えて云く」——ここは、世間一般の、如説修行の行者に対する考え方を述べられているのです。

当世（大聖人御在世時代）の日本の人々は「如説修行の人」について、つぎのように考えている。

すなわち絶待妙の立場から、声聞、縁覺の二乗、それに菩薩を加えた三乗のための経も、みな究極においては一仏乗を説いているのだと開会すれば、法華経以前のどの法も、みな法華経となつて、勝劣浅深の差別はない。したがって念仏を唱えても、真言をたもつても、また禪を修行しても、その他のいろいろな宗教を信仰しても、いっさいの諸経、ならびに仏菩薩の名号みょうごうをたもつて唱えるのも、みな法華経をたもつことになるのだと信じていく人が、如説修行の人といわれるのだ、と。

結局、法華経からみればぜんぶ生きてしまうのだから、どの宗教を信心してもぜんぶ如説修行の人になるのではないか、というのです。

これは絶待妙を誤つて用いているのです。ひじょうに巧たみにこじつけの解釈をしています、このような手は、邪宗の輩やからのよくやる論法です。

方便、眞実を立て分けよ

予が云く然らず所詮・仏法を修行せんには人の言を用う可らず只仰ただいで仏の金言をまほるべきなり我等が本師・釈迦如来は初成道しよじやうどうの始より法華を説かんと思食おほしめししかども衆生の機根未熟なりしかば先まず權教たる方便を四十余年が間説きて後に眞実たる法華経を説かせ給たまひしなり、此の経の序分無量義経にして權実権実のはうじ傍示を指て方便眞実を分け給へり、所謂いわゆる以方便力りき・四十余

年・未顕眞実これ是なり、大莊嚴等の八万の大士・施權・開權・廢權等のいはれを心得分け給いて領解りようげして言いわく法華經已前の歷劫修行等の諸經は終不得成・無上菩提むじようぼだいと申しきり給ひぬ、然しかして後正宗しやうしやうの法華に至って世尊法久後・要當說眞実と説き給いしを始めとして無二亦無三・除ぞく仏方便說・正直捨方便・乃至不受余經一偈げと禁め給へり

「予が云く然らず所詮・仏法を修行せんには人の言を用う可らず只仰いで仏の金言をまほるべきなり」

前述の一般の人々の考え方を、大聖人が否定されているのです。

「法に依よって人に依らざれ」とのことばもあります。大事なことは「人の言」を用いるのではなく、「仏の金言」どおり実践することです。仏が説いたものをなんでも修行すれば、それは如説修行の人と思われられるかもしれないが、じつはそうではない。諸乗一仏乗の法華經だけを信じて、他の諸經を破折していくのが、ほんとうの如説修行の人なのだと、つぎに經文のうえから証明されるのです。

では、法華經とそれ以前の爾前經とはどちらがうかといえ、たとえば家を建てるときに、足場を築いてから建てはじめますが、その足場にあたるのが爾前經なのです。できあがった家は法華經です。家ができれば、足場はもはや不用です。きれいに取り払わなくてはならない。その取り払うことが折伏なのです。

この例のように具体的なものの場合にはわかりますが、經文の内容などの場合には、なかなかわか

りにくい。そこで一般の人々は、釈尊が説いたことには変わりはないのだから、どの宗派を信じて
も、釈尊の如説修行になるではないかと思ってしまうのです。

ここで、すこし話が飛躍しますけれども、三大秘法の御本尊を根本とした場合には、流通分とし
て、いっさいの經文を生かしてよい。使っていけるのです。さらにキリスト教哲学であろうが、マル
クスの哲学であろうが、インドの哲学であろうが、學問として生かしていくことはいっこうにかま
いません。

「我等が本師・釈迦如来は初成道の始より法華を説かんと思食おぼしめししかども衆生の機根未熟なりしかば先
ず權教たる方便を四十余年が間説きて後に眞実たる法華經を説かせ給いしなり」

釈尊は、三十歳で成道して、五十年間、八十歳まで仏法を説きました。そして衆生の機根が未熟だ
ったので、初めから法華經を説かないで、權教方便の教えを最初の四十二年間説きました。その後
に、釈尊のほんとうの悟りである法華經を説いたのです。

「此の經の序分無量義經にして權實のはうじさしを指て方便眞實を分け給へり」

「此の經」とは法華經であります。法華經の序分が、無量義經という經文になります。法華經の一步
手前に説かれたので、開經といわれます。

その無量義經に、「方便眞實を分け給へり」、すなわち權教と實教との經文をはっきり立て分けた、
と説いてるではないかということです。

「方便」は權教である四十余年の爾前經、「眞實」は實教である法華經のことです。そのように、無

量義經に明確に説いているのです。

「以方便力・四十余年・未顕眞実」

これは無量義經の經文です。方便力をもって、四十余年、未だ眞実を顕わさず、と読みます。すなわち、四十余年間の教えは、方便教であり、まだ眞実を明かしていない、と無量義經に説いているのです。

「大莊嚴等の八万の大士」——この菩薩たちは無量義經に説かれています。「八万の大士」とは多くの菩薩という意味です。

「施權・開權・廢權等のいはれを心得分け給いて」

法華經を立てるにあたって、釈尊の説法には三重の段階があります。

「施權」——為實施權といいますが、法華經を説く準備として、權教を説くことをいいます。それから「開權」——これは、開權顯實といって權教を開いて、實教を説くことです。そして「廢權」——廢權立實といって、權教を折伏し廢して、法華經を立てていくことです。

大莊嚴等の多くの菩薩たちは、これらの意味を心得て、つぎのように述べたのです。

「領解して言く法華經已前の歷劫修行等の諸經は終不得成・無上菩提と申しきり給ひぬ」

「領解して言く」——仏の説法を聞いて、菩薩たちが、理解したことを述べたのです。

「法華經已前の歷劫修行等の諸經は」——爾前經では、菩薩はたいへん長いあいだ、種々の修行を行って、やっと成仏すると説かれています。

しかし、その歷劫修行を説く爾前經では、「終不得成・無上菩提」——終に無上菩提を成ずることを得ず、すなわち、菩薩たちは修行したけれど、ついに成仏することはできなかった、永久に成仏できない、と断言したのです。

「然して後正宗の法華に至って世尊法久後・要當說眞実と説き給いしを始めとして無二亦無三・除仏方便説・正直捨方便・乃至不受余經一偈と禁め給へり」

「正宗」とは正宗分のこと、本論となる部分をさします。序分、正宗分、流通分とたてわけますが、これも仏法の方軌の一つです。ここでは、その正宗分について述べているのです。いちばん要とということです。

序分の無量義經が終わって、正宗分の法華經方便品にいたって、初めて「世尊法久後・要當說眞実」と説いた。ここに、法華經こそが、釈尊出世の本懷たる眞実の教えであると宣言したのである。

この「要當に眞実を説くべし」の「眞実」とは法華經です。「世尊は法久しくして後」の「久」が爾前經になるわけです。

また「無二亦無三・除仏方便説・正直捨方便・乃至不受余經一偈」と説きました。

「二無くまた三無し」——唯一仏乘、法華經しかない、ということです。「仏の方便の説をば除く」——ただし、方便の教えは除くのです。

ゆえに「正直に方便を捨て」——方便品の方便でなくして、正直に爾前經の方便を捨てなさい、ということです。以上は、方便品の文です。

「乃至余經の一偈をも受けざれ」——譬喩品の文です。法華經以前の經文は、たとえ一偈といえども絶対に受けてはいけない。このように戒めてあるではないか。そのとおり、如說修行しなくてはいけないのだとおおせです。

今でいえば「不受余經一偈」というのは、御本尊以外は、すべて信仰の対象としてはいけないということですが、「二無くまた三無し」とは、幸福になる道は、ただ御本尊しかない。他にはなにもないということです。

人生の究極の目的は、學者になることでもなければ、教育者になることでもない。また、大政治家になることが人生の目的でもない。それらは、みな方便です。根本の目的は成仏にある。私たちにあってはめていえば、そのように解釈できます。

ただ御本尊のみと信ずる人が如說修行の人

是より已後は唯一仏乗の妙法のみ一切衆生を仏になす大法にて法華經より外の諸經は一分の得益も・あるまじきに末法の今の學者・何れも如来の説教なれば皆得道あるべしと思ひて或は眞言・或は念仏・或は禪宗・三論・法相・俱舍・成実・律等の諸宗・諸經を取取に信ずるなり、是くの如き人をば若人不信・毀謗此經・即斷一切世間仏種・乃至其人命終・入阿鼻獄と定

め給へり、此等のをきての明鏡を本として一分もたがえず唯一乘法と信ずるを如説修行の人とは仏は定めさせ給へり

「是より已後は」——ここは、無量義經や法華經で定められた後は、という意味とも拝せますし、または、末法に入っては、とも立てられます。「唯一乘法」の法華經だけが、一切衆生を仏にすることのできる大法であり、その他の諸經は、少しの利益もあるわけではないのです。

ところが末法の今の学者は、どの經にしても釈尊の説いた教えであるから、みな成仏できるだろうと思っている。そして、權大乘教の禪宗だとか、小乗教の三論、法相、俱舍、成実、律等のいろいろな宗教を、さまざまに信じているのです。

この三論、法相、俱舍、成実は、今は少ないですが、桓武天皇時代以前、伝教大師がでる以前においては、奈良朝文化の中心の宗教だったのです。

「若人^{にやくにん}不信」以下は、譬喩品の文です。

「若し人信ぜずして此の經を毀謗^{きぼう}せば、即ち一切世間の仏種を断ぜん。乃至其^{なにしそ}の人命^{みょうじゆう}終して阿鼻獄に入らん」と読みます。

そのように、釈尊が定めた真実の教えに背き、自分勝手な解釈をして、禪宗などの邪宗を信仰する者は、または今日においては、日蓮正宗、三大秘法の御本尊を誹謗して、かってに邪法を信心する者は、釈尊が法華經譬喩品において「若し人信ぜずして此の經（三大秘法の御本尊）を毀謗せば、即ち一

切世間の仏種を断ぜん」といわれているように、絶対に幸福にはなれないのです。

「乃至其の人命終して阿鼻獄に入らん」——生きているあいだも幸福になれない。そして死しては、かならず地獄に墮^おちる。阿鼻叫喚^{あびきょうかん}地獄——地獄には百何十種とありますが、そのなかでいちばんきびしい地獄です。無間地獄です。間断なく、ずーっと苦しみが続くのです。

そのようになると断定されている。こわいことです。ウソというほうが、信じないというほうが、そんなバカなことがあるかというほうが、真実なのです。これを確信してもらいたいのです。

「此等のをきての明鏡を本として一分もたがえず唯一乘法と信ずるを如説修行の人とは仏は定めさせ給へり」

釈尊が説いたこの経文の明鏡を根本として、それに一分も違^{たが}わず、唯一乘法と信ずる、すなわち法華経だけが幸福になる道であると信じていく人を、如説修行の人というのである。このように釈尊が断定しているのです。

これは一往、釈尊の法華経を中心に立てております。その法華経の寿量品の文底に秘沈して、三大秘法の御本尊が説かれているのです。

初めから「三大秘法だ」と、そのまま説いても人々にはわからない。しかも、その三大秘法をわからないで誹謗すれば、かえって地獄へ墮ちてしまいます。ですから、理解できるように一往、釈尊を立て、法華経を表^{おもて}にだされて説かれたのです。

ゆえに、法華経とはなにかといえば、それは日蓮大聖人の仏法、すなわち三大秘法の南無妙法蓮華

經と拝すのです。表面では法華經、法華經といわれているけれども、大聖人の御觀心は、どこまでも南無妙法蓮華經につきるのです。

したがって「唯有一乘法」——一乗の法とは、三大秘法の御本尊のことです。これ以外に幸福になる道はないと「信ずるを」——行ずる、実践する人こそ、如説修行の人といえど、仏は断定されているのです。そしてこの「仏」とは、日蓮大聖人であると拝すのです。

しかし、文の上では、ここは一往、釈尊を表にし、法華經を爾前經に相對して立てておられるところでは、

難じて云く左様に方便權教たる諸經諸仏を信ずるを法華經と云はばこそ、只一經ただに限りて經文の如く五種の修行をこらし安樂行品の如く修行せんは如説修行の者とは云われ候まじきか如何いかん

このまえの段では、どのように信ずる者が、如説修行の行者といえるのか、との問いに答えて、大聖人は、釈尊が法華經の方便品で「唯一乗の法のみあり」「正直に方便を捨て」と説き、また譬喩品で「余經の一偈をも受けざれ」と説いた文に従い、權經を捨て、ただ法華經のみを信じてゆく者が、如説修行の人である、とおおせになっています。

ここでは、それに対して、それでは、法華經一經に限って、法師品の五種の修行や、安樂行品の四

安樂行のごとき、授受の修行をする者が、如説修行の者ではないのか、と反論してきているのです。「左様に方便權教たる諸經諸仏を信ずるを法華經と云はばこそ」とは、成仏できない方便權教の諸經諸仏を信ずるのを、法華經を信ずる人であるというのならばともかく、との意であります。

「只一經に限りて經文の如く五種の修行をこらし安樂行品の如く修行せんは」

釈尊の數多くの經のなかから、ただ法華經一經だけを取り出して、「經文の如く五種の修行をこらし」——法師品に説かれたとおりに、受持、読、誦、解説、書写等の五種の修行を行い、かつ安樂行品のごとく、他の經をまったく誹謗しないというような修行をする者が、「如説修行の者とは云われ候まじきか如何」——如説修行の行者とはいわれないであろうか、といっているのです。

これは、暗に、日蓮大聖人が五種の修行を行わず、また他の宗派を強く破折して、難にあっているのは、如説修行の行者ではないのではないか、という非難をふくんでいるわけです。

仏法修行の要諦は授折二門

答えて云く凡仏法を修行せん者は授折二門を知る可きなり一切の經論此の二を出でざるなり、されば國中の諸學者等仏法をあらあら學すと云へども時刻相應の道をしらず四節・四季・取取に替り、夏は熱く冬はつめたく春は花さき秋は菓なる春種子を下して秋菓を取るべし秋

種子を下して春菓を取らんに豈取らる可けんや

ここは、法華經の修行にも、時によって、授受と折伏の二門があることを述べられて、その時を違えては、成仏どころか仏法を乱してしまうとおおせられているところです。

そして、末法は折伏の時であり、法華經、すなわち三大秘法の御本尊を持って、他のあらゆる邪宗教を破折していくことが、如説修行になることを示されています。安樂行品に説かれたような授受の修行は、正法時代、像法時代の修行である。末法の修行ではない、とこのまえの論難を打ち破っているのです。

「答えて云く凡仏法を修行せん者は授折二門を知る可きなり一切の經論此の二を出でざるなり」

仏法を修行するにあたっては、授折二門を知るべきである。授受と折伏です。この二つのうちのどちらかです。授受とは、やわらかく、他の經を批判したりしないで、法を説くやり方です。法華經の安樂行品に説かれた修行です。正法時代、像法時代、天台大師の時代などは、授受です。

授受の場合には、御本尊がないのです。御本尊を根本とした場合には、折伏になっていくのです。今でいえばこう考えてよいでしょう。

ですから、釈尊の仏法の場合、天台仏法の場合、また伝教大師の仏法の場合には、御本尊がありませんから、やはり授受です。いま末法においては御本尊がありますから、御本尊を根本として修行させていこう、救っていこうということになります。

釈尊在世、正法、像法年間は授受、末法の日蓮大聖人の時代は折伏です。御本尊を中心にして、他のいっさいの爾前權教を破折していくのが、時に適^{かな}った修行なのです。折伏をするのだから、三類の強敵が競い起こってくるのは当然でしょう。

「されば国中の諸学者等仏法をあらあら学すと云へども時刻相応の道をしらず」

「国中の諸学者」——国中の仏法を学んでいるもの、すなわち邪宗の僧などは「仏法をあらあら学すと云へども」——仏法をほぼ学んで知っているようではあるけれども、「時刻相応の道をしらず」——正法、像法、末法という時がある。その時に応じた修行を知らない。みな授受と折伏の二道を知らないというのです。

あくまでも成仏していくには、その「時」をわきまえなくてはいけない。その時に適った仏法がある。末法においては、末法万年^{じんみらいさい}尽未来際、これから永遠に、この三大秘法の御本尊によって、御本尊を種にして成仏する以外にない。絶対の幸福をつかむ以外にないのです。

現在、日本にはたくさんの宗教がある。宗教法人だけでも十八万あるという。世界中では、たいへんなものです。しかし、時に適った正しい宗教は、また仏法の真髓というものは、太陽が一つしかないように、一国に国王は一人しかいないように、一つしかないのです。それが日蓮正宗であり、御本尊なのです。

「四節・四季・取取に替^{かわ}れり」

「時刻相応」ということ、時ということとは、すべてのものについても大切です。一年のなかでは、春

夏秋冬という時の変化に応じて、自然界も、いっさいのものが変わってきます。

「夏は熱く冬はつめたく」——夏は暑く、冬は寒い。

「春は花さき秋は菓^みなる」——春には美しい花がいっぱい咲き、秋はその実になる。

「春種子を下して秋菓を取るべし秋種子を下して春菓を取らんに豈^{あた}取らる可けんや」——作物を穫^とるにしても、春に種をまいて、秋、その実をとります。秋に種をまいて、春にその実を収穫しようと思つても、それは無理です。そのように、すべてのものには時が大切であつて、時をまちがえたらなんにもならないとおおせです。

末法は法華折伏の時

極寒の時は厚^{きぬ}き衣は用^{もち}なり極熱の夏はなにかせん、涼風^{りやうふう}は夏の用なり冬はなにかせん、仏法も亦復^{またまた}是^かの如し小乗の流布して得益^{とくやく}あるべき時もあり、權大乘の流布して得益あるべき時もあり、実教の流布して仏果を得べき時もあり、然るに正像二千年は小乗權大乘の流布の時なり、末法の始めの五百年には純円・一実の法華經のみ広宣流布の時なり、此の時は闍^{とら}諍^{じやう}堅固・白法^{びやくほう}隱没^{おんもつ}の時と定めて權実雜^{ごんじつざん}亂^{らん}の砌^{みざり}なり、敵有る時は刀杖弓箭^{とうじやうきゆうせん}を持つ可し敵無き時は弓箭兵杖何にかせん、今の時は權教即実教の敵と成るなり、一乘流布の時は權教有つて敵と成りて・まぎら

はしくば実教より之を責む可し、是をしやうしやく掇折二門の中には法華經の折伏と申すなり

われわれが折伏行を實踐していくということは、いまこの御文にあるとおり、大聖人のおおせどおりの修行であり、実践です。それは明瞭であります。「掇折二門の中には法華經の折伏と申すなり」——折伏をしなさいと、こうおおせなのです。

「極寒の時は厚き衣は用なり極熱の夏はなにかせん」

ひじょうに寒いときには、厚くて暖かい衣は役に立つ。けれども、暑い夏には、なんの役にも立たない。かえってじゃまになります。

「涼風は夏用のなり冬はなにかせん」

すずしい風も、また同じです。夏には喜ばれる。けれども冬は、風があったらますます寒い。

「仏法も亦またまた復是くの如し」

仏法もまた、同じように、時に応じた経、そして修行があるのです。

「小乗の流布して得益あるべき時もあり」

小乗教が広まって、功德のある時もありました。

たとえばいうならば、明治時代にも、蓄音機があった。それは、木の箱に大きなラッパのついた形をしていて、手でハンドルをグルグル回して、やっと音が聞こえるような蓄音機だった。それでもレコードを聞く役には立ちました。「聞こえた」といって喜んでいた。利益があったわけです。

同じように、釈尊在世や、滅後すこしのあいだは、小乗教でも、得益があった。ぜんぜんなんの宗教も信ぜず、人生観をもっていない人にとっては、幸せだったといえましょう。

「權大乘の流布して得益あるべき時もあり」

權大乘が広まって功德のある時もあった。正法時代の後半や像法時代などはそうです。

「実教の流布して仏果を得べき時もあり」

実教である法華経が広まって、成仏できる時もある。

「然るに正像二千年は小乗權大乘の流布の時なり」

いろいろな時があるけれども、正法時代、像法時代の二千年のあいだは、小乗教、權大乘教が広まっていく時である。正法時代のまえのほうが小乗教、それ以後、正法時代の後半と像法時代は、權大乘の流布の時です。

「末法の始めの五百年には純円・一実の法華経のみ広宣流布の時なり」

「末法の始めの五百年」というのは、正法千年、像法千年、そのつぎの五百年ということです。仏法では五百年ずつくぎっているのです。

正法年間とは、釈尊滅後五百年とつぎの五百年の、最初の千年間をいい、さらにその後の五百年とつぎの五百年が、像法年間になります。ですからここでは、末法の始め、万年尽未来際の始めを五百年といわれたわけです。この末法の始めの五百年のちょうど中間、すなわち釈尊滅後二千百七十一年目に、日蓮大聖人は御出現になったのです。

そしてこのときに、「純円・一実の法華經」、これは三大秘法の御本尊、末法の法華經と拝すべきですが、そのみが広宣流布する時である、というのです。

絶対に広宣流布する。高い所にある水が、低い所へ流れると同じ道理なのです。

「此の時は闍諍堅固・白法隱没の時と定めて權実雜亂の砌なり」
とうじようけんこ びやくほうおんもつ みぎり

この三大秘法の御本尊が流布する末法の時を、釈尊が予言して「闍諍堅固・白法隱没の時」といったのです。教義上の争いが絶えず、釈尊の仏法の功德がなくなる時代になるとの意味です。そして「權実雜亂の砌」——權教と実教が入り乱れて、區別がハッキリしなくなってしまう時です。

今は、いうなれば宗教の戦国時代です。これを統一するのが、私どもの役目です。その方法は折伏行しかないのです。

「闍諍堅固」とは、広くいえば、争いやめごとが絶えないということです。日本もしかり、また国際社会もしかりです。また日本の宗教界は、既成宗教も新興宗教も、たえずケンカをしては分裂している。

御本尊のもとに、わが日蓮正宗創価学会だけは、ガッチリ團結していこう。諸君がその中核になって、永久に広宣流布の基礎をつくっていくのですから、團結しあっていてください。

「敵有る時は刀杖弓箭を持つ可し敵無き時は弓箭兵杖何にかせん」
きやうせんへいじよう

たとえば、敵があつてはじめて、刀や杖や弓矢を持つかいがある。それらを持って、敢然と戦っていかなくてはならない。敵がなければ、武器は用をなさないのである。

「今の時は權教即実教の敵と成るなり」

いま末法の時に入ると、權教は、即実教の、正法の敵となっている。

「一乗流布の時は權教有って敵と成りて・まぎらはしくは実教より之を責む可し」

「一乗流布の時は」——大聖人の仏法、三大秘法の御本尊が流布されるにあたっては、「權教」——

邪宗邪義があつて、敵となつて、広宣流布を妨げようという時には、御本尊を根本として折伏をしていきなさい、との御命令です。

「是を摂折二門の中には法華經の折伏と申すなり」

この戦いが、摂受と折伏に分けると、法華經の折伏といわれるのです。

天台云く「法華折伏・破權門理」とまことに故あるかな、然るに摂受たる四安樂の修行を今の時行ずるならば冬種子を下して春菓を求る者にあらずや、雞にわとりの曉あかつきに鳴くは用ゆうなり宵よいに鳴くは物怪もつげなり、權實雜亂の時法華經の御敵を責めずして山林に閉じ籠こもり摂受を修行せんは豈あに法華經修行の時を失う物怪にあらずや、されば末法・今の時・法華經の折伏の修行をば誰か經文の如く行じ給へしぞ、誰人にても坐おわせ諸經は無得道・墮地獄の根源・法華經独ひとり成仏の法なりと音こえも惜まずよばはり給いて諸宗の人法共に折伏して御覽ぜよ三類ごうてきぎたの強敵来らん事疑い無し

「天台云く『法華折伏・破權門理』とまことに故あるかな」

天台大師は「法華經は折伏の教えで、權門の理を打ち破っていく教えである」といつているが、まことにそのとおりであるとおおせです。

「然るに授受たる四安樂の修行を今の時行ずるならば冬種子を下して春菓を求る者にあらずや」

そのように、末法は折伏の時代であるのに、安樂行品に説かれた「四安樂」などという授受の修行を行ずるならば、それは、時を違えたことになる。折伏もせず、そのようなことをしているならば、それはちょうど冬に種を蒔いて、春收穫を得ようとしているようなもので、なんの收穫も得られないとおおせです。

総じては、いまの邪宗教の僧侶は、この姿です。現在の宗教界は、これにピッタリあてはまっている。本来、衆生を救うべきであるのに救わない、安閑あんかんとしている。ということは、法自体がまちがっている証拠です、末法という時代に相応しないから、なんの役にも立たないのです。

「雞にわとりの曉に鳴くは用もちなり宵よに鳴くは物怪ものけなり」

鶏が、朝鳴けば、それは目をさまさせてくれ、役に立つ。夜、鳴いても役に立たない。それと同じように、末法に折伏をせず、授受の修行を行うのは、道理にはずれたことになってしまふのです。

「權実雜亂の時」——末法の、正法と邪法とが入り乱れている時ということですよ。

「法華經の御敵を責めずして」——御本尊の敵である邪宗教の輩やからを折伏もしないで、「山林に閉じ籠り授受を修行せんは」——世間を離れて、山や林に閉じこもり、自分一人で四安樂等の授受を修行し

ているような人は、「豈あに法華經修行の時を失う物怪にあらずや」——法華經流布の時をまったくわきまえないバケモノであるとおおせです。

「されば末法・今の時・法華經の折伏の修行をば誰か經文の如く行じ給へしぞ」

そのように末法の修行は折伏なのです。その末法に、「法華經の折伏の修行をば」——御本尊を中心とした折伏の修行を、「誰か經文の如く行じ給へしぞ」——だれが、經文のごとくに行じているかといえ、日蓮大聖人を除いて、だれもいないではないか。

「經文の如く」とは、総じては法華經全体になりますけれども、そのなかでもとくに、勸持品ならびに不輕品と拝せるわけです。勸持品ならびに不輕品の經文のごとく行ずる人はだれがどうか、日蓮大聖人お一人しかいないではないか、と示されているのです。

「誰人にも坐ませ」——だれであってもよい、「諸經は無得道・墮お地獄の根源・法華經獨ひとり成仏の法なりと音こゑも惜まずよばはり給いて」——だれでもよいから、爾前經では成仏できない、そればかりか人を地獄へ墮おとす根源である、ただ法華經だけが成仏のための法であると、声も惜しまず叫んで、「諸宗の人法共に折伏して御覽ぜよ」——邪宗教の人々を、またかれらの邪義を、かたはしから折伏してみなさい。こういうことになるか。「三類の強敵来らん事疑い無し」——かならず、三類の強敵が競い起こることはまちがいないとおおせです。

大聖人は佐渡の国へ流された。しかし、この勸持品、不輕品どおりに折伏をなさったゆえに、佐渡の国へ流されたのだから、なにも疑うことはないのだよ、とおおせなのです。

法華經の行者に三類の強敵

我等が本師・釈迦如来は在世八年の間折伏し給ひ天台大師は三十余年・伝教大師は二十余年・今日蓮は二十余年の間権理を破す其の間の大難数を知らず、仏の九横くおうの難に及ぶか及ばざるは知らず、恐らくは天台・伝教も法華經の故に日蓮が如く大難に値あい給いし事なし、彼は只惡あく口・怨嫉おんしつばか計りなり、是は兩度の御勘氣・遠国おんごくに流罪せられ竜口たつのくちの頸くびの座・頭の疵きず等其の外惡ほか口せられ弟子等を流罪せられ籠ろうに入れられ檀那の所領を取られ御内を出いだされし、是等の大難には竜樹・天台・伝教も争いかでか及び給うべき、されば如説修行の法華經の行者には三類の強敵打ち定んで有る可しと知り給へ

「我等が本師・釈迦如来は在世八年の間折伏し」

「在世八年の間折伏し」とは、釈尊の場合、最後の八年間に説いた法華經が、折伏にあたるといふことです。法華經は随自意です。だれが聞かなくても、どんどん説いていきました。そして爾前經はぜんぶ方便であつたと説き、眞実の法門を明かしました。そのことをいっているわけです。

「天台大師は三十余年」

天台大師は十八歳で出家し、二十三歳で法華經を究めて、その後、爾前權教の諸宗を破折して、五十七歳で摩訶止觀を説きましたが、そのことをさしているのです。天台は三十余年のあいだ、權教を破折したという意味です。

「伝教大師は二十余年」

伝教大師もまた二十余年間、桓武天皇のまえで南都六宗を打ち破るなどの折伏をしてきたことをさしています。

「今日蓮は二十余年の間權理を破す」

日蓮大聖人は、建長五年に立宗を宣言なさってから、佐渡でこの「如說修行抄」を著されるまで、ちようど二十年たっているのです。その間、大聖人は、四箇の格言等をもって、いっさいの「權理」、すなわち邪宗教を折伏してきたのです。經文のとおりのお振る舞いです。

「其の間の大難数を知らず」

その間に受けた大難は数えきれない。おもなものだけでも、小松原の法難、松葉ヶ谷の法難、伊豆の流罪、そして竜口の頸の座と佐渡流罪等々、たいへんなものです。

「仏の九横の難に及ぶか及ばざるは知らず」

「仏の九横の難」とは、釈尊が受けた九つの大難です。大聖人の難が釈尊の受けた難と同じくらいであったかどうか、それは「知らず」といわれています。釈尊との比較は、謙遜して、ここではふせていらっしやるのです。しかし事實は、比べものにならないのです。大聖人の受けた難のほうがどれほ

ど大きいか、天地雲泥の差です。

「恐らくは天台・伝教も法華經の故に日蓮が如く大難に値い給いし事なし」

おそらくは、天台大師も、伝教大師も、法華經を弘通するにあたって、権理を破るにあたって、大聖人ほどの大難にあったことはないであろう。

「彼は只惡口・怨嫉計りなり」

天台大師や伝教大師は、ただ惡口されたり、陰で怨嫉されたりしただけである。

「是は兩度の御勘氣・遠国に流罪せられ」

日蓮大聖人は、伊豆へ佐渡へと二度流罪された。

「竜口の頸の座・頭の疵等其の外惡口せられ弟子等を流罪せられ籠に入れられ檀那の所領を取られ御内を出だされし」

竜口で首を斬られようとなされた。小松原の法難のときには、眉間に傷を受けました。それらの大難のほかにも、ずいぶんと惡口されたりしている。大聖人の弟子も島流しにされた。また弟子を牢に入れた。そして、大聖人の信者も、領地を没収されたり、所を追われたりした。

「是等の大難には竜樹・天台・伝教も争か及び給うべき」

この、大聖人とその一門が受けた大難に比べれば、竜樹や天台や伝教の受けた難などは、ものの数ではない。

「されば如説修行の法華經の行者には三類の強敵打ち定んで有る可しと知り給へ」

このように、大聖人も種々の大難を受けられている。したがって、末法において仏の経文どおり、折伏をしていく人には、かならず三類の強敵が競い起こってくる、それを覚悟しなさい、とのおおせです。

日蓮大聖人とは、もちろん立場は違いますが、これは私たち信徒にも通ずることです。個人においても、一生成仏するためには、多少の難はあるのです。また、広宣流布を遂行していくためには、日蓮正宗創価学会においても同じです。難があるがゆえに経文どおりになるのです。それを臆病になったり、これだけ信心しているのに、と疑いをもつような信心では成仏はできません。大偉業をなしとげることできません。

世間のことににおいても、戦争中など、平和運動家とか反戦主義者といわれる人たちが、どれほど多く牢へ入っていることか。やはり難を受けています。

偉大なことをなすためには、それぞれ苦難があるのです。いわんや、われわれは、広宣流布という最高の理想社会の建設をめざしています。また個人個人においても一生成仏という永遠の福運を積むためです。それくらいの難はあたりまえだと覚悟しなさい、という指導です。

ですから諸君は、いま仏道修行中ですから、ただ広宣流布を願ひ、題目をあげ、しっかりと勉強していくのです。なにも知らない人は、お題目をあげていると笑ったり、あんなにまで勉強しなければならぬのかなどというかもしれないけれども、十年先、二十年先、三十年先になったならば、その差はたいへんなものになります。これだけを胸に入れて進んでいってもらいたい。信心だけは忘れて

はいけません。

大聖人こそ如説修行の行者

されば釈尊御入滅の後二千余年が間に如説修行の行者は釈尊・天台・伝教の三人は・さてをき候ぬ、末法に入つては日蓮並びに弟子檀那等是なり、我等を如説修行の者といはずば釈尊・天台・伝教等の三人も如説修行の人なるべからず、提婆・瞿伽利・善星・弘法・慈覚・智証・善導・法然・良観房等は即ち法華經の行者と云はれ、釈尊・天台・伝教・日蓮並びに弟子・檀那は念仏・真言・禪・律等の行者なるべし、法華經は方便權教と云はれ念仏等の諸經は還かえつて法華經となるべきか、東は西となり西は東となるとも大地は持たもつ所の草木共に飛たび上りて天となり天の日月・星宿は共に落ち下りて地となるためしはありとも・いかでか此の理ことわりあるべき

「されば釈尊御入滅の後二千余年が間に」

釈尊が入滅されてから、日蓮大聖人が御出現になるまでの、二千余年のあいだ、すなわち、正法時代、像法時代、そして末法の初めに、ということですよ。

「如説修行の行者は」

法華經に説かれたごとく実践し、大難を受けているものは、ということです。このまえの段にあつたように、三類の強敵にあって戦っているものが、如説修行の行者になるのです。

「釈尊・天台・伝教の三人は・さてをき候ぬ」

釈尊自身と、像法の仏といわれる天台・伝教の三人は、いちおう、おいておく。

「末法に入つては日蓮並びに弟子檀那等是なり」

末法に入つては、如説修行の行者は、日蓮大聖人、およびその弟子檀那以外にはいないではないか、とのおおせです。

「我等を如説修行の行者といはずば釈尊・天台・伝教等の三人も如説修行の人なるべからず」

絶対の御確信です。大聖人門下を如説修行の行者といわなければ、釈尊、天台、伝教等の三人も、如説修行の人ではなくなってしまう。だれも、大聖人以上に、法華經のために、三大秘法の御本尊のために、難を受けている人はいないのです。ですから、大聖人を法華經の行者といわないならば、釈尊も、天台、伝教も、絶対に、如説修行の行者とはいえなくなってしまうのです。そんなバカなことはないわけです。

「提婆・瞿伽利・善星・弘法・慈覚・智証・善導・法然・良観房等は即ち法華經の行者と云はれ」

「提婆」——釈尊の従弟で、釈尊にさんざん敵対し、迫害した提婆達多です。「瞿伽利」——これは、

一度出家して仏弟子となったが、退転して、こんどは提婆達多を師匠としたため、生きながら地獄に墮ちた。「善星」——釈尊の出家前の子供です。やはり一度出家しましたが、低い悟りに執着して、

後、外道に近づき、仏法を否定した人です。それから「弘法」——日本の真言の開祖です。空海ともいいいます。また「慈覚・智証」——いずれも天台宗の座主でありながら、真言の邪義を取り入れてしまった人です。「善導」——中国の念仏宗の第三祖です。これは、最後には、柳の枝で首をつり、七日七夜も苦しんで死んだといわれます。「法然」——日本の念仏宗の開祖です。「良観房」——極楽寺に住んでいた律宗の僧です。

もし、大聖人およびその門下を如説修行の行者といわないならば、これらの、大謗法をおかしたのもや邪宗の開祖たちが、法華經の行者となってしまうではないか。そんなことはありません。

しかし、もしありうるならば、「釈尊・天台・伝教・日蓮並びに弟子・檀那は念仏・真言・禪・律等の行者なるべし」——釈尊、天台、伝教、日蓮大聖人および弟子檀那が、念仏、真言、禪、律等の行者ということになってしまふではないか。

またそうであれば、「法華經は方便權教と云はれ」——法華經は、方便權教、かりの教えといわれ、「念仏等の諸經は還って法華經となるべきか」——念仏等の爾前權教が、かえって法華經となってしまうというのか。

「東は西となり西は東となるとも」——東と西とが逆になるようなことがあっても、「大地は持つ所の草木共に飛び上りて天となり天の日月・星宿は共に落ち下りて地となるためしはありとも」——大地は、草木とともに飛び上がって、天となり、天の日や月や星が、みな落ちてきて大地となるといふような、まったく考えられないようなことが、たとえあったとしても、「いかでか此の理あるべき」

——どうして、大聖人が法華經の行者でないなどということがありえようか。どうして提婆達多等が法華經の行者となり、爾前經が法華經になるなどということがありえようか。あるはずがない、とおおせです。

絶対の御確信です。大聖人の仏法は、まちがいありません。成仏得道の法理です。御本尊はまちがいないのです。絶対に幸福になります。

われわれが幸福にならなかったならば、信心しない人が、幸福になるといふのか。信心をなにもしないで、われわれを誹謗した人が幸せになり、成仏して、われわれが不幸になって地獄へ墮ちるか、そんなバカなことはありません。われわれを誹謗し、そしてまた批判する人々は、謗法であるがゆえに不幸になる。御本尊を持った者、広宣流布に進んだ者は、かならず成仏し幸せになれる。その断言の書です。

難を恐れて一生成仏はない

哀なるかな今・日本国の万民・日蓮並びに弟子檀那等が三類の強敵に責められ大苦に値うを見て悦んで笑ふとも昨日は人の上・今日は身の上なれば日蓮並びに弟子・檀那共に霜露の命の日影を待つ計りぞかし、只今仏果に叶いて寂光の本土に居住して自受法樂せん時、汝等が阿鼻大

城の底に沈みて大苦に値わん時我等何計無慚と思はんずらん、汝等何計うらやましく思はんずらん、一期を過ぐる事程も無ければいかに強敵重なるとも・ゆめゆめ退する心なかれ恐るる心なかれ

「今・日本国の万民・日蓮並びに弟子檀那等が三類の強敵に責められ大苦に値うを見て悦んで笑ふとも」

ここは、大聖人御在世当時の、世間の人々の姿を述べられていますが、広宣流布途上の日蓮正宗創価学会を笑い、誹謗する人々の姿に通じます。

日蓮大聖人が島流しにされ、弟子檀那も鎌倉幕府の権力による迫害にあっているのをみて、世間の人々はさんざんに嘲笑した。また現在でも、われわれが題目をあげ、広宣流布のために寸暇を惜しんで活動しているのをみて、なにもあれほどまでしなくても、などと笑っていることに通じます。

「昨日は人の上・今日は身の上なれば」

そのように、きのうまでは大聖人の弟子檀那を嘲笑し、苦しい姿をみて喜んでいた。人のうえとみていた。しかし、きょうはわが身のうえのことにならずなるのです。

「日蓮並びに弟子・檀那共に霜露の命の日影を待つ計りぞかし」

したがって、霜や露が朝日の光にたちまちにとけて蒸発してしまうように、日蓮大聖人ならびに弟子檀那のこの苦しみは、ほんのわずかの辛抱であるとおおせです。

生命は永遠です。大聖人の仏法は、永遠の福運を築く仏法です。そのために、すこしぐらいの難はある。しかし難があっても、すこしのあいだのがまんです。批判され、いじめられるならば、罪障消滅して、かならずあとは大福運を積めるのです。難のあることをむしろ喜んでいきなさい、とのおおせなのです。

御本尊を持つ人^{たも}は仏身をたもつ。御本尊を持つ人は仏と同じなのです。ですから、われわれを批判した人は、仏をいじめたことになり、こんどは自分が罰をうけなければならない。これが生命の厳しい因果律です。

「只今仏果に叶いて寂光の本土に居住して自受法樂せん時」

ここは信心しきった姿、難を乗りきった生命の姿、強信の姿を述べているところです。

「只今仏果に叶いて」——大聖人のお心になつて、すなわち大聖人のおおせどおりに実践して、「寂光の本土に居住して」——これは御本尊と境智冥合することです。「自受法樂せん時」——生きることにそれ自体が、楽しくて楽しくてたまらないという境涯、絶対的幸福境涯を獲得したとき、すなわち仏の境涯、生命を獲得したときという意味です。かならず、そのようになつていけるのです。

そのときに、こんどは反対に「汝等が阿鼻大城の底に沈みて大苦に値わん時」——「汝等」とは、大聖人を誹謗してきた連中です。その人々が、誹謗してきた罰で無間地獄に墮^おちて、たいへんな苦しみを受けていくのです。

「我等何計無慚^{いかばかりむざん}と思はんずらん、汝等何計うらやましく思はんずらん」

われわれは、その姿をみて、どれほどか哀れに思うであろうか、そして誹謗してきた連中は、どれほどわれわれの福運に満ち、幸福を満喫しきった姿をうらやましく思うことであろうか、とのおおせです。

創価学会が再建されて約二十年、わずかその二十年の歴史をみても、この原理にあてはまっていた人がたくさんおられます。これからの前途洋々たる人生においても、この御金言を強く強く確信して進んでいただきたいと思っております。

「一期を過ぐる事程も無ければいかに強敵重なるとも、ゆめゆめ退する心なかれ」

「一期を過ぐる事程も無ければ」——一生は短い。だから、その一生のあいだに、「いかに強敵重なるとも・ゆめゆめ退する心なかれ」——すこしばかりの三類の強敵がおそいかかってきたからといっても、それは、わずかのあいだのがまん、あとは生涯、永遠の幸福境涯を会得できるので、縁に紛動さんどうされて退転してはいけないと戒められているのです。

どうしても罪障消滅のためには、難や批判を受けて、それによって人間革命していくしかない。ですからすこしばかり苦しくとも、齒をくいしばって、御本尊をだきしめて前進するのです。

「恐るる心なかれ」——難を恐れてはいけない。それでは一生成仏はできない。

この段は、いちばん大事なところです。ここを一生涯忘れないで、骨髓に刻みつけて、人生を生きていただきたいのです。

日蓮大聖人の時代には、有名な熱原の法難がありました。そのとき、大聖人、日興上人、また神四

郎兄弟等の法華經の護持者を迫害したのが、かの有名な平左衛門尉頼綱です。だが、その平左衛門も大聖人が御入滅になって十四年もたないうちに、一族ぜんぶが謀反ひはんの罪で、斬きられたり、流されたりにしてしまったのです。それほどはっきりしているのです。

これは現在にも通ずる仏法の嚴然たる法理です。

このように大なり小なり信心に反対して、諸君をいじめたらいへんです。もしそのような人がいたら、その人の姿を一生みていてごらん下さい。この御文のとおりになります。もしもこのとおりにならないとしたならば、それは、諸君のほうが退転してしまっているからです。電気だって電流が流れていなければ、手をふれてもしびれません。また電燈もつきません。したがって、こちらに信心があれば、現証ははっきりします。現証がでないのは、信心がないからなのです。

ともあれ、一生を通じてみなくてはわからない。誹謗した人の罪がどんなものであるか、どんな現証があらわれるか、最後はみえるのです。

命のかぎり題目を唱えよ

縦たとひ頸くびをば鋸のこぎりにて引き切り・剛どうをば後ひしほ鐘こを以て・つつき・足にはほだしを打うってきり鐘を以てもむとも、命のかよはんほどは南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經と唱えて唱へ死しに死しるな

らば釈迦・多宝・十方の諸仏・靈山会上にして御契約なれば須臾の程に飛び来りて手を取り肩に引懸けて靈山へ・はしり給はば二聖・二天・十羅刹女は受持の者を擁護し諸天・善神は天蓋を指し幡を上げて我等を守護して慥かに寂光の宝刹へ送り給うべきなり、あらうれしや・あらうれしや。

厳しい御文です。「縦ひ頸をば鋸にて引き切り」——首を鋸で引き切られても、「足を以て・つつき」——胴をひしほこでつきさされても、「足にはほだしを打ってきりを以てもむとも」——足には足かせをかけて、きりでもんだとしても、ということですよ。

「命のかよはんほどは南無妙法蓮華經・南無妙法蓮華經と唱えて唱へ死に死するならば」

どのような苦しい目にあっても、どのような大難にあっても、命のあるかぎりには、南無妙法蓮華經と題目を唱えぬいていきなさい、とのおおせです。

「釈迦・多宝・十方の諸仏・靈山会上にして御契約なれば須臾の程に飛び来りて手を取り肩に引懸けて靈山へ・はしり給はば」

そのようにして死ぬならば、釈迦、多宝、それから十方の諸仏は、法華經の靈山の会座で法華經の行者を守ることを誓っていますから、たちまちのうちに飛んできて、手を取り、肩に負って、靈山へ走って連れていってくれるというのです。

「二聖・二天・十羅刹女は受持の者を擁護し」

「二聖」とは、藥王菩薩と勇施菩薩です。「二天」とは、持国天王と毘沙門天王です。それから十羅刹女等、これらの諸仏、諸天が「受持の者」、すなわち御本尊のために大難と戦いぬいたものを、擁護しだきかかえてくれる。

「諸天・善神は天蓋を指し幡を上げて我等を守護して慥かに寂光の宝刹へ送り給うべきなり」
諸天善神も、天蓋を指し幡をあげて、われわれを守護して、たしかに常寂光の仏国土へ送りとどけてくれるとおおせです。

ここところは、簡単にいえば、そのように信心を貫き通したのだから、成仏、永遠の幸福はまちがいないということです。因果俱時です。受持即觀心で、御本尊を守りきり、信心を貫き通したのですから、永久に仏の境界で、色心ともに絶対の幸福境涯に生ききっていけると、こういう意味なのです。

文永十年 癸酉 五月 日

日 蓮 在御判

人々御中へ

此の書御身を離さず常に御覽有る可く候

「此の書御身を離さず常に御覽有る可く候」

この「如説修行抄」を身口意しんくういの三業さんごうで読みきっていきなさい、とのおおせです。すなわち御本尊に向かつて題目を唱え、折伏をしきって、広宣流布に邁進まいしんしゆくことが、この「如説修行抄」を読んだことになるのです。

(昭和四十一年六月と七月 高等部講義)